

秋田県文化財調査報告書第495集

松田柵跡

第143・145・147次調査

—県営ほ場整備事業(本堂城回地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV—

2014・9

秋田県教育委員会

題字 新野直吉 書

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土
の「岩偶」です。

縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

松田柵跡

第143・145・147次調査

—県営ほ場整備事業(本堂城回地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV—

2014・9

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、本県は米作を中心とする農業県であり、将来にわたり持続しうる環境を整備するための、用排水路網の整備と水田の大区画化を旨とした規模拡大と、担い手育成を目的とするほ場整備が課題です。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に先だって、平成23・24・25年度の3か年にわたりて実施された国指定史跡・払田柵跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、材木塀が2か所、材木塀布掘溝跡が9か所確認されたほか、土坑や溝跡、柱穴や河川跡などが検出され、払田柵跡北～東部沖積地における外柵線の正確な位置や当時の地形と遺構の配置状況が明らかになりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました秋田県仙北地域振興局農林部農村整備第二課に、心から感謝申し上げるとともに、文化庁記念物課、史跡管理団体であるに大仙市教育委員会、美郷町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成26年9月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　言

- 1 本書は、本堂城回地区は場整備事業に伴い、平成23～25年度に発掘調査した払田柵跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、調査対象地が史跡払田柵跡内にあたることから、払田柵跡調査事務所で継続的に実施している調査年次に組み込む形で、第143・145・147次調査として収めたもので、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書の4冊目である。
- 3 調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報、払田柵跡調査事務所年報などによって公表されているが、本書を正式なものとする。
- 4 扟田柵跡の所在地は、秋田県大仙市払田と秋田県仙北郡美郷町本堂城回にまたがり、遺跡略記号は7DHTである。
- 5 発掘調査は、秋田県教育委員会が秋田県仙北地域振興局農林部農村整備第二課から調査の依頼を受けて、秋田県埋蔵文化財センターが平成23年～25年度に実施した。調査期間・調査面積・調査主体者・調査担当者・総務担当者は以下のとおりである。

(1) 扉田柵跡第143次調査

調査期間 平成23年9月12日～12月9日（本調査）

平成24年2月14日、16日、22日（立ち合い調査）

調査面積 1,217m²

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 加藤 竜（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主任）

総務担当者 小松正典（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主査）

(2) 扉田柵跡第145次調査

調査期間 平成24年8月24日～11月6日（本調査）

平成25年1月8日、28～30日（立ち合い調査）

調査面積 3,368m²

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 栗澤光男（秋田県埋蔵文化財センター調査班 副主幹）

加藤 竜（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主任）

佐々木尚人（秋田県埋蔵文化財センター調査班 学芸主事）

山田祐子（秋田県埋蔵文化財センター資料管理活用班 文化財主事）

高橋和成（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

長澤隆広（秋田県埋蔵文化財センター調査班 調査・研究員）

総務担当者 柴田真希（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主査）

(3) 扉田柵跡第147次調査

調査期間 平成25年8月24日～11月6日（本調査）

平成26年1月14～15日、2月3日（立ち合い調査）

調査面積

80m²

調査主体者

秋田県教育委員会

調査担当者

高橋和成（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

佐々木尚人（秋田県埋蔵文化財センター調査班 学芸主事）

赤星純平（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

総務担当者

柴田真希（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主査）

- 7 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の25,000分の1『六郷』、払田柵跡調査事務所提供的
払田柵跡調査実施位置図、秋田県仙北地域振興局農林部農村整備第二課提供の1,000分の1工事路
線計画図である。
- 8 遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團
法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。
- 9 出土した木製品の一部は株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託した。
- 10 本書の執筆は、加藤 竜、佐々木尚人、高橋和成が行った。
- 11 本書の編集は、高橋和成が行った。
- 12 調査に係る全ての資料は、秋田県教育委員会が保管している。
- 13 発掘調査及びに本報告書作成にあたり、史跡払田柵跡調査指導委員である秋田大学名誉教授・秋
田県立博物館名誉館長 新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授 岡田茂弘氏、富山大学名誉教
授黒崎直氏、秋田大学名誉教授熊田亮介氏から指導を賜った。
- 14 発掘調査では、文化庁記念物課（浅野啓介・国武貞克）、大仙市教育委員会（熊谷直栄・齊藤浩
志・佐藤健太郎）、美郷町教育委員会（亀井崇 晃）、美郷町農政課（山形博康）の協力を得た。

凡 例

- 1 遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結
果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。
- S A · · · 角材列・柱列 S D · · · 溝跡 S K · · · 土坑
S K P · · · 柱穴様ピット S L · · · 河川跡
- 2 土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本土層に、算用数字を遺構土層に使用して区別し
た。
- 3 古代の土器のうち、須恵器には断面に網カケをして土師器と区別した。また、墨書き土器は文字が
記されている面に写真データを貼り付けトレースした。
- 4 土器の拓影配置は、表裏を採拓した場合は、断面の左側に表面、右側に裏面を配置した。表面だ
け採拓した場合は、断面の左側に配置した。
- 5 使用した網カケの凡例については個々の挿図中に示した。

目 次

序

例言・凡例・目次

挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	6
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	7
第1節 遺跡の位置	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 調査の方法と成果	13
第1節 調査の方法	13
第2節 基本層序	14
第4章 調査の記録	16
第1節 第143次調査の検出遺構と遺物	16
第2節 第145次調査の検出遺構と遺物	45
第3節 第147次調査の検出遺構と遺物	125
第4節 遺構外出土遺物	139
(1) 第143次調査	139
(2) 第145次調査	139
(3) 第147次調査	139
第5章 総括	145
図版 1 ~ 20	
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

第1図	私田標跡と周辺の古代～近世の遺跡	10	第44図	13区の遺構（2）SK2051, 2052, 2053～2059	84
第2図	私田標跡調査実施位置図	12	第45図	13区の遺構（3）SK2060, 2063, 2066, SKP2061, 2062, 2064, 2065, 2067	85
第3図	私田標跡第143次調査 調査区位置図 (外縁東門周辺地区)	25	第46図	13区の遺構（4）SL2044, 2045	86
第4図	1区中央部の遺構（1）SL2014	26	第47図	13区の遺構（5）SL2045	87
第5図	1区中央部の遺構（2）SL2014, 2015	27	第48図	13区の遺構（6）SD2072～2079	88
第6図	1区中央部の遺構（3）SL2014, 2015	28	第49図	13区の遺構（7）SD2075～2079	89
第7図	1区中央部の遺構（4）SL2016, 2017	29	第50図	13区の遺構（8）SD2080～2090	90
第8図	1区中央部の遺構（5）SL2016, 2017	30	第51図	13区の遺構（9）SD2091～2104	91
第9図	1区南部の遺構 SL2018	31	第52図	13区の遺構（10）SD2105, SK2106	92
第10図	1区北部の遺構 SD2003	32	第53図	13区の遺構（11）SD2107	93
第11図	2区の遺構 SA460	33	第54図	13区の遺構（12）SL2115	94
第12図	3区の遺構（1）SD2004	34	第55図	13区の遺構（13）SL2116	95
第13図	3区の遺構（2）SD2005, 2006	35	第56図	13区の遺構（14）SL2118	96
第14図	4区の遺構（1）SD2007	36	第57図	13区の遺構（15）SL2117	97
第15図	4区の遺構（2）SD2008, 2009	37	第58図	13区の遺構（16）SL2117	98
第16図	4区の遺構（3）SL2019	38	第59図	13区の遺構（17）SD2119, SL2046	99
第17図	5区の遺構（1）SD2010	39	第60図	13区の遺構（18）SD2120	100
第18図	5区の遺構（2）SD2011, 2012	40	第61図	15区の遺構（1）SA2121	101
第19図	6区の遺構（1）SD2013	41	第62図	15区の遺構（2）SA2122	102
第20図	6区の遺構（2）SL2020, 2021, 2022	42	第63図	15区の遺構（3）SL2123	103
第21図	6区の遺構（3）SL2023, 2024	43	第64図	15区の遺構（4）SL2124	104
第22図	7区の遺構 SA933, SL2025	44	第65図	16区の遺構（1）SK2125	105
第23図	第145次調査 トレチ・遺構配図略図（1）	63	第66図	16区の遺構（2）SK2127, SKP2126	106
第24図	第145次調査 トレチ・遺構配図略図（2）	64	第67図	16区の遺構（3）SL2128	107
第25図	8区の遺構（1）SL2028	65	第68図	17区の遺構（1）SL2129	108
第26図	8区の遺構（2）SL2029	66	第69図	17区の遺構（2）SL2130	109
第27図	9区の遺構（1）SL2030, 2031	67	第70図	17区の遺構（3）SL2131	110
第28図	9区の遺構（2）SL2032	68	第71図	18区の遺構（1）SD2132, SK2133, SL2129	111
第29図	10区の遺構（1）SL2033, 2036	69	第72図	18区の遺構（2）SL2130	112
第30図	10区の遺構（2）SL2035	70	第73図	18区の遺構（3）SK2134	113
第31図	12区の遺構（1）SL2036, 2043, 2044	71	第74図	18区の遺構（4）SL2135	114
第32図	12区の遺構（2）SL2036, 2043, 2044	72	第75図	20区の遺構 SL2136	115
第33図	12区の遺構（3）SL2040, 2041	73	第76図	遺構出土遺物	116
第34図	12区の遺構（4）SL2040, 2041	74	第77図	S L2040出土遺物（1）	117
第35図	10・12区の遺構 SL2034, 2046	75	第78図	S L2040出土遺物（2）	118
第36図	12区の遺構（5）SL2042	76	第79図	S L2136出土遺物（1）	119
第37図	12区の遺構（6）SL2042	77	第80図	S L2136出土遺物（2）	120
第38図	12区の遺構（7）SL2038, 2039	78	第81図	S L2136出土遺物（3）	121
第39図	12区の遺構（8）SL2038, 2039	79	第82図	S L2136出土遺物（4）	122
第40図	12区の遺構（9）SL2045	80	第83図	S K P2061出土遺物	124
第41図	12区の遺構（10）SL2037	81	第84図	第147次調査	
第42図	12区の遺構（11）SL2037	82		調査区位置図（外縁北門周辺地区）	134
第43図	13区の遺構（1）SK2051, 2052, SKP2050, 2053～2059	83	第85図	第147次調査 調査区位置図（外縁東門周辺地区）	135

第86回	第147次調査地点平面図（1）	136	第91回	第143次調査 遺構外出土遺物（2）	141
第87回	第147次調査地点平面図（2）	137	第92回	第143次調査 遺構外出土遺物（3）	142
第88回	第147次調査地点平面図（3）	138	第93回	第145次調査 遺構外出土遺物（1）	143
第89回	第147次調査 遺構外出土遺物	139	第94回	第145次調査 遺構外出土遺物（2）	144
第90回	第143次調査 遺構外出土遺物（1）	140			

表目次

第1表	払田柵跡周辺の主な 古代・中世・近世跡跡一覧	11	第6表	第147次調査 遺構外出土遺物観察表	139
第2表	柱穴採ビット一覧表	58	第7表	第143次調査 遺構外出土遺物観察表（1）	140
第3表	遺構内出土遺物観察表	116	第8表	第143次調査 遺構外出土遺物観察表（2）	141
第4表	SL2040, 2136出土遺物観察表	123	第9表	第143次調査 遺構外出土遺物観察表（3）	142
第5表	SKP2061出土遺物観察表	124	第10表	第145次調査 遺構外出土遺物観察表（1）	143
			第11表	第145次調査 遺構外出土遺物観察表（2）	144

図版目次

第143次調査

図版1	1 調査区遠景（南西→） 2 調査区遠景（西→） 3 調査区遠景（北西→）	
図版2	1 1区北部調査完了状況（北→） 2 1区北部S D2003土層断面（西→） 3 1区中央部調査完了状況（北東→）	
図版3	1 1区中央部S L2014土層断面（北西→） 2 1区中央部S L2014・2015土層断面（北西→） 3 1区中央部S L2015土層断面（北西→）	
図版4	1 1区中央部S L2016土層断面（北西→） 2 1区中央部S L2017土層断面（北西→） 3 1区中央部S L2017土層断面（北西→）	
図版5	1 1区中央部S L2017土層断面（北→） 2 1区南部調査開始前状況（南西→） 3 1区南部S L2018土層断面（南西→）	
図版6	1 2区調査完了状況（西→） 2 2区S A460土層断面（北→） 3 3区東西ライン調査完了状況（西→）	
図版7	1 3区S D2004完掘状況（南→） 2 3区S D2005土層断面（南→） 3 3区S D2006完掘状況（東→）	
図版8	1 4区調査完了状況（西→） 2 4区S D2007完掘状況（北→） 3 4区S D2008完掘状況（南→）	
図版9	1 4区S D2009完掘状況（南→） 2 4区S L2019土層断面（南西→） 3 5区調査完了状況（東→）	
図版10	1 5区S D2010完掘状況（南→） 2 5区S D2011完掘状況（北→） 3 5区S D2012完掘状況（北→）	
図版11	1 6区調査完了状況（東→） 2 6区S D2013完掘状況（北→） 3 6区S L2020土層断面（南西→）	
図版12	1 6区S L2021土層断面（南西→） 2 6区S L2022土層断面（南西→） 3 6区S L2023土層断面（南西→）	
図版13	1 6区S L2024土層断面（南→） 2 7区調査完了状況（西→） 3 7区S A933確認状況（北西→）	

第145次調査

図版14	1 調査区全景①政府側から（南→） 2 調査区全景②政府側から（南→） 3 13区S K 2051, 2052, SK P 2053完掘状況（北→）	
図版15	1 13区S K P 2057完掘状況（北→） 2 13区S D2073～2077確認状況（東→） 3 13区S D2073～2077完掘状況（西→）	
図版16	1 13区S D2107完掘状況（東→） 2 13区S D2120土層断面（北→） 3 8区東西トレンド精査完了（南→）	
図版17	1 8区東西トレンド精査完了（東→） 2 15区 S A2121完掘状況（北→） 3 15区 S A2122完掘状況（南→）	

第147次調査

図版18	1 西側調査区全景（北西→） 2 西側調査区全景（西→） 3 東側調査区全景（南西→）	
図版19	1 W 5区角材列完掘状況（南西→） 2 W 15区布掘溝跡検出状況（南西→） 3 W 26区南側括張部検出溝跡確認状況（西→）	
図版20	1 E 13区櫛木検出状況（北→） 2 E 14区布掘溝跡確認状況（北→） 3 E 12区東門柱穴確認状況（南→）	

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

本堂城回地区を対象とした農地集積加速化基盤整備事業（ほ場整備事業）は、既存の用排水路回収により用水の確保・洪水時の湛水（たんすい）防止のほか、適切な水田管理と農業経営の安定化及び合理化を図るものである。

同地区のほ場整備計画は平成18年に示されたが、事業対象地区は払田柵跡の史跡指定範囲と重なる。のことから史跡内の現状変更について、文化財保護室、文化庁文化財材保護部記念物課、高梨土地改良区、仙北地域振興局農村整備第二課、農林水産部の担当者間で随時協議を行ってきた。

ほ場整備事業への対応に先立ち、払田柵跡の保存管理計画の見直しの必要が生じ、文化庁の指導により、平成12・13年度の2か年、旧仙北町が事業主体となり、国・県補助事業で払田柵跡保存管理計画策定事業を実施した。その成果は、平成14年3月に『払田柵跡第2次保存管理計画書』（仙北町教育委員会）として公刊された。

平成15年に入り、試掘、発掘、事業の進め方や現状変更許可申請手続きについて、事業に関係する担当者間での打ち合わせを進めていった。最終的には『公共公益事業における既存施設の改修』にあたる箇所のみを整備することで合意した。既存施設とは、道路・用水路・排水路であり、当該ほ場整備事業区域（対象面積72,589m²）において、対象の施設が占める面積は9,967m²と算定された。

これを受けて秋田県教育委員会教育長は平成15年10月14日付で文化庁長官あてに「史跡払田柵跡の現状変更（試掘調査）について」の申請書を提出した。同年11月21日付で文化庁長官より現状変更許可通知があり、11月25日より確認調査（第124次調査）に入った。第124次調査は、ほ場整備事業の対象区全域を対象とした試掘であり、これは今後の調査に向けての遺構・遺物の分布や遺構面までの深度、土質の状態を確認することを目的とした。調査の性質上、確認調査の担当は払田柵跡調査事務所職員が担当した。

第124次調査の成果を受けた協議を経て、本堂城回地区農地集積加速化基盤整備事業の対象区である史跡北東側の百目木地区において『払田柵跡第2次保存管理計画書』に従って用水路・排水路などの改修を対象とすることになり、当該ほ場整備事業区域の対象面積は121,000m²と算定された。県教育委員会は20年11月4日から12月25日まで、払田柵跡調査事務所の協力のもと、埋蔵文化財センターが担当して確認調査（第138次調査）を実施した。翌21年度には事業行程と調査行程の調整・準備を進めたが、地元との緻密な調整が必要となり、事業開始年度が平成23年度に変更された。

平成22年度には工程の詳細を再度協議し、ほ場整備事業に対応する本調査は23年度から3か年で実施することとした。すなわち23年度に外柵東門周辺地区、24年度に外柵北門周辺地区、25年度に両地区の暗渠施工部分を調査することとし、26年度に最終的な調査報告書を刊行する計画とした。

県教育委員会教育庁は、平成23年6月22日付で発掘調査の実施を条件に附した用排水路設置工事について、文化庁長官あて現状変更申請を進達し、同年7月15日付で現状変更許可が通知された。

第2節 発掘調査の経過

平成23年度から平成25年度までの3か年で実施した発掘調査の経過は次のとおりである。

第143次調査（平成23年度）

【第1週】9月12日～9月16日

12日、調査員1名、発掘作業員12名の体制で発掘調査を開始した。作業員に作業内容の説明や諸注意をおこない、発掘機材の搬入、環境整備をおこなった。その後、外柵の残存状況を確認し、排水路の設計変更が必要かを判断するため4区から調査を開始した。遺構の検出は壁と底面でおこなった。15日に3区東端から18mの所で、外柵の布掘溝跡とみられる溝状プラン（SD2007）を検出した。西端部では溝跡（SD2005）を検出した。表土中やフリュームの裏込め土から数点の土師器、須恵器が出土した。

【第2週】9月20日～23日

20日・21日は台風のため作業を中止し、22日から先週検出した遺構の精査と3区、4区の調査を開始した。SD2007からは礎板が出土した。

【第3週】9月26日～9月30日

3区、4区の遺構検出と記録をおこなう。3区の調査はこの週で終了した。30日は降雨のため、調査を中止した。

【第4週】10月3日～10月7日

4区の記録をおこなう。5区、1区の遺構検出と記録おこなう。5区からSD2011、SD2012を検出した。

【第5週】10月11日～10月14日

1区、2区、5区の遺構検出と記録をおこなう。2区からSA460、5区からSD2010を検出した。

【第6週】10月17日～10月21日

17日は降雨のため作業を中止した。19日は調査可能場所がなくなったため作業員は休みにし、1区のフリューム抜き取り立ち合い調査をおこなった。2区、5区の記録をおこなった。1区は遺構の検出と記録をおこなった。

【第7週】10月24日～10月28日

24、25、26日工事遅延により調査可能場所がなかったため作業員は休ませ、2区の記録をおこなつた。27日に2区の記録をおこない、28日に3区の記録と3区、4区のフリューム抜き取り立ち合いをおこなった。

【第8週】10月31日～11月4日

1区、3区、4区の記録をおこなった。

【第9週】11月7日～11月11日

1区の遺構検出と記録をおこなう。2区の記録をおこなう。

【第10週】11月14日～11月18日

1区の記録と6区の遺構検出をおこなう。

【第11週】11月21日～11月25日

6区の遺構検出をおこなう。

【第12週】11月28日～12月2日

6区の記録をおこなう。7区の遺構検出と記録をおこなう。

【第13週】12月5日～12月9日

5区、6区、7区の記録をおこなう。7日からは機材の整理・収納をおこなった。9日をもって一連の調査を終了した。

第145次調査（平成24年度）

【第1週】8月20日～8月23日

20日、調査員5名、補佐員1名、発掘作業員34名の体制で発掘調査を開始した。作業員に作業内容の説明や諸注意をおこない、発掘機材の搬入、環境整備をおこなった。その後、12区（北側）と20区（南側）に分かれて遺構検出を開始した。21日に20区に残っていた沈殿槽の抜き取り立ち合いをおこなった。23日から12区に並行して設置する13区の遺構検出にも着手した。

12区の河川跡から土師器、須恵器が出土した。

【第2週】8月27日～8月31日

12、13区の遺構検出をおこなった。20区は遺構検出と記録をおこなった。13区には外柵推定ラインと交差する地点があり、遺構検出をおこなったが、布掘溝跡は検出しなかった。20区は記録終了部分を原因者に引き渡した。20区から河川跡を検出し、土師器、須恵器、墨書き土器、丸瓦が出土した。

【第3週】9月3日～9月7日

12、13、20区の遺構検出と記録をおこなった。各区は調査が終わった部分から原因者に引き渡した。9日には17、18区の古いフリュームの抜き取り立ち合いをおこなった。12区から河川跡を検出し、堆積層から土師器、須恵器、木製品が多数出土した。

【第4週】9月10日～9月14日

12、13、20区の遺構検出と記録をおこなった。17、18区の遺構検出を開始した。20区は全ての調査が終了したため原因者に引き渡した。12区から検出した河川跡から平瓦が出土した。

【第5週】9月18日～9月21日

12、13、17、18区の遺構検出と記録をおこなった。12、13区は調査の終了した140m、17、18区は調査の終了した80mをそれぞれ原因者に引き渡した。21日は降雨のため、作業は中止した。

【第6週】9月24日～9月28日

12、13、17、18区の遺構検出と記録をおこなった。9、10、15、16区の調査を開始した。17、18区のうち調査の終了した160mについては原因者に引き渡した。15区の西側で布掘溝跡を2か所検出した（SA2121、SA2122【2121と同一遺構と思われる】）。掘り下げてみると角材列が残存していることが分かった。

【第7週】10月1日～10月5日

9、10、12、13、16、17、18区の遺構検出と記録をおこなった。8区（北門付近）の調査を開始した。12、13区は調査が終了した部分を、17区は調査が全て終了したため、原因者に引き渡した。18区は車両などの通行のために敷いている鉄板の下以外の調査を終了し原因者に引き渡した。敷鉄板の下は調査の進み具合を見ておこなうことになった。16区は検出遺構の記録作成をおこなった。15区で角材

第1章 調査の概要

列を検出したことから15区のフリューム設置工事の一部を変更することになった。

【第8週】10月9日～10月12日

8、9、10、12、13、15、16区の遺構検出と記録をおこなった。8区から河川跡を検出したが、北門関係の遺構は未検出である。9、10区から河川跡を検出し、精査を開始した。12区と13区を跨ぐ3条の河川跡を検出し、精査を開始した。15区は調査と並行して角材列（S A2121、2122）の記録作成を進めた。16区は調査が終了したため、原因者に引き渡した。11日は降雨のため、作業を中止した。

【第9週】10月15日～10月19日

8、9、10、12、13、15区の遺構検出と記録をおこなった。8区は調査範囲を拡大して遺構検出をおこなったが、北門関係の遺構は検出されなかった。9区は工事の都合上未着手の一部を除き原因者に引き渡した。10区は調査を終了し、原因者に引き渡した。15区は検出した角材列（S A2121、2122）を養生した後、原因者に引き渡し、継続して遺構検出と記録をおこなった。

【第10週】10月22日～10月26日

8、12、13区の遺構検出と記録をおこなった。11、14区の調査を開始した。8区は調査範囲を拡大して遺構検出をおこなったが、北門関係の遺構は検出されなかった。11、12区は調査を終了し、原因者に引き渡した。13区は調査の終了した部分を原因者に引き渡した。14区は粗掘りが完了した。18区の敷設鉄板を撤去し遺構検出と記録をおこない、原因者に引き渡した。23日は降雨のため、作業を中止した。

【第11週】10月22日～10月26日

8、13、14、15区の遺構検出と記録をおこなった。8区は調査範囲を拡大して遺構検出をおこなったが、北門関係の遺構は検出されなかたため、記録作成後、埋め戻した。13、14区は調査を終了し、原因者に引き渡した。15区工事用道路として使用していた場所以外は調査が終了し、原因者に引き渡した。

【第12週】11月5日～11月6日

15区の工事用道路として使用していた場所の遺構検出と記録をおこない、調査終了後、原因者に引き渡した。これで全体の調査が終了した。発掘機材の整理・収納を行い一連の調査を終了した。

第147次調査（平成25年度）

【第1週】10月7日～10月11日

15日、調査員3名、発掘作業員13名の体制で発掘調査を開始した。作業員に作業内容の説明や諸注意をおこない、発掘機材の搬入、環境整備をおこなった。調査範囲は東側調査区と西側調査区に分かれており、西側調査区の西端から調査を開始した。調査トレンチ番号はW1、W2…とした。W1からW34まで調査トレンチを設定し、遺構検出と記録をおこなった。W1からW19、W33、34からは布掘溝跡を検出した。W20からW32の調査トレンチでは遺構を検出しなかった。検出した布掘溝跡が外柵か確認するためにW5を掘り下げた所、角材列を検出した。W22からW32のトレンチは遺構検出のために南方向に拡張した。実測で使用する払田柵跡の座標の位置を確認した。雨の日が多く、遺構検出できなかつたり、午後の作業を中止せざるをえなかつた。

【第2週】10月15日～10月18日

西側調査区（W22～32）と東側調査区（E 1～8）に分かれて調査をおこなつた。

西側調査区のW22からW32で南方に拡張したトレントのうちW26、28、29、30、31、32で外柵推定線より南で浅い溝跡を検出した。W24、25では遺構の検出はなかったが、遺物包含層が残っており須恵器など土器片が出土した。東側調査区のE 1～8全ての調査トレントから布掘溝跡を検出した。これらを一連の遺構と捉えS A08とした。16日は台風の影響で調査は中止した。

【第3週】10月21日～10月25日

西側調査区はW 1から34までの記録作成をおこない、全て終了した。東側調査区は新たにE 9から14までの調査トレントを設定した。E 9から11、E13から布掘溝跡を検出した。このうちE 9と13の布掘溝跡は既設暗渠により一部が搅乱されている状況を確認した。外柵東門の位置を特定するためにポーリング棒で門柱の位置を確認した。南東隅の門柱はポーリング棒で確認出来なかつたため、第138次調査トレントを掘り返し、その位置を確認した（E 12トレント）。

【第4週】10月28日～11月1日

布掘溝跡および角材列の残存状況の良い西側の新規暗渠工事について文化財保護室と地域振興局農村整備第二課との協議により既設暗渠を利用し新規暗渠を埋設することになった。これにより西側調査区では既設暗渠により布掘溝跡が壊されている部分を調査する事になった。この調査により西側調査区で13か所を確認した。東側調査区でも同様に既設暗渠と布掘溝跡との交点を調査し、4か所の交点を確認した。検出した既設暗渠が新規暗渠の設置に適しているか否かは次週調査する。調査トレントは記録作成が終わり次第順次埋め戻しをおこなった。

【第5週】11月5日～11月8日

調査区内の図面などの記録が終了したことから、調査区に残してあるセクションポイントの計測をトータルステーションでおこなった。既設暗渠の埋設状況を調査した結果、新規暗渠を埋設するのに十分な深度があったのは、西側調査区で4か所、東側調査区で4か所になった。

【第6週】11月11日～11月15日

既設暗渠を利用して新規暗渠を埋設することになったが、新規暗渠工事は来年1月中旬頃に着工する予定である。そのため、雪中でも分かるように十分な長さで目立つ杭を既設暗渠の南北端に設置することになった。杭は工事担当業者である細井技研より提供を受けセンター側で塗装して南北の畦に2本ワンセットで設置した。設置箇所は西側調査区は6か所（既設暗渠4か所に布掘溝跡を検出しなかつた2か所）、東側調査区は4か所（既設暗渠）である。この週から、まとまつた降雪があり調査区やヤード等の除雪作業を定期的におこなった。

【第7週】11月18日～11月22日

東側調査区は、水はけが悪く調査トレントの影響で農作業中に機械がぬかるみにはまり動けなくなる危険性がある。この対策を文化財保護室と地域振興局農村整備第二課が協議した結果、東側調査区の調査トレントに厚さ20cm程の砂を入れて埋め戻すことになった。既に全ての調査トレントは埋め戻しを完了しており、積雪も20cm程あったことから調査トレントに砂を運び、春先に暗渠工事の埋め戻し作業の時に入れてもらうことにした。余剰分の砂は工事担当業者である細井技研に預かってもらうことにした。22日に調査区に設置していたセクションポイントの釘を回収し、発掘機材の整理・収納を行い一連の調査を終了した。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、発掘調査終了後に秋田県埋蔵文化財センターで行った。3次にわたる発掘調査は、各年度末毎に刊行される『払田柵跡調査事務所年報』にも、その調査概要を掲載させることにしていたため、遺構配置図作成と遺構写真の選別を中心に作業を進めた。第143次調査の概要是『払田柵跡調査事務所年報2011』（以下書名を『年報+年号』と略記）に、第145次調査は『年報2012』に、第147次調査は『年報2013』にそれぞれ掲載された。

出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測と採拓を行った。実測図はデジタルトレースで行い、拓影図はスキャナーで取り込んで挿図の作成を行った。遺物の写真撮影のうち墨書き器は赤外線カメラで撮影し、遺物図版を作成した。検出遺構については、調査で記録作図した実測図を基に第2原図を作成した後、デジタルトレースを行って挿図に完成した。

現地調査が終了した平成25年度は過去3年間のデータを統合させ、一冊の報告書にまとめる作業をおこなった。

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

払田柵跡は、秋田県大仙市払田・仙北郡美郷町本堂城回にある古代城柵である。遺跡は雄物川の中流域に近く、大仙市大曲地区の東方約6km、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置する。遺跡は、第三紀硬質泥岩からなる真山・長森の小丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（鳥川）、南側を丸子川（鞠子川、旧名：荒川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

遺跡については、明治35・36（1902・03）年の千屋村（現美郷町）坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治39（1906）年頃から開始された高梨村（現大仙市）耕地整理事業の際に土中に埋もれ木のあることが知られていた。その後、この埋もれ木について地元の後藤寅之助（宙外）・藤井東一（甫公）らが注目し、氏らによって歴史的遺産であることが判明した。

昭和5年3月、高梨村が調査を実施したが、その中心となつたのは後藤寅之助で、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われ遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和6年3月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、昭和63年6月29日付けで史跡の追加指定がされ現在に至つている。史跡指定面積は894,618.04m²である。

昭和40年代に入り、史跡指定地域内外の総合整備パイロット事業等の計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町（現大仙市）と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することとし、昭和49年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した（昭和61年4月「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称）。幸い、地元管理団体である仙北町及び地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

遺跡は真山・長森を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物には5期の変遷があり、創建は9世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡I—政庁跡—』（昭和60年3月）として公刊された。

区画施設である外柵は、真山・長森の二つの丘陵を囲むようにしてあり、東西1,370m南北780mの長方形で、標高32～37m、総延長3,654m、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000m²である。外柵は1時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、長森を取り囲むようにしてあり、東西765m、南北320mの長方形で、面積約163,000m²、最高地は標高53mである。外郭線の延長は約1,780mで石垣・築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門を配する。外郭線は全体に4時期わたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、從来それぞれ外郭線・内郭と呼称されていたが、それまでの調査成果を踏まえ、平成7年から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は、報告書『払田柵跡II—区画施設—』（平成11年3月）として公刊された。

出土品には、須恵器・土師器・綠釉陶器・灰釉陶器・瓦質土器・青磁（越州窯系）・瓦・硯などの土器・陶磁器類のほか、石帶・砥石・金床石などの石製品、鐵・鎌・刀子・釘・紡錘車などの鉄製品、鐵（銅）滓・斎串・曲物・挽物・鋤・楔などの木製品、漆紙文書（6点）・木簡・墨書土器・籠書土器などの文字資料もある。

木簡（絵馬2点・刻字を持つ角材などを含む）は108点確認されており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大穀二石八斗八升」「嘉祥二年正月十日」「別當子弟大伴寧人」「鹿毛牡馬者」「矢田部弓取」「北門」「秋葉」「山本」「最上」「最上四」などと記されている。

墨書・籠書土器は約600点出土・採集されており、一小隊御前下・大津郷・鷹空上・懲悔・小勝・音丸・北門・北預・厨家・轍大・中大・中方・厨・官・舎・館・廳・宅・新・吉・秋・郡・千・主・長・酒・安・賀・全・成・前・伴・部・左・文・名・上・下・矢・車・工・益・山・就・立・生・平・延・圓・集・大・木・中・仲・犬・方・継・廳・春・又・十・七・（以上墨書）、「出羽口 郡口男賀凡酒杯」（籠書）などの文字が認められる。

第2節 歴史的環境

本節では、払田柵跡周辺域において発掘調査が行われた古代遺跡について紹介する。なお遺跡名の次の（ ）内は、遺跡番号を表す。位置などは第1図と第1表を参照されたい。

内村遺跡（54-14） 美郷町千屋：秋田県教育委員会が昭和55年に調査

払田柵跡の南東約3kmに位置する10世紀前半～中頃の集落遺跡である。堅穴建物跡3棟、土坑、焼土遺構などが検出された。出土遺物は、土師器杯・皿・甕類・須恵器長頸壺・甕・綠釉陶器・青磁皿・和鏡などがある。綠釉陶器は近江産・青磁皿は中国越州窯系である。和鏡は、直径12.4cmの瑞花鳳八花鏡である。出土遺物に綠釉陶器・中国産青磁や和鏡が含まれることから、払田柵に関連の深い集落跡と推測される。

厨川谷地遺跡（54-3） 美郷町土崎：秋田県埋蔵文化財センターが平成13年に調査

払田柵跡外柵の南東約350mの至近距離に位置するが、大正4年（1915年）に水田下から約1万2000枚の錢貨が偶然掘り出されたことから中世の遺跡（埋蔵錢出土地）として周知されていた。

調査の結果、9世紀後半～10世紀前半の払田柵で執り行われる祭祀を挙行する場（祭祀遺構）であったことが判明した。祭祀の実態は、大きく2時期の変遷が推測された。9世紀後半では、複数の旧河川とそれに囲まれた微高地に、柵列を目隠し塚とした掘立柱建物跡で祭祀が執り行われ、10世紀に入ると建物・柵列は滅失するものの、微高地の新たに作った土坑や自然の凹地を利用した祭祀が展開する。後者は、十和田火山噴火（西暦915年）という天災も契機に含まれる。一方、祭祀屋・土坑の周辺に広がる河川や湧水地点においても水辺での祭祀が執り行われ、木製祭祀具（斎串・人形・呪符木簡など）や墨書土器なども多量に出土した。

中屋敷II遺跡（54-5） 美郷町土崎：美郷町（旧千畑町）教育委員会が平成14・17年に、秋田県埋蔵文化財センターが平成14・15年に調査

払田柵跡の南東約1.5kmに位置する。調査の結果、縄文時代中期～晩期、弥生時代・古代・中世・

近世の集落跡であることが判明した。古代は堅穴建物跡や堅穴状遺構が点在する集落跡であり、10世紀前半代を中心とする時期である。

城方小屋遺跡（54-41） 美郷町本堂城回：美郷町教育委員会が平成19年に調査

平成18年に発見された遺跡であり、払田柵跡外柵東門跡の東側約150mに位置する。調査の結果、柵列跡、掘立柱建物跡、土坑などが検出された。柵列跡は溝内に材を埋設した痕跡（壅み）が認められるもので、軸線方向は北西-南東方向を指す。幅45cm前後の布掘溝跡が長軸約85m以上、短軸約60mの規模でU字状に確認され、楕円形に巡る可能性もある。溝跡堆積土中に十和田a火山灰が見られることから、西暦915年以前に柵列として機能していたものの、遺棄され材が抜き取られた後、溝状となった遺構に火山灰が堆積したと推測される。溝跡の軌跡は、西約100mに位置する木柴塀のそれと似る。払田柵跡の外側に別の区画施設が存在していた貴重な発見である。また土坑のうち1基は、形態・堆積土・遺物の出土状況から10世紀代の木棺を作う伸展葬墓と推測される。払田柵跡の外側隣接地に古代墓が発見されたのは、真山丘陵部での2例（火葬墓）に次ぐものである。

森崎II遺跡（54-43） 美郷町本堂城回：美郷町教育委員会が平成19年に調査

城方小屋遺跡の南側に隣接する遺跡である。調査の結果、9世紀中頃の堅穴建物跡が1棟出土された。払田柵跡周辺の沖積地部における堅穴建物跡の確認は、外柵西門東門（第9次調査）に次いで2例目である。

以上の他に、払田柵跡東方2km圏内では、墨書き土器が出土した下中村遺跡（54-29）、和鏡と墨書き土器が出土した飛沢尻遺跡（54-30）、墨書き土器が出土した森崎I遺跡（54-40）などの古代遺跡も点在する。

【第1表の註】

- 1 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62）年
- 2 秋田県教育委員会『秋田県中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 3 千畳町「古錢堀山來記」『千畳町郷土史』1988（昭和63）年
- 4 秋田県教育委員会『内村遺跡』秋田県文化財調査報告書第82集 1981（昭和56）年
- 5 千畳町教育委員会『中屋敷II遺跡』千畳町文化財調査報告書第6集 2004（平成16）年
美郷町教育委員会『中屋敷II遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第3集 2006（平成18）年
- 6 千畳町教育委員会『下二道跡・上飛沢遺跡』千畳町文化財調査報告書第7集 2004（平成16）年
- 7 秋田県教育委員会『羽川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第383集 2005（平成17）年
- 8 今村義教注『奥羽水慶家記（上）（下）』人物往来社 1966（昭和41）年
- 9 美郷町教育委員会『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町文化財調査報告書第1集 2005（平成17）年
- 10 山崎文幸『秋田・親音堂遺跡』『木簡研究』第26号 木簡学会 2004（平成16）年
- 11 大仙市教育委員会からの情報提供による。
- 12 秋田市教育委員会『中屋敷II遺跡』秋田県文化財調査報告書第384集 2005（平成17）年
- 13 美郷町教育委員会からの情報提供による。
- 14 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集
- 15 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（仙北地区）』2007（平成19）年
- 16 島田祐悦・高橋学「内村遺跡」「横手市史 資料編 考古」2007（平成19）年
- 17 山形博康「城方小屋遺跡・森崎II遺跡発掘調査の概要」『第34回古代城櫓官衙遺跡検討会資料集』2008（平成20）年

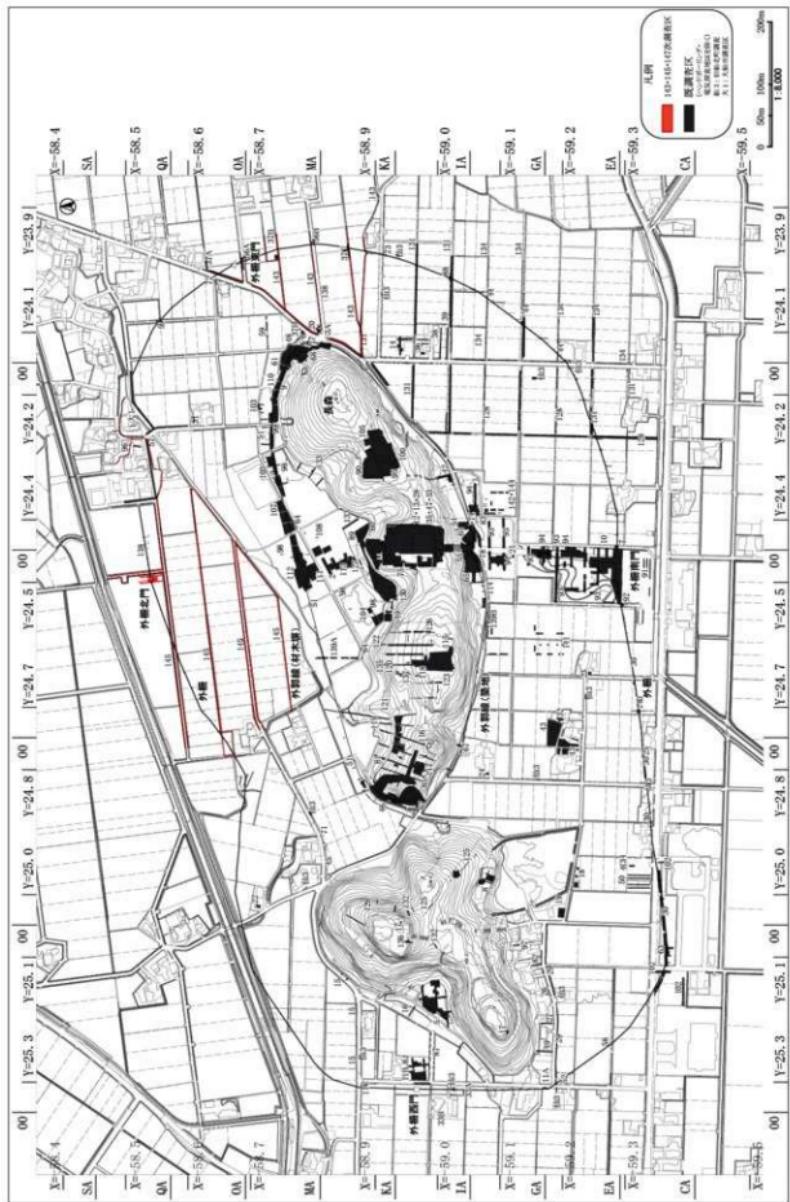


第1図 扱田塚跡と周辺の古代～近世の遺跡

第1表 払田柵跡周辺の主な古代・中世・近世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備考	註
212-53-1	払田柵跡	大仙市払田	古代城柵官衙遺跡（9世紀初頃～10世紀後半）	
434-54-1		美郷町本堂城回	集落（繩文）、墓地（中世）、城館（堀田城）	
212-53-2	繁昌Ⅰ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
212-53-3	繁昌Ⅱ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-4	上高梨遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-5	堀田城跡	大仙市払田	真山丘陵を利用した中世城館跡（払田柵跡内）	2・8
212-53-6	境田城跡	大仙市払田	中世城館跡：天正18年（1590）破却	2
212-53-7	杉ノ下Ⅰ遺跡	大仙市横堀	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-9	鍛冶屋敷遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-13	四十八遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-14	中村遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-18	弥兵谷地遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-19	一ツ森遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器系陶器壺）	1
212-53-24	堰口遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（鉄滓）	15
212-53-25	田ノ尻遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-27	観音堂遺跡	大仙市板見内	近世集落跡、掘立柱建物跡、井戸など検出	10
212-53-28	北畠遺跡	大仙市北畠	中世集落・墓地、火葬墓、2005年発掘調査	11
212-53-30	八幡堂遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器・中近世陶器）	11
212-53-32	下川原遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器）、1995年発見	14
434-54-2	本堂城跡	美郷町本堂城回	本堂氏の居城跡、2004年～確認調査	2
434-54-3	厨川谷地遺跡	美郷町土崎	埋蔵錢出土地（1915年＜大正4＞出土） 古代祭祀遺跡、2001年発掘調査	3 7
434-54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	美郷町土崎	寺院跡	1
434-54-5	中屋敷Ⅱ遺跡	美郷町土崎	繩文・古代集落跡、2002・03年発掘調査	5・12
434-54-14	内村遺跡	美郷町千屋	古代集落跡、1980年発掘調査、中国産青磁出土	4・16
434-54-23	砂館跡	美郷町中野	城館跡	2
434-54-27	厨川谷地Ⅱ遺跡	美郷町土崎	中世以降？、2000年発見	9
434-54-28	厨川谷地Ⅲ遺跡	美郷町土崎	古代、2001年発見	9
434-54-29	下中村遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書き土器出土	9
434-54-30	飛沢尻遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書き土器出土・和鏡出土	9
434-54-31	下飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見	9
434-54-32	上飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2003年発掘調査	6
434-54-33	上館遺跡	美郷町土崎	中近世城館跡、2002年発見	13
434-54-35	松ノ木遺跡	美郷町土崎	中世～近世、2003年の確認調査で柱穴確認	9
434-54-36	八幡殿遺跡	美郷町土崎	古代集落跡か、2003年確認調査	9
434-54-38	西館遺跡	美郷町本堂城回	繩文・古代、2005年発見	13
434-54-40	森崎Ⅰ遺跡	美郷町本堂城回	古代、2006年発見、墨書き土器出土	13
434-54-41	城方小屋遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、柵列跡、火葬墓	17
434-54-42	北館遺跡	美郷町本堂城回	近世集落跡、2006年発見	13
434-54-43	森崎Ⅱ遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、堅穴建物跡	17

地図番号の212は大仙市管内、53は旧仙北町域を示し、434は美郷町管内、54は旧千畳町域を示す。



第2図 弘田櫛跡調査実施位置図

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

本報告書は第143次調査、第145次調査、第147次調査と3か年の調査成果をまとめたものである。各調査ごとに調査箇所や調査目的が違うため各年次調査ごとに調査方法を説明する。

第143次調査（平成23年度）

用排水路の改修に伴う調査である。用水路に並走するように任意で測量用の杭を打設した用水路ごとに22から28の番号を割り、割り振った番号から調査方向に22-1、22-2…とした。杭間は直線方向では20m間隔であるが調査区が湾曲する場合は、調査に最適な間隔で杭を打設した。必要に応じて杭に標高値を記した。

検出した遺構には確認した順に略記号及び通し番号を付し、精査をおこなった。出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は主に、図面の記録および写真撮影によった。遺構図面は原則として1/20縮尺で作成し、平面図は任意の杭を基準とした簡易の遣り方測量により作成した。遺構細部の図面を必要とした際には1/10縮尺での作図もおこなった。写真撮影はアナログカメラ（35mmカメラおよび6×4.5cmカメラ）とデジタルカメラを併用しアナログカメラのフィルムはモノクロとカラーリバーサルを使用した。

第145次調査（平成24年度）

用排水路のフリューム交換および、新規の用水路設置のための調査である。用排水路および新規の用水路に並走するように任意で測量用の杭を打設した。用排水路ごとにNo.0からNo.1、No.2…としNo.間は20mとした。用排水路の延長方向が変わった場合はNo.1+N12.5mのように方位と距離を記した杭を打設している。また、各杭には標高値が記してある。

検出した遺構には確認した順に略記号及び通し番号を付し、精査をおこなった。出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は主に、図面の記録および写真撮影によった。遺構図面は原則として1/20縮尺で作成し、平面図は任意の杭を基準とした簡易の遣り方測量により作成した。遺構細部の図面を必要とした際には1/10縮尺での作図もおこなった。写真撮影はアナログカメラ（35mmカメラ）とデジタルカメラを併用しアナログカメラのフィルムはカラーリバーサルを使用した。

第147次調査（平成25年度）

新規の暗渠を埋設するため外柵の推定ラインと暗渠設置予定箇所の交点に角材列などの遺構が残存していないかを調べる調査である。第147次調査の範囲は第143次調査と第145次調査の調査範囲にまたがっており広範囲であることに加え、実際に調査する箇所も外柵の推定ラインと暗渠の交点という狭い範囲であることから測量用の杭は打設せず、トータルステーションでセクションポイントの座標値を計測した。

検出した遺構には確認した順に略記号及び通し番号を付し、精査をおこなった。出土した遺物には、

遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は主に、図面の記録および写真撮影によった。遺構図面は原則として1/20縮尺で作成し、平面図はセクションポイントを基準とした簡易の遺り方測量により作成した。写真撮影は高性能デジタルカメラを使用した。

任意の杭やセクションポイントで作図した図面や取り上げた遺物は、整理作業時に払田柵跡のグリッド番号に振り替えた。また、遺構番号や遺物番号を払田柵跡の管理番号に振り替えた。

第2節 基本層序

第143次調査は水路の改修に伴うもので、沖積低地の広大な範囲に細長い調査区が展開している。遺構が検出された各地点において断続的に観察された層序について、調査区全体にわたり整合させるのは困難であることから、基本層序については以下のような簡便な分類の下で行った。なお、各層中でさらに細分された場合、便宜的に上からa・b・c…と小文字アルファベットを付しているが、これらの細分は土層断面ごとに行っているため、必ずしも小文字同士で一致するものではない。

I層 近現代の土層を一括した。水路設置時の盛土や近・現代の水田耕作土を含む。

II層 III層より上位に堆積する土壤化した部分。黒色基調のシルトで、調査区のごく一部に確認することができ、旧表土と考えられる。火山灰との前後関係は不明確である。

III層 黄褐色基調の粘土層。調査区の広範囲に認められるが、欠失しているところもある。下位IV層との境界は不明瞭で漸移的な変化を示しており、基本的にIV層が離水し色調変化した部分と考えられる。遺構の一部は本層上面で確認している。

IV層 オリーブ黒色基調の粘土層。調査区の立地する沖積低地の基盤層である。植物遺存体を含んでおり、水成堆積物と考えられる。

第145次調査は用排水路のフリューム交換及び新規用水路の設置という性質上、第143次調査と同じく広大な範囲に細長く調査区が展開しているため、調査区を通した基本層序を記録することが困難であり、各調査区ごとに断続的に観察し記録した。基本層序については以下のように整理した。

なお、第147次調査の基本層序は東側調査区が第143次調査範囲と、西側調査区が第145次調査範囲と重複しているため、それぞれの調査区の基本層序を使用した。

第145次調査

- I a層 黒褐色（10YR3/2）シルト。表土。
- I b層 黒褐色（10YR3/1）シルト。造成土。
- II a層 暗オリーブ（2.5Y3/3）シルト。遺物包含層①。
- II b層 黒褐色（10YR3/1）シルト。遺物包含層②。
- II c層 灰黄褐色（10YR5/2）シルト。遺物包含層③。
- III層 暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト。

IV層 黒褐色（2.5Y3/1）粘土。漸移層。

V層 暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土。

I a層は表土である。調査範囲が水田やその隣接地ということもあり植物根が多く含まれている。I b層は造成土である。主に耕作するために造成されたと思われ、土性の特徴も I a層とよく類似している。またこの層には農業資材と思われるビニール片や肥料袋などのゴミや砂を入れている場所もあった。II a層、II b層、II c層は遺物包含層である。土師器や須恵器が出土する遺物包含層である。全体的に遺物包含層は削平を受けており12区、13区、15区、17区、18区で部分的に残存している。III層は暗灰黄色のシルトであり、これを更に下げると地山漸移層であるIV層またはV層に到達する。V層は地山土で還元作用によりグライ化している。

第4章 調査の記録

第1節 第143次調査の検出遺構と遺物

第143次調査の遺構数総計は、外柵を構成する材木塀のうち、角材列2か所と布掘溝跡5か所、溝跡6条であり、加えて河川跡を12か所で確認した。

調査区は工事対象である用排水路の分岐点を境界として、1～7区に分割した。第143次調査で使用した遺構番号は2003～2025である。なお、2区・7区で検出した材木塀は、過去に調査が行われたものに連続することから、過去調査分の番号をそのまま付している。

材木塀の調査にあたっては、現況保存を原則とする認識に立ち、遺構確認後に図面・写真的記録を作成し、その後埋め戻しを行った。

1 1区（第4～10図、図版2～5）

本区は第143次調査区西端に位置し、北東から南西へ流下する幹線排水路（通称八幡堰）である。全長は約306mであるが、町道と交差する2か所は暗渠となっており、これらの暗渠を境として調査区はさらに北部・中央部・南部に分割される。本区は西側で市道と接しており、かつ道路面との高低差が大きい。このため、安全確保の観点から調査にあたっては西側壁面に着手せず、底面及び東側の壁面を清掃し、遺構確認を行った。なお暗渠部分（北部と中央部間の約17m分、中央部と南部間の約24m分）については工事立ち会いを実施したが、遺構・遺物とも確認されなかった。

遺構は材木塀布掘溝跡1か所、河川跡5か所を検出した。本区に設置されていた水路フリュームは比較的大型であったため深く搅乱されており、遺構は平面的に確認することはできず、全て東側壁面において土層断面のみの検出となった。なお、本地区における土層断面の記録は比較的搅乱の少ない部分に留めている。遺物は須恵器壺・甕、土師器壺・甕が出土した。

S D 2003材木塀布掘溝跡（第10図）

北部北端から南へ約18m、〇〇54区に位置する。東側壁面で加工木片の集中箇所を検出し、周辺を精査したところ、溝状の断面形を確認した。

土層断面は溝跡を斜めに横断していると推測されるが、現況で開口部幅68cm、底部幅50cm、IV層上面から底面までの深さ30cmを測る。底面は平坦で、壁は北側が外傾し、南側がほぼ直立に立ち上がる。なお、本溝跡より上の堆積層（II a～II c層）中には砂粒や植物遺存体、十和田火山起源と見られる火山灰の二次堆積物が含まれており、河川堆積物と考えられる。おそらく十和田a火山灰降下以前に形成された河川によって浸食され、本溝跡の構築面は失われているものと考えられる。

堆積土は2層に分層した。1層とその上位の河川堆積物（II c層）との境界は不明瞭で、土質は類似している。従って、河川の浸食に伴って角材が脱落し、河川堆積物が流入した可能性がある。2層はIV層由来土塊を多く含み、柵木設置時の裏込め土残存部と考えられる。

遺物は北壁寄りの位置で加工木片が折り重なった状態で出土している。これらは角材列の設置・固

定に際し、間隙に詰めたものと推測する。

本溝跡には角材列が残存していないが、検出位置、断面形状、堆積状況を総合して、材木塀の布掘溝跡と推定する。検出位置は、從来の外柵推定ラインとほぼ整合する。

S L 2014河川跡（第4～6図）

中央部の北東端から南西へ約35.5mの範囲、NG 63・64、NH 63、N I 62・63、N J 61・62、NK 60・61、N L 60、NM 59・60、NN 59、NO 59、NP 58・59、N Q 58区に位置する。

本河川跡は断面のみの部分的な検出であるため流路方向は不明確であるが、おそらく現水路（八幡堰）とほぼ重複する。北東一南西方向の流路であったと推測する。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（II a層）上面から68cm以上の深さを測る。北端部の立ち上がりは確認しておらず、本河川跡はより北側へ延長するものと考えられる。

堆積土は、北部（C-Iライン）において12層に分層した。シルトが大部分を占め、砂・粘土主体層は部分的に挟まる程度あり、比較的緩やかな流速で堆積したものと考えられる。堆積土の中位にあたる5層は火山灰の二次堆積と見られることから、火山灰降下時には河川として機能していたと推測される。南部（J-Lライン）においては、堆積土の上下関係からS L 2015より古いと判断したが、先後関係のない一連の河川である可能性もある。遺物は出土しなかった。

S L 2015河川跡（第5・6図）

中央部北東端から南西へ約34～58mの範囲、NA 69、NB 68・69、NC 67・68、ND 66・67、NE 65・66、NF 64・65、NG 64区に位置する。

本河川跡はS L 2014同様、現水路（八幡堰）とほぼ重複する北東一南西方向の流路であったと推測される。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（II a層）上面から76cm以上の深さを測る。

堆積土は3層に分層した。最下層は細砂を主体とするが、上部の1・2層は細砂を若干含む程度であり、最終的には緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。北端部においては、堆積土の上下関係からS L 2014より新しいと判断したが、先後関係のない一連の河川である可能性もある。遺物は出土しなかった。

S L 2016河川跡（第7・8図）

中央部南西端から北東へ約44～50mの範囲、MO 74・75、MP 74区に位置する。

本河川跡はS L 2014・2015同様、現水路（八幡堰）とほぼ重複する北東一南西方向の流路であったと推測される。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（II a層）上面から80cm以上の深さを測る。北端部の立ち上がりは確認しておらず、本河川跡はより北側へ延長するものと考えられる。

堆積土は2層に分層した。細砂をわずかに含むシルトを主体とし、比較的緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

S L 2017河川跡（第7・8図）

中央部南西端から北東へ約20.5～44mの範囲、M I 79・80、M J 79、MK 78・79、ML 77・78、M M 76・77、MN 75・76、MO 75区に位置する。

本河川跡はS L 2014・2015・2016同様、現水路（八幡堰）とほぼ重複する北東一南西方向の流路で

あったと推測される。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（II a層）上面から76cm以上の深さを測る。

堆積土は2層に分層した。細砂をわずかに含むシルトが主体であり、比較的緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

S L 2018河川跡（第9図）

南部南西端から北東へ約14~26mの範囲、LC 92、LD 91・92、LE 91、LF 90・91区に位置する。

本河川跡はSL 2014・2015・2016・2017同様、現水路（八幡堀）とほぼ重複する北東ー南西方向の流路であったと推測される。深さ最大87cmを測る。

堆積土は3層に分層した。1層は粗砂主体で、2・3層は礫を多量に混入しており、比較的速い流速の下、一気に堆積し埋没したと推測する。最下部には巨大な頁岩の岩塊を含んでいるが、本溝跡は長森丘陵の東端部に近接しており、ここからの転運と考えられる。

2 2区（第11図、図版6）

本区は第143次調査区北側に位置する用水路部分で、長さは東西方向約46mである。

遺構は角材列1条のみの検出である。遺物は須恵器壺、土師器壺・甕・不明器種が出土した。

S A 460角材列（第11図）

東端から西へ約12m、OC 44・45区に位置する。旧水田耕作土と思われるI c層掘り下げの途中で角材先端部を確認し、周辺をIV層上面まで掘り下げた段階で布掘溝跡を含めた全体プランを確認した。ただし、北側は暗渠管が横断するため、遺構確認はこの暗渠管より南側に限られる。なお、調査区の南壁面に沿って幅15cm、深さ15cmのトレンチを設定し、堆積状況を確認した。本角材列は第56次調査Aトレンチで検出されたものに連続することから、遺構番号もこれに従っている。

角材列は南北方向に2本を確認した。南側の角材は部分的な検出で、最大幅22cmを測る。北側の角材は東（柵の外側）へ倒れており、暗渠設置の影響によると考えられる。この角材の最大幅は23cmである。角材最上端部の標高は、北端の材で35.35mである。布掘溝跡は検出部分の長さ43cm、幅56~57cmを測り、主軸方向は座標北から西へ21°振れる。調査区南壁トレンチの土層断面状況を見る限り、東・西壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

堆積土は2層に分層した。1層は角材に張り付くような堆積状況を示しており、角材先端の腐朽した部分への流入土であろう。2層はIV層由来土塊を多く含み、角材列設置時の裏込め土と考えられる。遺物は2層中から土師器壺の底部破片が1点出土している（第11図1）。角材列設置の際、裏込め土に混入したものであろう。

本角材列の検出位置は、從来の外柵推定ラインから4mほど東に離れている。

3 3区（第12・13図、図版6・7）

本区は第143次調査区中央東側に位置する用水路部分であり、東西方向約40m、西端で南へ直角に折れ、約20mで4区に接続する。

遺構は材木柵布掘溝跡1条、溝跡2条を検出した。遺物は墨書き器（須恵器壺）、須恵器壺・甕・不明器種、土師器壺・甕・不明器種、スクレイバーが出土した。

S D 2004材木塀布掘溝跡（第12図）

東端から西へ約15.5m、N J 37区に位置する。III層上面で調査区を南北に横断する不明瞭な黒色土プランを確認し、周辺をIV層まで掘り下げた段階で明瞭なプランを検出した。

確認部分の長さ72cm、幅38～42cmを測り、主軸方向は座標北から西へ24°振れる。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、III層上面から底面までの深さは103cmである。本溝跡は現水田の畦と田面の境界に位置しており、畦にかかる調査区北側壁面の土層断面を見ると、底面から80cmほどの高さに段が付く。しかしこれは本来の形状ではなく、角材の抜き取りに伴い搅乱されたものと推測する。

堆積土は5層に分層した。1～3層は黒色土を主体としてIII・IV層由来土塊を多量に含み、4層との境界は明瞭である。これらは角材列が耕地整理等に伴い引き抜かれた際の埋め戻し土であろう。4層は角材間の充填土や裏込め土が角材抜き取りに伴い崩落したもの、5層はIV層由来土塊を多く含み、角材列設置時の裏込め土残存部と考えられる。

遺物は3層中から内黒土師器壺・甕が出土しており、埋め戻し土への混入と考えられる。また、底面上から溝の中軸線に並ぶように板材が3点出土しており、これらは角材列設置時の高さ調整のため、角材の下に敷かれたものと推測する。

本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と堆積状況、そして底面からの板材出土状況を総合して、外柵材木塀布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから11mほど東に離れている。

S D 2005溝跡（第13図）

西端から東へ約1.5～6.5mの範囲、N I 44・45区に位置する。III層上面で明瞭な黒褐色土プランとして確認した。調査区を南北に横断し、南壁に沿う形で直角に折れて東へ延びている。南北の横断部分のみ底面まで掘り下げ、東側の延長部分については上端ラインの記録作成に留めた。

南北横断部分は長さ78cm、幅25～28cmを測り、主軸方向は座標北から西へ7°振れる。底面は平坦で、西壁はほぼ垂直に、東壁はやや緩やかに外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大50cmである。東西方向の長さは西端から11.8mを測り、さらに東へと続いている。

堆積土は1層のみで、II層に類似した黒褐色土を主体としてIII層由来土塊を混入する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

S D 2006溝跡（第13図）

北端から南へ約12m、N E 45区に位置する。III層上面で調査区を東西に横切る明瞭な黒褐色土プランとして確認した。

確認部分は長さ76cm、幅43～47cmを測り、主軸方向は座標北から西へ90°振れる。底面は緩やかに窪み、壁は底面から連続して南側でやや急に、北側で緩やかに外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大13cmである。

堆積土は1層のみで、II層に類似した黒褐色土を主体としてIII層由来土塊を混入する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、S D 2005同様、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

4 4区（第14～16図、図版8・9）

本区は第143次調査区中央東側に位置する排水路部分であり、東西方向約121mの直線状を呈し、東端から西へ約42mの地点で3区に、西端で1区に接続する。本区に設置されていた水路フリュームは比較的大型であり、底面は遺構確認面（III・IV層上面）より深く搅乱されていた。そのため南北両側壁面の清掃に傾注し、土層断面の観察から遺構の確認に努めた。

遺構は材木塀布掘溝跡1条、溝跡2条、河川跡1か所を検出した。遺物は須恵器壺・甕、土師器壺・甕が出土した。

S D2007材木塀布掘溝跡（第14図）

東端から西へ約13.5m、ND35区に位置する。調査区南壁面の清掃中、土層断面に溝状プランが検出されたため周辺を精査したところ、北壁面及びIV層上面においても確認することができた。

確認部分の長さ156cm、幅55～95cmを測り、主軸方向は座標北から西へ8°振れる。底面は平坦で、東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は部分的に段差が付いている。III層上面から底面までの深さは最大106cmである。

堆積土は3層に分層した。いずれも地山由来土塊を多く含むが、特に1層は上部I b層から連続した状況を示しており、最近の埋土と考えられる。2層は縮まりが緩く、角材引き抜き後の流入土の可能性が高い。3層は固く縮まっており、角材列設置時の裏込め土残存部と考えられる。断面形状と堆積状況を併せて考えると、角材の引き抜きに伴う搅乱は底面付近まで及び、特に西壁は本来の形状を留めていないものと推測される。

遺物は底面の東寄りで大小の加工木片が出土しており、これらは角材列設置時に詰められた端材と考えられる。

本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と堆積状況、そして底面からの加工木出土状況を総合して、材木塀布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから11mほど東に離れている。

S D2008溝跡（第15図）

東端から西へ約72m、NB55区に位置する。調査区北壁沿いで搅乱を免れたIII層残存部分の上面において、南北方向の明瞭な黒色土プランを確認した。

確認部分は長さ30cm、幅50cmを測り、主軸方向は座標北から東へ16°振れる。底面は緩やかに崖み、壁は底面から連続して西側ではやや急に、東側では緩やかに外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大15cmである。

堆積土は1層のみで、II層に類似した黒色土を主体にIII層由来土粒を少量混入する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、SD2005・2006同様、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

S D2009溝跡（第15図）

東端から西へ約78m、NB57区に位置する。調査区北壁沿いで搅乱を免れたIII層残存部分の上面において、南北方向の明瞭な黒色土プランを確認した。

確認部分は長さ15cm、幅26cmを測り、主軸方向は座標北から西へ7°振れる。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大16cmである。

堆積土は2層に分層した。共にII層に類似した黒褐色土を主体として、特に1層には地山由来土を多量に混入しており、埋戻しの様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、SD2005・2006・2008同様、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

S L 2019河川跡（第16図）

西端から東へ約6~15.5mの範囲、MT66~69区に位置する。北側壁面及び底面において砂粒を多量に含む堆積層を確認し、河川跡の存在が想定された。このため北壁沿いにトレンチを設定して全体の幅を検出した。

本河川跡の流路方向は、東岸の平面状況からおそらく北東~南西方向であったと推測される。最大幅は9.4m、最底面は未確認であるが、最上面から87cm以上の深さを測る。

堆積土は6層に分層した。概ね細砂や粗砂を主体とし、比較的急な流速で堆積したと考えられる。特に3層には直径30cmほどの大型の流木を含み、洪水堆積の様相を示す。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にはIII層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

5 5区（第17・18図、図版9・10）

本区は第143次調査区中央東側に位置する用水路部分であり、長さは東西方向約160mである。数地点でトレンチを設定し掘削したところ、遺構確認面は新設水路の設置面よりもさらに深いレベルにあることが判明した。このような状況を受け、本地区での掘削深度は新設水路設置面から下へ20cm程度とした。このため、遺構検出は材木床推定ライン付近及び土層確認用のトレンチ部分に限られている。遺構は材木床布掘溝跡1条、溝跡2条を検出した。遺物は土師器壺が出土した。

S D 2010材木床布掘溝跡（第17図）

東端から西へ約18m、MF35・36区に位置する。IV層上面で調査区を南北に横断する黒色土の不明瞭なプランを確認した。

確認部分の長さ77cm、幅59cmを測り、主軸方向は座標北から西へ4°振れる。上部は搅乱され、段が付いている。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大110cmである。

堆積土は3層に分層した。1層は角材引き抜き後の流入土、2層は角材列設置時の裏込め土と考えられる。3層は角材設置前に高さ調整のため埋め戻した部分であろう。

遺物は1層中から加工木片2点が出土しており、角材列設置時に詰められた端材の可能性がある。本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と堆積状況を総合し外柵材木床布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから3.5mほど東に離れている。

S D 2011溝跡（第18図）

東端から西へ約57m、MD48区に位置する。土層確認用トレンチの底面、IV層上面において調査区を南北に横断する明瞭な黒色土プランを検出し、この段階でSD2012を切ることも確認できた。

確認部分は長さ79cm、幅28~36cmを測り、主軸方向は座標北から西へ6°振れる。底面は狭くやや丸みを帯びており、壁は急角度で外傾し立ち上がる。構築面であるI d層上面から底面までの深さは

最大47cmである。

堆積土は1層のみである。I d層に類似した黒色土を主体に、IV層由来土塊を少量含む。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、水田区画に伴う水路の可能性が高い。

S D2012溝跡（第18図）

東端から西へ約56～59.5mの範囲、MD48・49区に位置する。土層確認用トレンチの底面、IV層上面において調査区を東西に横断する明瞭な黒色土プランを検出し、この段階でS D2012に切られることも確認できた。

確認部分は長さ3.3m、幅11～19cmを測り、主軸方向は座標北から東へ70°振れる。底面は平坦であり、壁は急角度で外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大6cmである。

堆積土は1層のみである。I d層に類似した黒色土を主体に、IV層由来土塊を少量含む。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、S D2011同様、水田区画に伴う水路の可能性が考えられる。

6 6区（第19～21図、図版11～13）

本区は第143次調査区南側に位置する排水路部分で、東西方向の総延長は約206m、東端から西約161mの地点で7区と接続する。本区に設置されていた水路フリュームは大型で、底面まで深く搅乱されていたため、遺構確認は主として壁面を清掃し、土層断面での検出となった。

遺構は材木塀布掘溝跡1条、河川跡5か所を検出した。遺物は須恵器壺・壺・甕、土師器壺・甕・不明器種、内黒土師器壺、磨石1点が出土した。

S D2013材木塀布掘溝跡（第19図）

東端から西へ約35.5m、L E39区に位置する。検出地点付近には、分水用のコンクリート製構造物が設置され、大きく搅乱されていた。搅乱土を除去する段階でその中から材木塀の角材が3点出土したため、周辺を精査したところ南壁に溝跡の土層断面を確認し、次いで南壁沿いの搅乱を免れた部分で溝跡の下半部を平面的に検出することができた。

溝跡は東・北側が大きく搅乱されているが、残存部分の長さ36cm、最大幅32cmを測り、主軸方向は座標北から東へ10°振れる。底面は平坦で、西壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部はやや外傾する。本来的な確認面（III層上面）から底面までの深さは最大55cmである。

堆積土は2層に分層した。1層は大きな地山土塊を多く含み、比較的最近の角材引き抜きに伴う流入土と考えられる。2層の部分はボーリング棒を慎重に刺したところ、壁奥数センチで角材に突き当たることが確認された。角材列間の充填土と考えられる。

遺物は周辺の搅乱土中から角材3点が出土し、遺存状況の良い2点を図示した（第19図1・2）。

本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と土層断面の奥に角材を確認できること、周辺の搅乱から角材が出土したことを総合して、材木塀布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから2mほど東に離れている。

S L2020河川跡（第20図）

東端から約15.5mの範囲、L F32～37、L G32～36区に位置する。調査区壁面及び底面において、

砂粒を多く含む堆積層として確認した。

本河川跡の堆積土は西側でさらに深く潜り込み、東側では調査区外へと延びるため、全体の範囲は不明確である。流路方向は、西端部の平面状況からおそらく南北方向であったと推測される。東西の最大幅31.4m、最底面は未確認であるが、最上面から36cm以上の深さを測る。

堆積土は2層に分層した。1層は粗砂を主体とし、2層は粗砂と粘土の混合で、共に礫を含み、洪水堆積の様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にIV層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

S L 2021河川跡（第20図）

東端から西へ約40～68mの範囲、L D44～49、L E40～49区に位置する。調査区壁面及び底面において砂粒を多く含む堆積層として確認した。

本河川跡の堆積土は西側でさらに深く潜り込むため、全体の範囲は不明確である。S L 2022と一体のものである可能性も考えられる。流路方向は、両端部の平面状況から北東～南西方向であったと推測される。東西の最大幅は28m、最底面は未確認であるが、最上面から40cm以上の深さを測る。

堆積土は2層に分層した。共に粗砂を主体とし、特に2層は礫を多量に含み、洪水堆積の様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にIV層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

S L 2022河川跡（第20図）

東端から西へ約79.5～84.5mの範囲、L C53～55、L D53～55区に位置する。調査区壁面及び底面において砂粒を多く含む堆積層として確認した。

本河川跡の堆積土は東側でさらに深く潜り込むため、全体の範囲は不明確である。S L 2021と一体のものである可能性も考えられる。流路方向は、西岸の平面状況から北東～南西方向であったと推測される。東西の最大幅は4.8m、最底面は未確認であるが、最上面から25cm以上の深さを測る。

堆積土は1層のみである。粗砂を主体として礫を多量に含み、洪水堆積の様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にIV層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

S L 2023河川跡（第21図）

西端から東へ約14～18.5mの範囲、K S89～91区に位置する。調査区北壁の土層断面で植物遺存体を含む黒色土の堆積層を確認した。調査区底面には絶えず水が流れる状況で、平面形を検出することは困難であったため、南壁も精査して土層断面を検出し、流路方向の把握に努めた。

本河川跡の流路方向は、調査区南北の土層断面の検討から北東～南西方向であったと推測される。東西の最大幅は5.6m、最底面は未確認であるが、最上面から22cm以上の深さを測る。

堆積土は2層に分層した。粘土主体で植物遺存体を含み、緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

S L 2024河川跡（第21図）

西端から約2.5mの範囲、K R 94・95、K S 94・95区に位置する。調査区北壁の土層断面で植物遺存体を含む黒色土の堆積層を確認した。S L 2023と同様の状況であったため、同じく南壁も精査して土層断面を検出し、流路方向の把握に努めた。

本河川跡の流路方向は、調査区南北の土層断面を併せて検討した結果、北東—南西方向であったと推測される。西側は調査区外へと延びるため全体幅は不明であるが、東西の最大幅は2.6m、最底面は未確認であるが、最上面から18cm以上の深さを測る。

堆積土は2層に分層した。シルト主体で植物遺存体を含み、比較的緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

7 7区（第22図、図版13）

本区は第143次調査区南側に位置する用水路部分で、東西方向の延長約145m、西端で6区と接続する。5区と同様の状況であり、遺構確認実施箇所は材木塀推定ライン付近及び土層観察用トレントに限られている。

遺構は角材列1条、河川跡1か所を検出した。遺物は須恵器壺・壺・甕、土師器壺・甕・不明器種が出土した。

S A 933角材列（第22図）

東端から西へ約25m、K P・K Q 40区に位置する。IV層上面で布掘溝跡を含めた全体プランを確認した。本角材列は第138次調査E 8区で検出されたものに近接することから、遺構番号もこれに従っている。

角材列は南北方向に3本を確認した。北端と南から2番目の角材の間には抜き取り痕が確認され、おそらく水路設置に伴うと考えられる。角材列の確認部分の長さは1.3m、主軸方向は座標北から西へ~10°振れる。南から2番目の角材規模は幅24cm、厚さ20cmを測る。角材最上端部の標高は、北端の材で34.87mである。布掘溝跡は幅48~50cmを測り、土層断面から見る限り壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

堆積土は1層のみであり、角材列設置時の充填土と考えられる。遺物は出土しなかった。

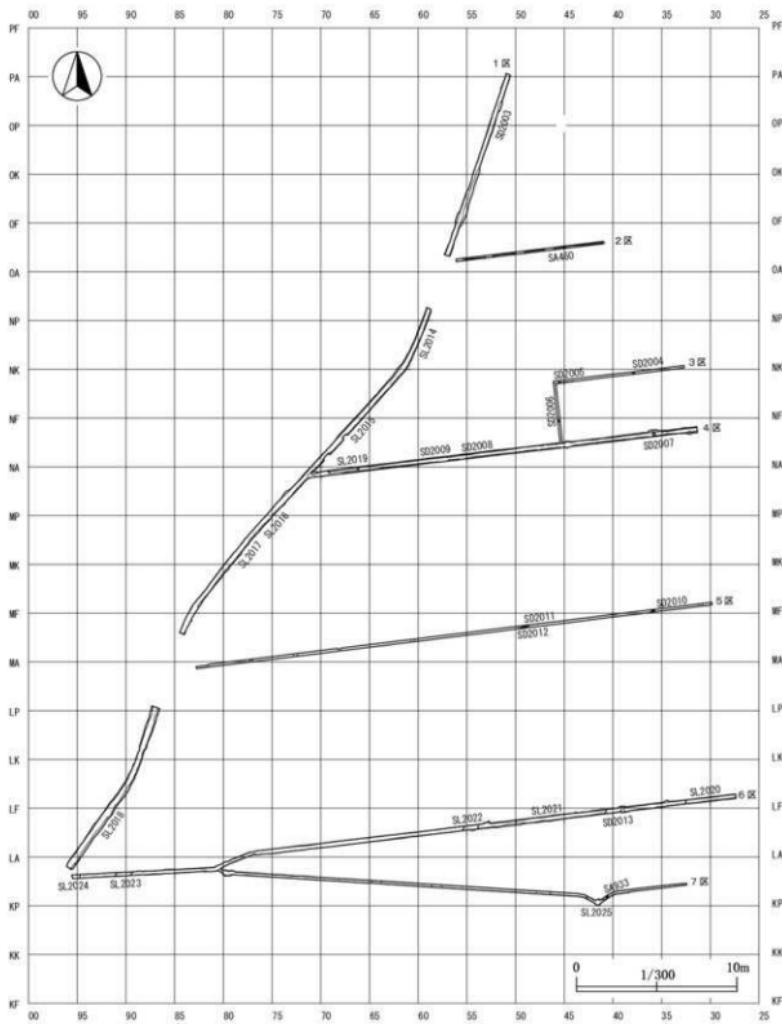
本角材列の検出位置は、從来の外柵推定ラインとほぼ整合している。

S L 2025河川跡（第22図）

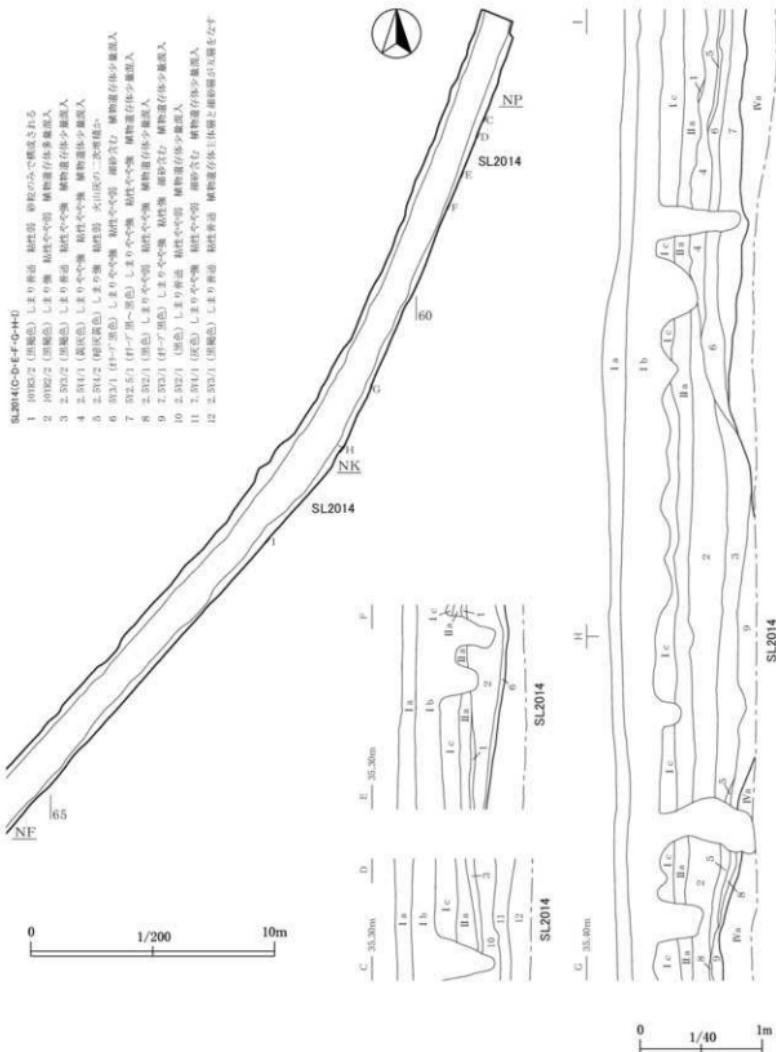
東端から西へ約25.5~31mの範囲、K P 40~42区に位置する。当初材木塀の検出を目的としてIV層上面を精査中に、河川跡の東端部に相当する黒色土の落ち込みを確認した。このため西側へと精査範囲を広げ、西端部の立ち上がりも確認した。なお、本河川跡が確認された地点は常に水が溜まる状況であったため、底面までの掘り下げは行っていない。

本河川跡の流路方向は平面状況から南北方向と推測されるが、東西の岸ラインが並行しないことから、屈曲部に相当する可能性がある。確認部分の東西最大幅は5.4m、深さは10cmである。

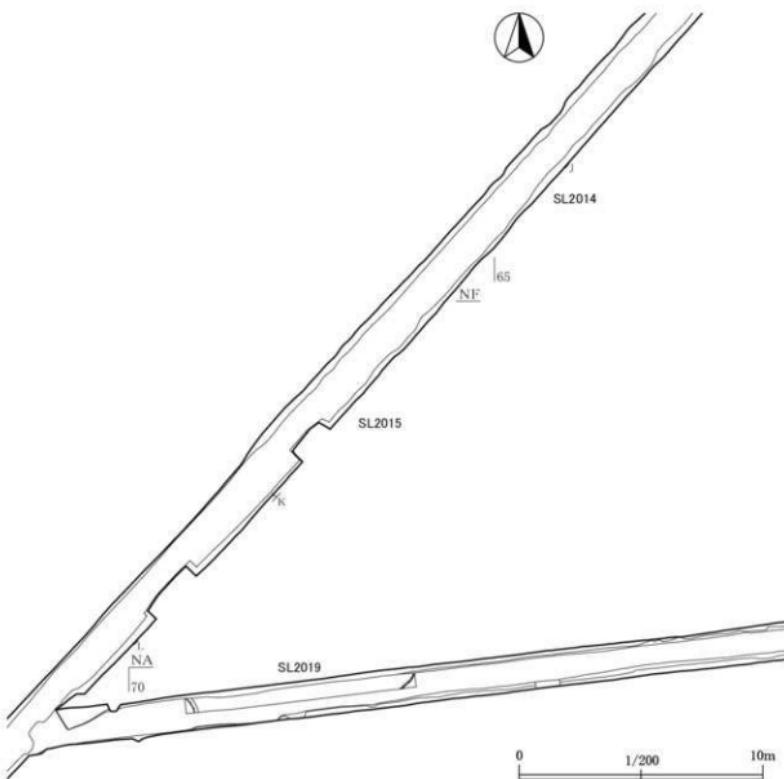
堆積土は1層のみで、植物遺存体を含む粘土を主体としており、緩やかな流速で堆積し埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかった。



第3図 払田櫓跡第143次調査 調査区位置図 (外柵東門周辺地区)



第4図 1区中央部の造構（1） SL2014



1区中央部 基本土壙(J-K-L)

- I a 10Y2/1 (黒色) しまり普通 粘性やや弱 表土上か
- II b 10Y2/2 (黒褐色) しまりやや強 粘性やや弱 植物遺存体多量混入
- II c 5Y2/1 (黒色) しまり普通 粘性普通 植物遺存体少量混入
- II d 10YR1.7/1 (黒色) しまり普通 粘性やや弱 植物遺存体多量混入
- II e 10YR1.2 (灰黃褐色) しまりやや強 粘性やや強 鹿蹄に類似する

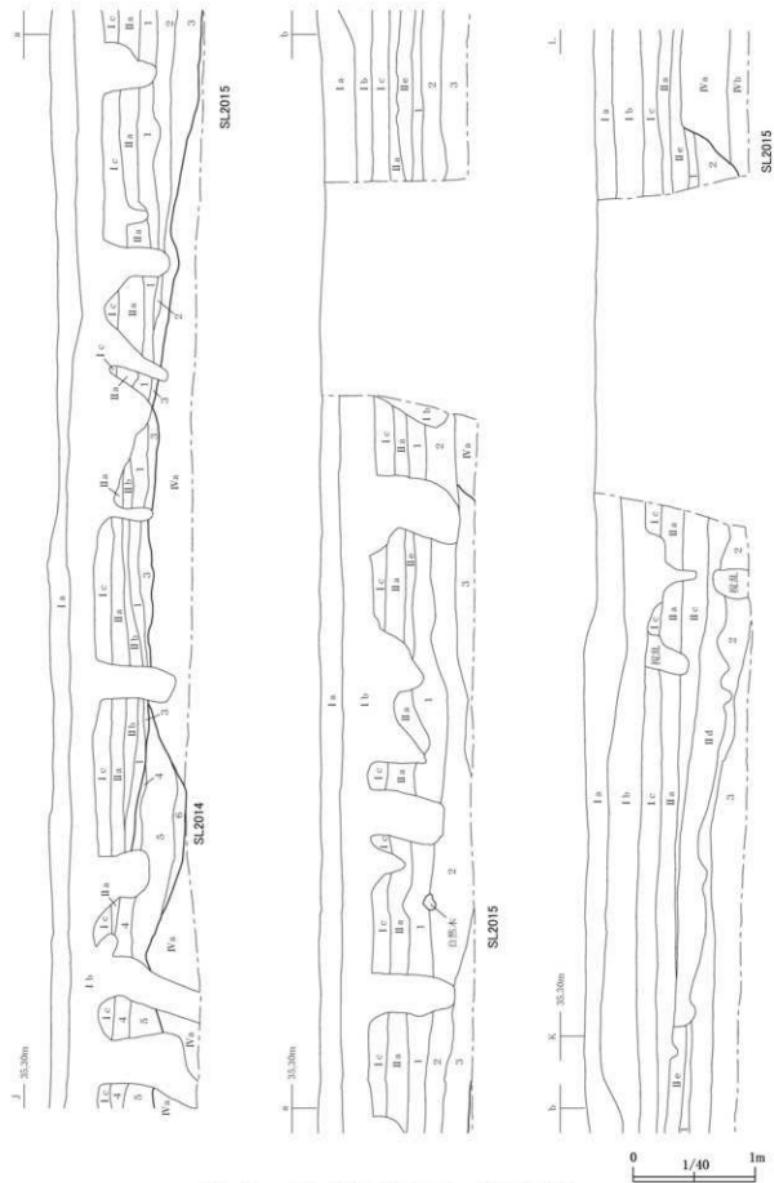
SL2015

- 1 10Y2/1 (オーブ 黒～灰色) しまりやや強 粘性やや強 鹿蹄わらびに含む 植物遺存体少量混入
- 2 10Y2/1 (オーブ 黑) しまりやや強 粘性やや強 鹿蹄わらびに含む 植物遺存体少量混入
- 3 7.5Y3/1 (オーブ 黑色) しまり普通 粘性弱 鹿蹄主体とする

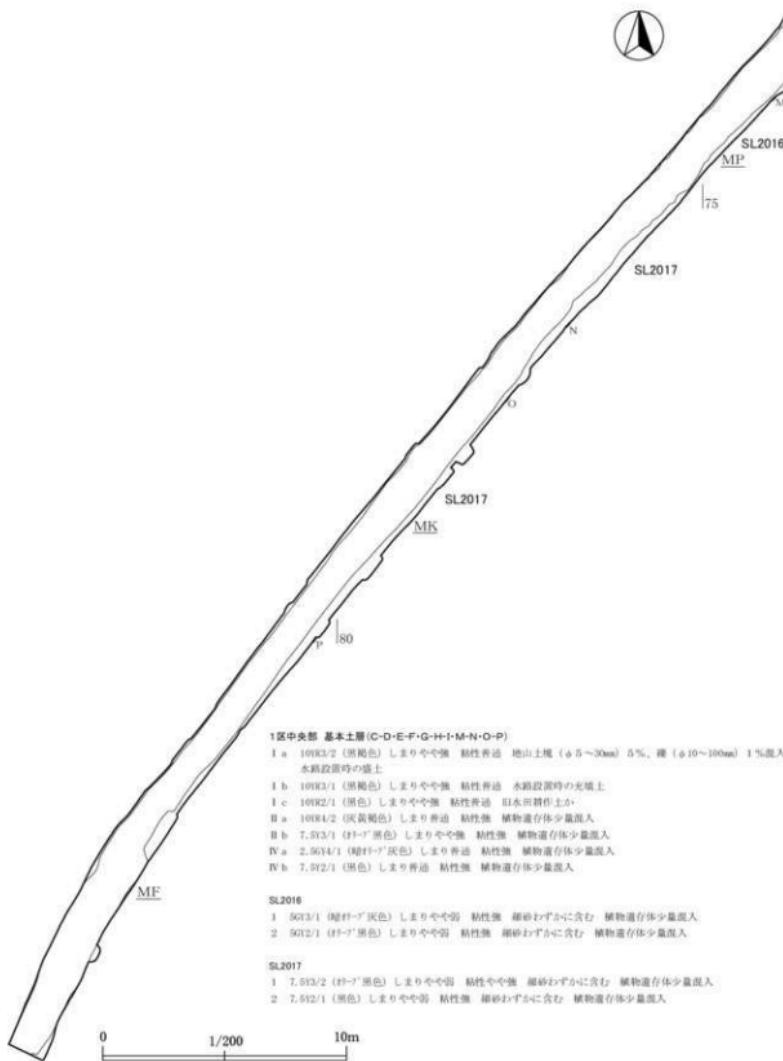
SL2014(J-K-L)

- 4 5Y3/2 (オーブ 黑色) しまりやや強 粘性やや強 植物遺存体少量混入
- 5 2.5Y3/1 (黒褐色) しまり普通 粘性やや強 植物遺存体多量混入
- 6 2.5Y2/1 (黒色) しまりやや弱 粘性やや強 植物遺存体多量混入

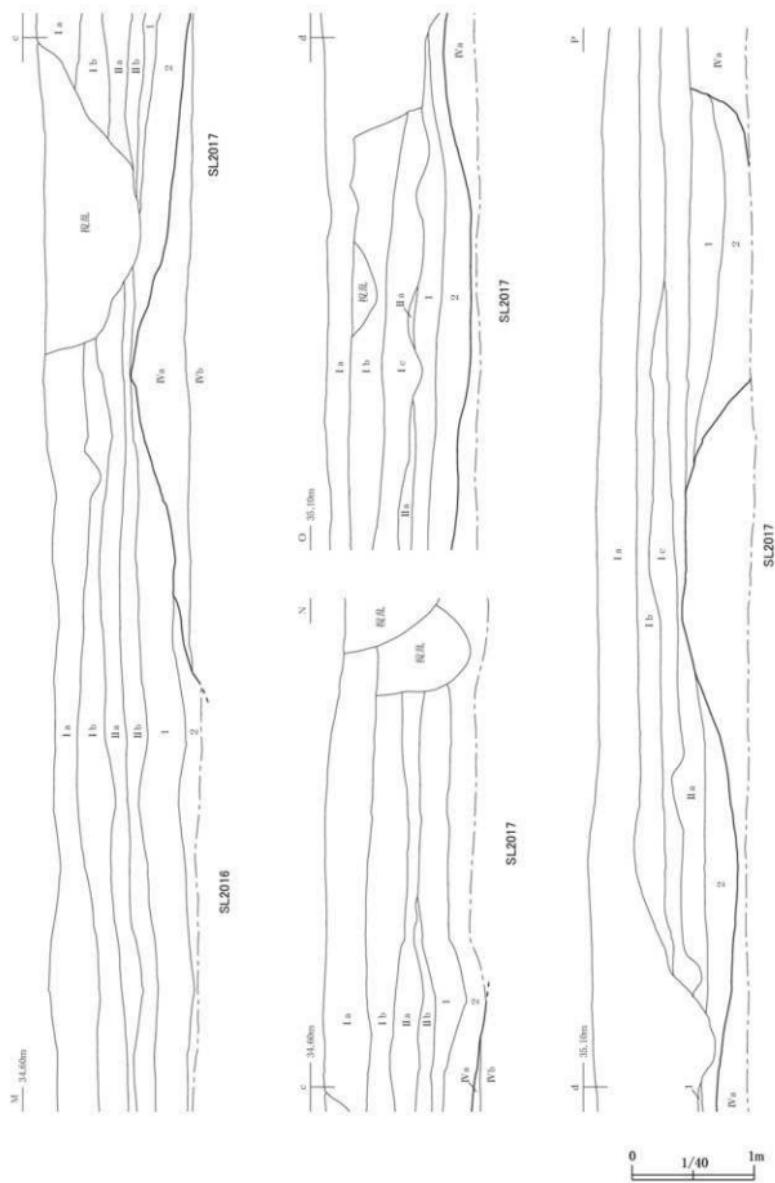
第5図 1区中央部の遺構 (2) SL2014, 2015



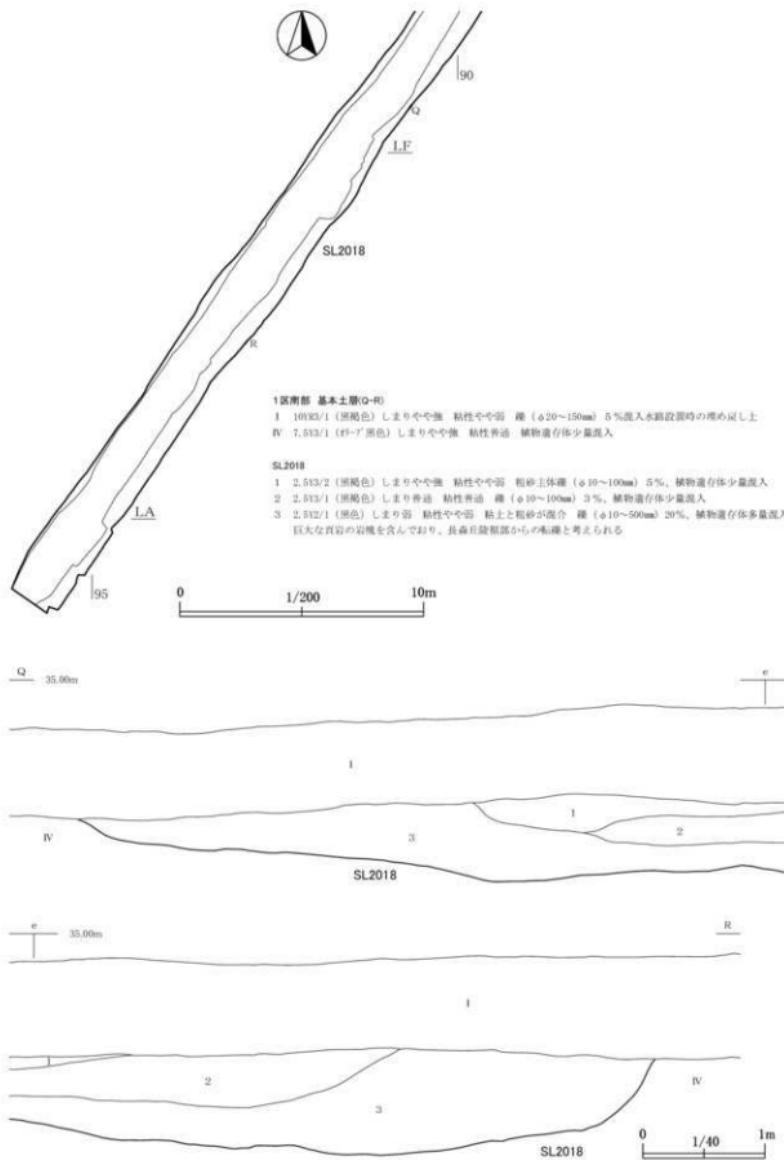
第6図 1区中央部の遺構（3） SL2014, 2015



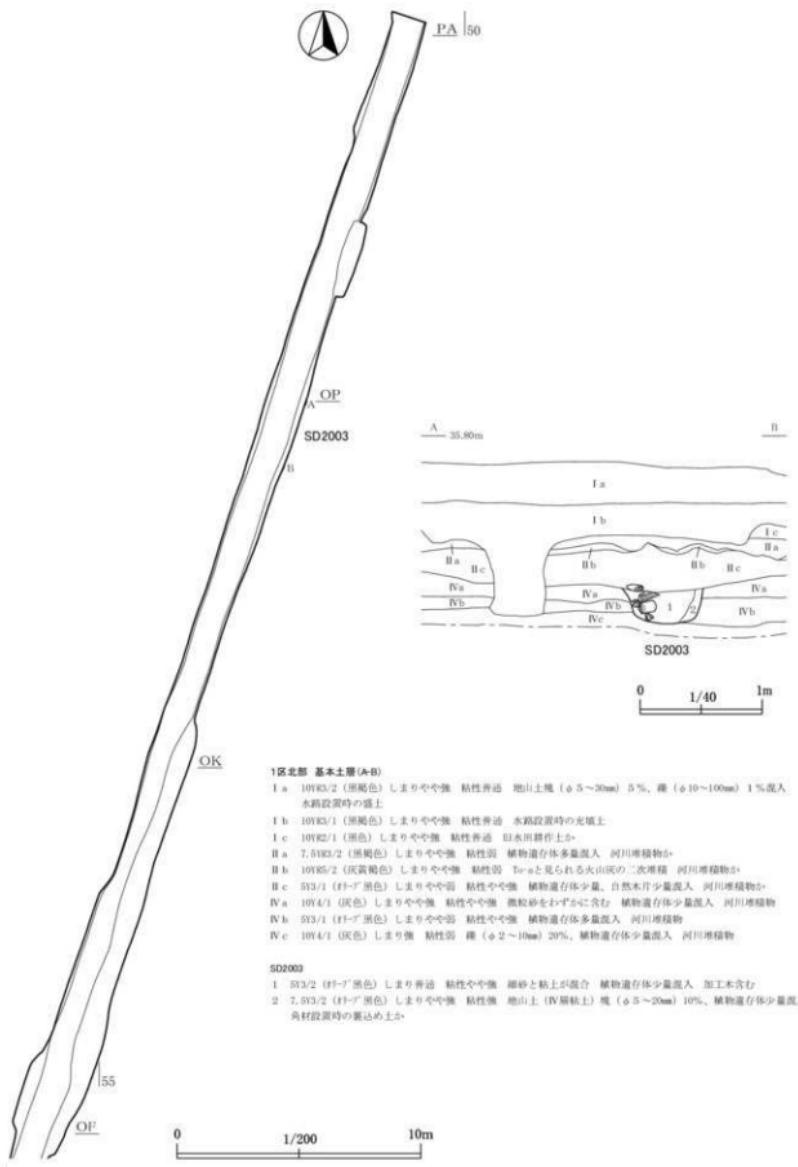
第7図 1区中央部の遺構 (4) SL2016, 2017



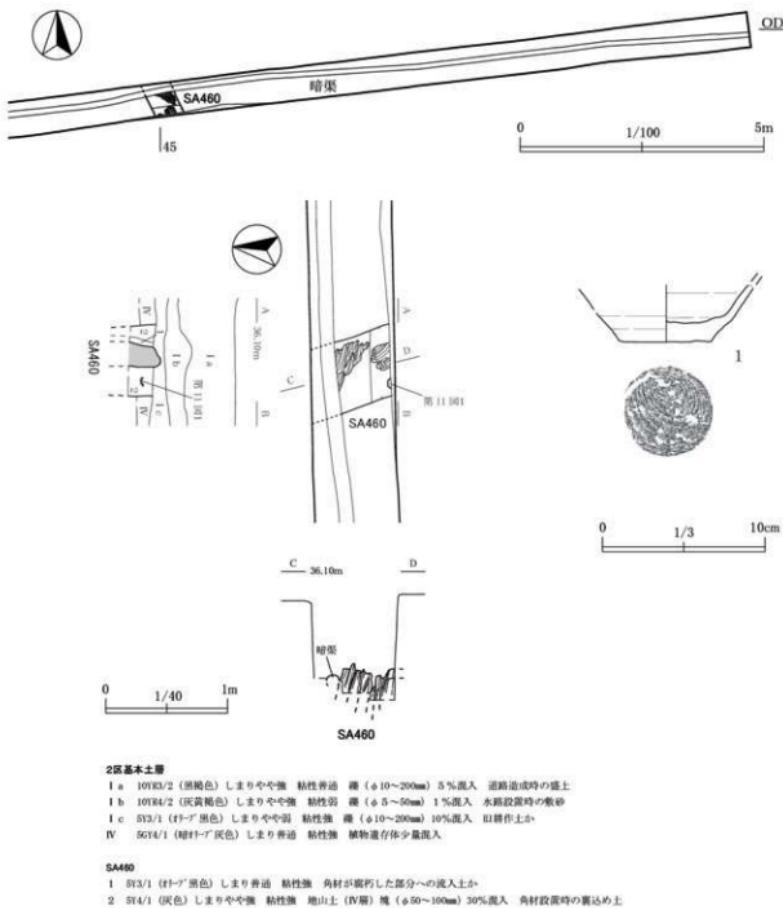
第8図 1区中央部の造構(5) SL2016, 2017



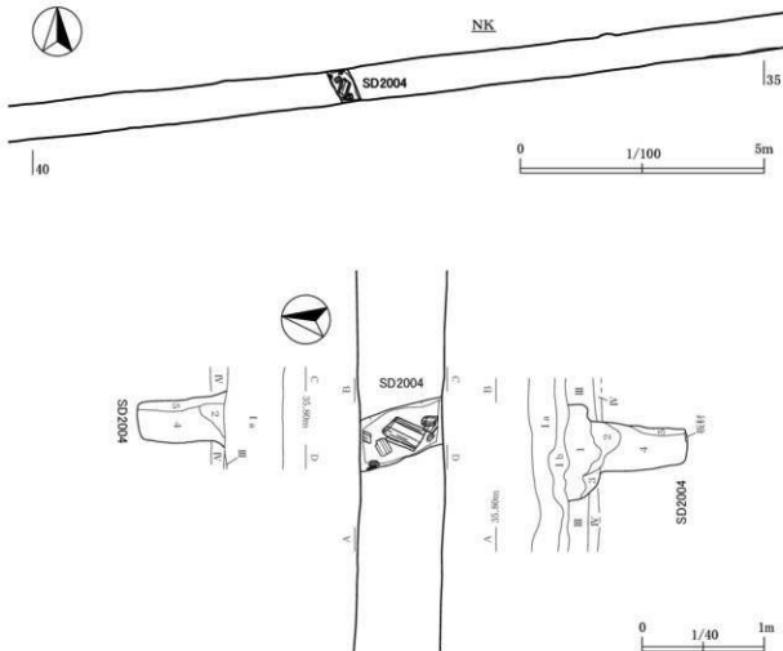
第9図 1区南部の遺構 SL2018



第10図 1区北部の遺構 SD2003



第11図 2区の遺構 SA460



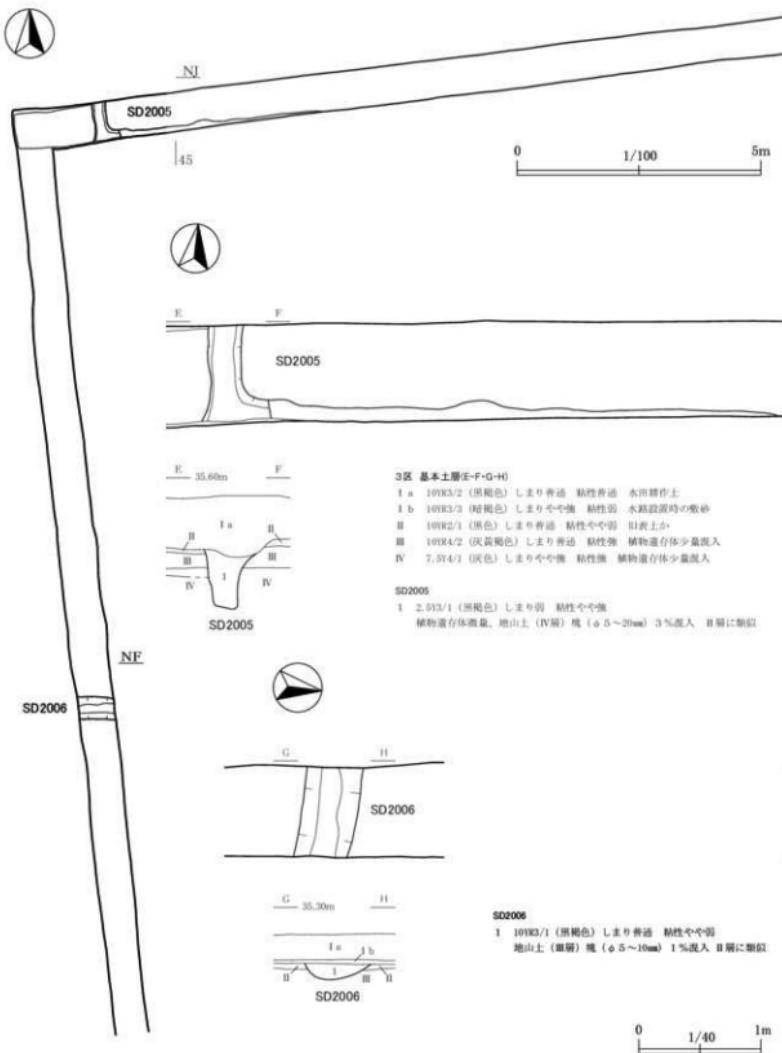
3区 基本土層(A-B-C-D)

- I a 10YR3/2 (黒褐色) しまりやや強 粘性普通 硬化物粒 ($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 1%混入。地山上 (Ⅳ層・Ⅴ層共) 極 ($\phi 20 \sim 100\text{mm}$) 60%混入
- I b 10YR3/3 (暗褐色) しまりやや強 粘性弱 水路設置時の敷砂
- II 10YR4/2 (灰黄褐色) しまり普通 粘性強 植物遺存体少量混入
- IV 7.5Y4/1 (灰色) しまりやや強 粘性強 植物遺存体少量混入

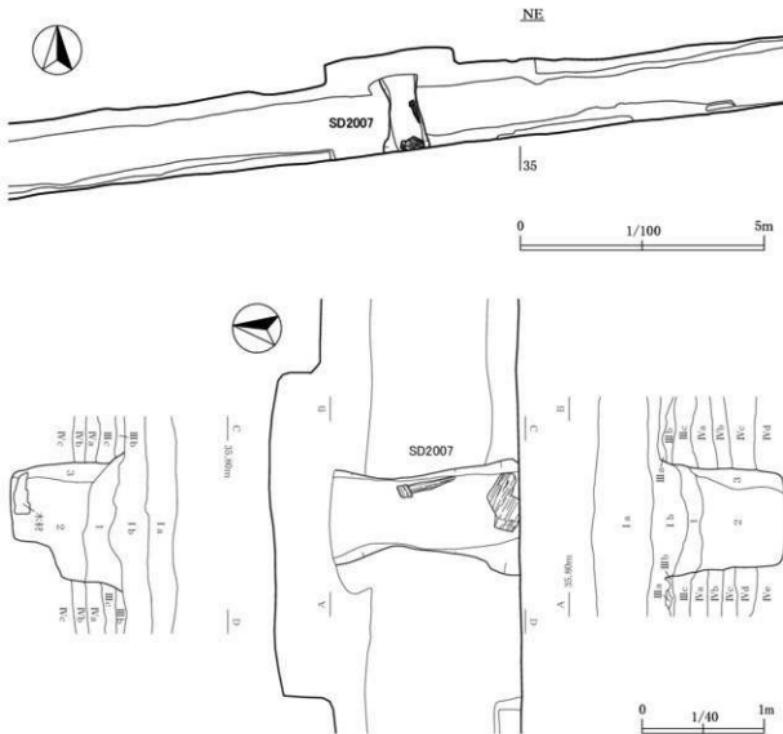
SD2004

- 1 10Y2/1 (黒色) しまり強 粘性普通 硬化物粒 ($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 1%混入。地山上 (Ⅳ層・Ⅴ層共) 極 ($\phi 20 \sim 100\text{mm}$) 60%混入
- 2 10Y2/1 (黒色) しまり普通 粘性普通 硬化物粒 ($\phi 1 \sim 2\text{mm}$) 1%未満、地山上 (Ⅳ層・Ⅴ層共) 極 ($\phi 20 \sim 100\text{mm}$) 60%混入
- 3 5Y3/1 (付一 黒色) しまりやや強 粘性強 地山上 (Ⅳ層) 極 ($\phi 1 \sim 7\text{mm}$) 10%混入
- 4 5Y3/1 (付一 黒色) しまりやや弱 粘性強 地山上 (Ⅳ層) 極・極 ($\phi 5 \sim 20\text{mm}$) 25%混入 植物遺存体少量混入
- 5 7.5Y4/1 (灰色) しまりやや弱 粘性強 地山上 (Ⅳ層) 極・極 ($\phi 3 \sim 20\text{mm}$) 40%混入 水路設置時の裏込め土

第12図 3区の造構 (1) SD2004



第13図 3区の遺構 (2) SD2005, 2006



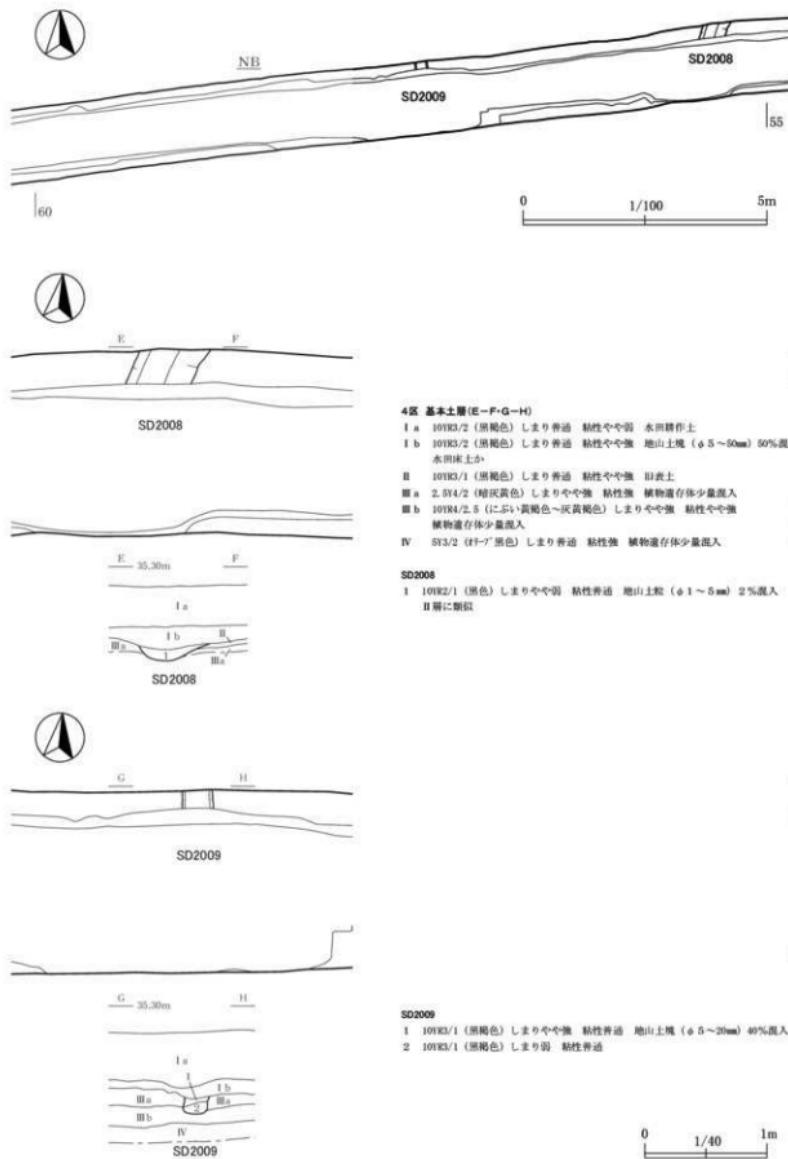
4区 基本土層(A-B-C-D)

- I a 10YR3/2 (黒褐色) しまりやや強 粘性やや弱 水田耕作土
- I b 10YR3/2 (黒褐色) しまりやや弱 粘性やや弱 地山土塊 ($\phi 10\sim50mm$) 20%混入 水田床土か
- II a 10YR4/2 (にじみ黄褐色) しまり普通 粘性普通
- II b 10YR4/2 (灰黃褐色) しまり普通 粘性やや強
- III c 10YR4/2, 5 (にじみ黄褐色～灰黃褐色) しまりやや強 粘性やや強 植物遺存体少量混入
- IV a 5G14/1 (緑けげ～灰色) しまりやや強 粘性強 植物遺存体少量混入
- IV b 7.5Y2/1 (黒色) しまり普通 粘性強 植物遺存体少量混入
- IV c 5G14/1 (緑けげ～灰色) しまり普通 粘性強 植物遺存体少量混入
- IV d 7.5Y2/1 (黒色) しまり普通 粘性強 植物遺存体少量混入
- IV e 5G14/1 (緑けげ～灰色) しまり普通 粘性強 植物遺存体少量混入

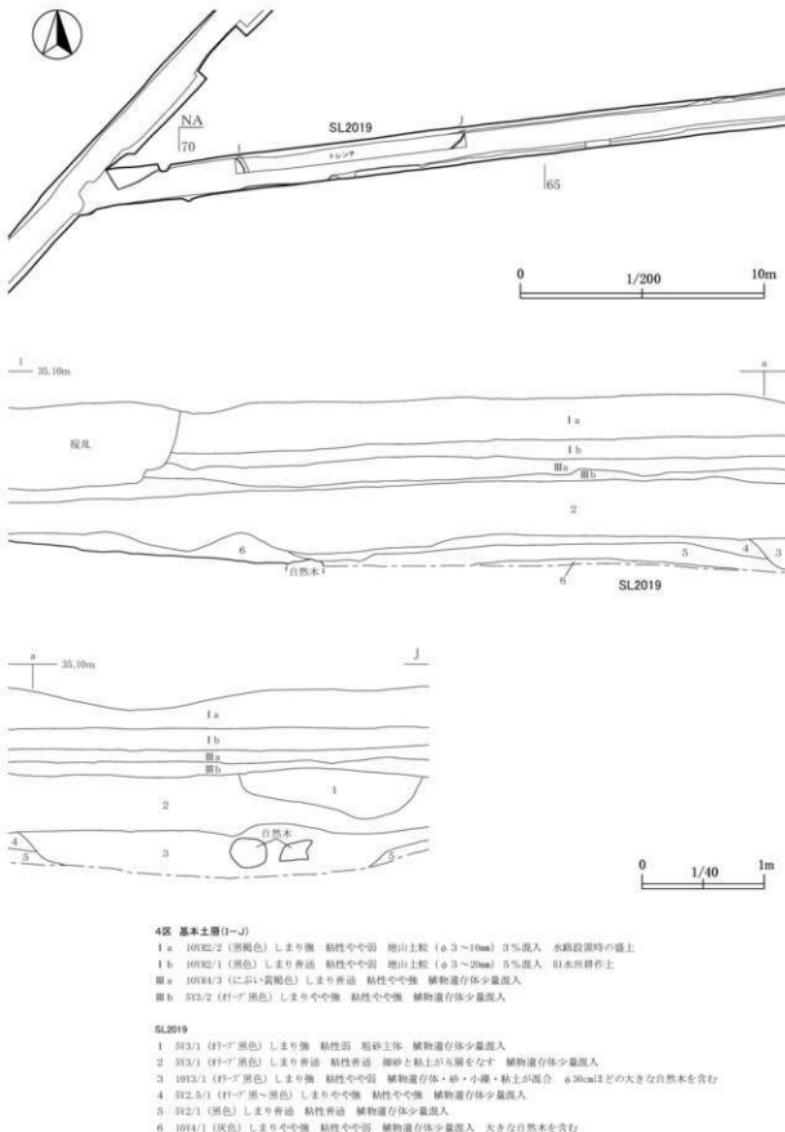
SD2007

- 1 10YR3/1 (黒褐色) しまりやや強 粘性強 地山上 (III層) 塗 ($\phi 10\sim50mm$) 40%混入
- 2 5Y2/1 (黒色) しまりやや弱 粘性強 地山上 (IV層) 塗 ($\phi 10\sim30mm$) 25%混入
- 3 5Y2/1 (黒色) しまりやや強 粘性強 地山上 (IV層) 塗 ($\phi 10\sim30mm$) 30%混入

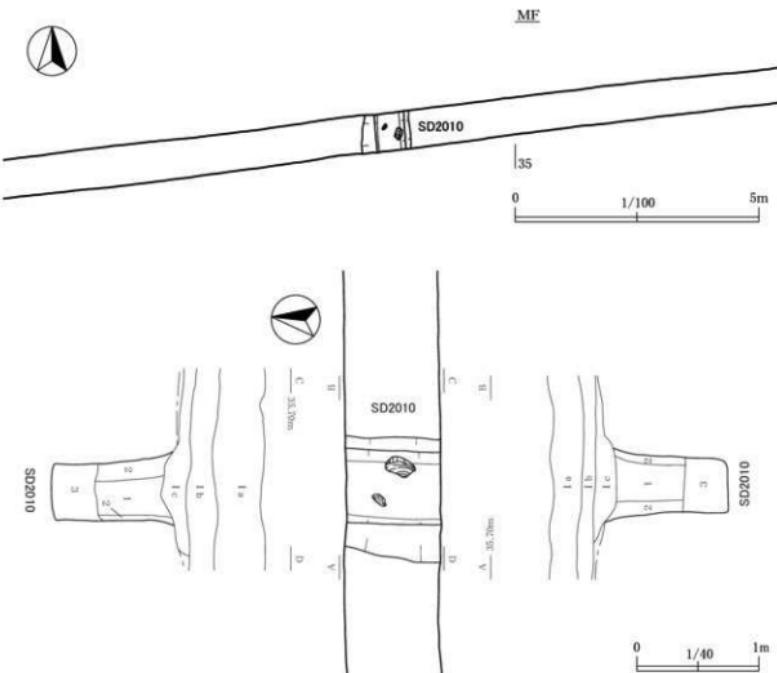
第14図 4区の遺構 (1) SD2007



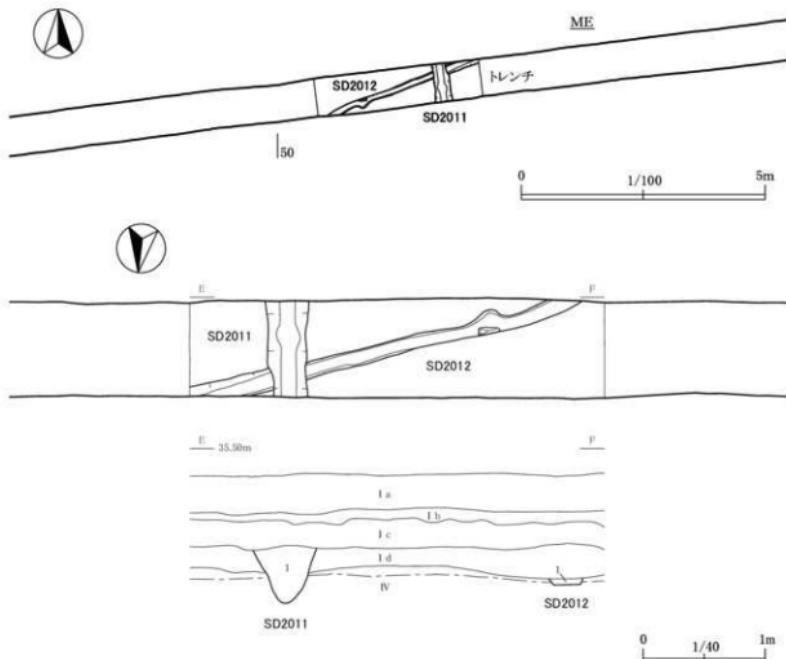
第15図 4区の遺構 (2) SD2008, 2009



第16図 4区の遺構 (3) SL2019



第17図 5区の遺構 (1) SD2010



5区 基本土層(E-F)

- I a 10932/2 (黒褐色) しまりやや強 粘性やや弱 粒 (ϕ 10~30mm) 10%混入 道路設置時の盛上
- I b 10932/2 (黒褐色) しまりやや強 粘性普通 田水田耕作土か
- I c 513/1 (赤-黒色) しまりやや強 粘性やや強 地山土 (IV層) 粒 (ϕ 10~20mm) 5%混入 田水田耕作土か
- I d 512/1 (黒色) しまりやや強 粘性やや強 地山土 (IV層) 粒 (ϕ 5~10mm) 1%混入 田水田耕作土か
- IV 512/1 (赤-黒色) しまり普通 粘性強 植物遺存体多量混入

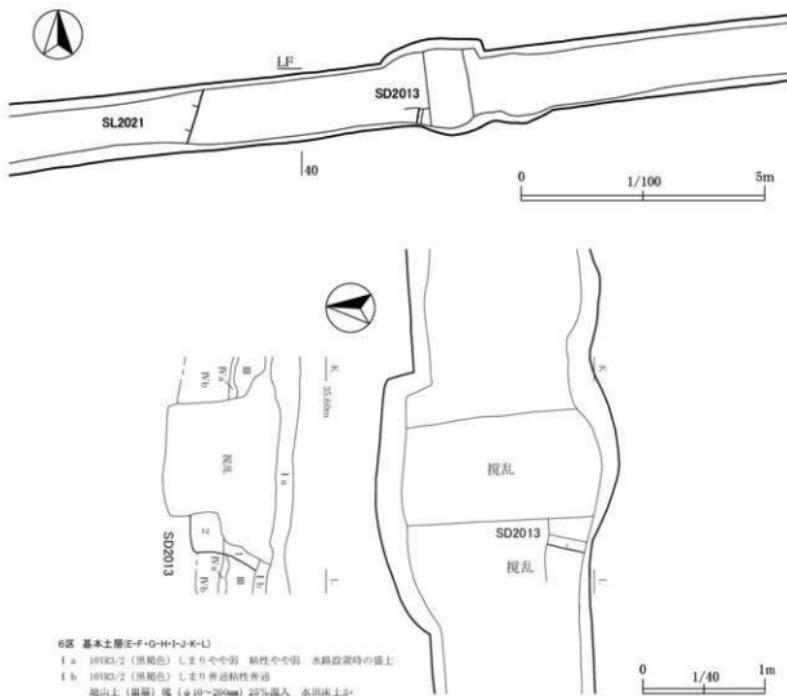
SD2011

- I 512/1 (黒色) しまりやや強 粘性強 地山土 (IV層) 粒 (ϕ 5~30mm) 2%混入

SD2012

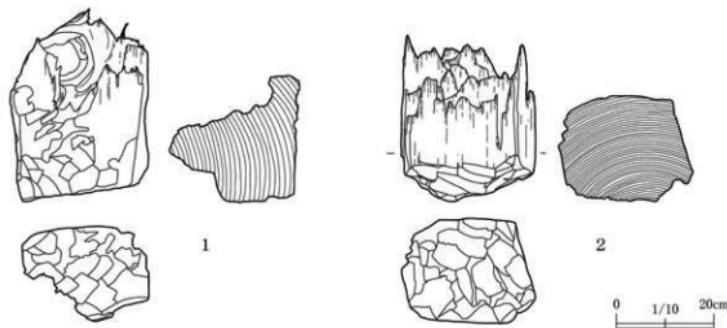
- I 512/1 (黒色) しまり普通 粘性普通 地山土 (IV層) 粒 (ϕ 5~10mm) 3%混入

第18図 5区の遺構 (2) SD2011, 2012

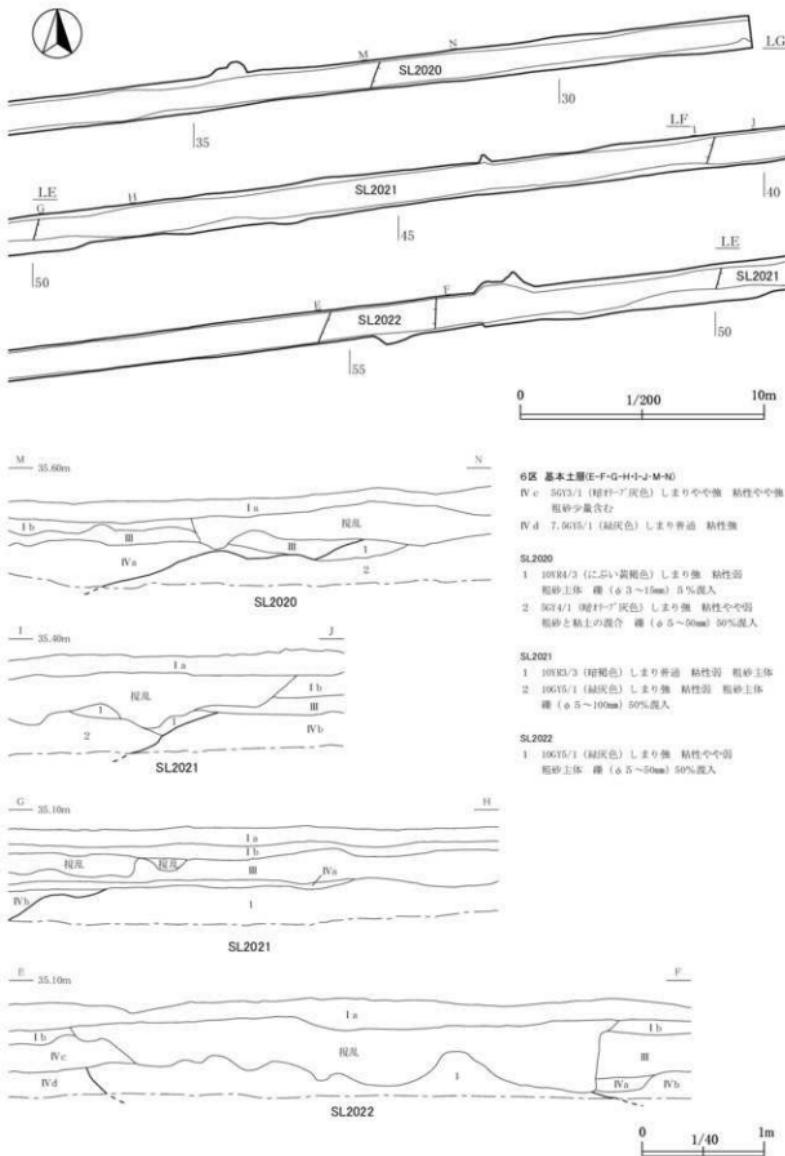


- 6区 基本土層(E-F・G-H・I-J-K-L)
- I-a 10V3/2 (黒褐色) しまりやや弱 粘性やや弱 水路設置時の盛土
 - I-b 10V3/2 (黒褐色) しまり普通粘性強 地山上(埴刷) 壱(φ 10~20mm) 20%混入 水田床上ら
 - III 10V3/3 (じぶい・黄褐色) しまりやや強 粘性少
 - IV-a 2. 9G4/1 (暗緑色) しまり普通 粘性強
 - IV-b 7. 9G4/1 (暗緑色) しまりやや強 粘性弱 砂礫主体 植物遺存体少量混入

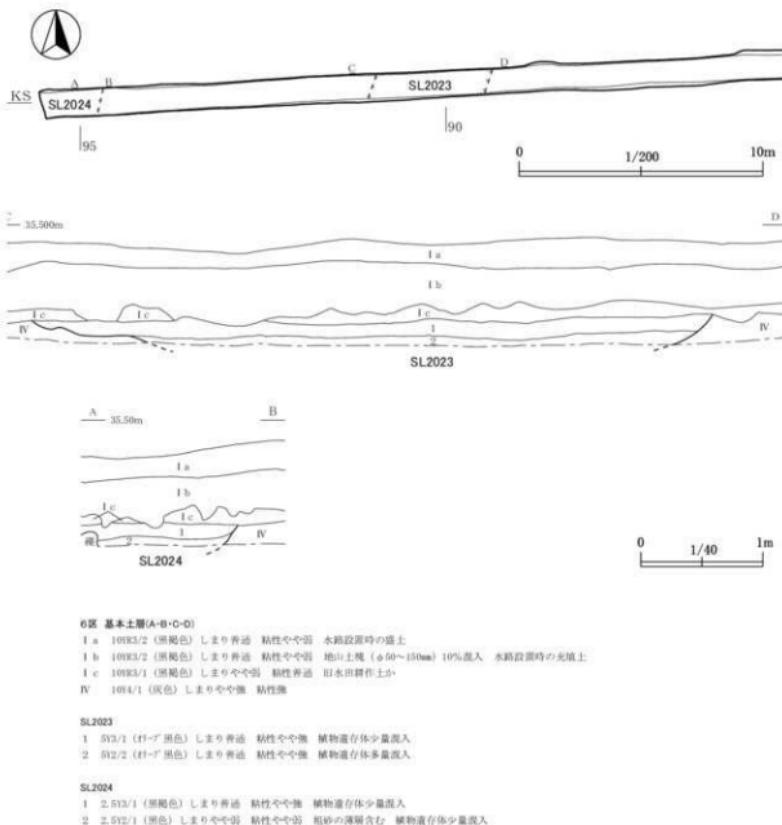
- SD2013
- 1 10V3/2 (黒褐色) しまり普通 粘性やや強 地山上(埴(φ 5~20mm) 15%混入
 - 2 10V4/1 (灰色) しまりやや強 粘性弱 地山上(埴(φ 3~15mm) 7%混入 角材設置時の光埴土か



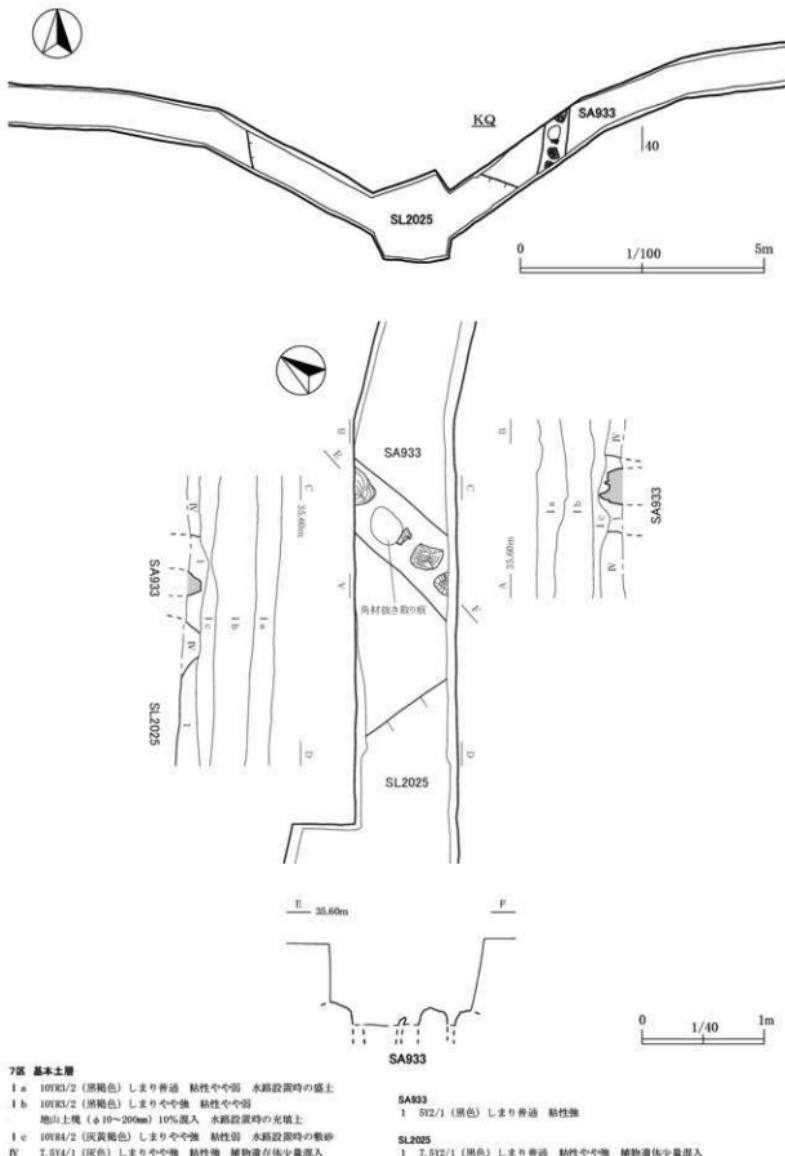
第19図 6区 の遺構 (1) SD2013



第20図 6区の遺構（2） SL2020, 2021, 2022



第21図 6区の遺構 (3) SL2023, 2024



第22図 7区の造構 SA933, SL2025

第2節 第145次調査の検出遺構と遺物

払田柵跡第145次調査は用排水路の改修に伴うものである。調査は第143次調査からの継続していることから第145次調査の調査区は用排水路の分岐点を境界とし、8区から20区に区分けした。また、調査区には次年度調査予定の暗渠埋設工事に先立ち、外柵北門の確認調査も含んでいる。

第145次調査の遺構数総計は、材木塀布掘溝跡2か所、溝跡42条、土坑11基、柱穴様ピット24基であり、加えて河川跡を36か所で確認した。第145次調査で使用した遺構番号は2028～2136である。材木塀布掘溝跡の調査にあっては、現状保存を原則とする認識に立ち、遺構確認後に図面・写真の記録を作成した後、埋め戻しを行った。

1 8区（第25・26図、図版16・17）

本区は調査区中央北側に位置する水田内である。次年度に予定されている暗渠設置工事に先立って調査をおこなった。文部省発行の『史蹟精查報告書第三 捕田柵址・城輪柵址』1938（昭和13）年によれば外柵北門には柱材が幾つか残されているとある。これを元に外柵北門の推定範囲で南北8m、東西10m、深さ40cmのトレンチを設定した。これに加え東端、西端に南北方向に長さ37m、幅1m、深さ1mのトレンチを設定した。今回の調査で柱材・柱穴は確認できず、北門付近が削平されていることが分かった。検出遺構は東端トレンチと西端トレンチから河川跡が1か所である。

S L 2028河川跡（第25図）

QQ17～18・QR17～18・QO17・QP17～18に位置する。第III層上面で灰黄褐色土と黒褐色土の広がりとして確認した。

河川跡は確認部分の幅が（南一北）6.65m、確認面からの深さは90cmである。壁は南側の立ち上がりは急であるが、北側の壁は下半は急に立ち上がり上半で緩やかとなる。底面は平坦である。

堆積土は7層に分層した。1層はシルトであるが、2層は細砂が主体でシルトがラミナ状に貫入する。3層では細砂主体にシルトがラミナ状に貫入する。4層は細砂が主体でシルトがラミナ状に貫入する。5・6層は粘土であるが、7層は粗砂主体の層である。全体的にシルトや細砂がラミナ状に堆積していることから水成堆積物である。

S L 2029河川跡（第26図）

QP14・QSに位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。

河川跡は確認部分の幅（南一北）は3.38m、確認面からの深さは45cmである。壁は立ち上がりが確認できる南側は緩やかに傾斜している。北側はS L 2029が調査区より更にのびているため不明である。底面は平坦である。

堆積土3層に分層した。どの層もシルト主体の層に細砂がラミナ状に入っている水成堆積物である。

2 9区（第27・28図）

本区は8区東側に位置する用水路部分であり、南北に約103mのび、南側に位置する12区に接続する。検出遺構は河川跡が3か所である。

S L 2030河川跡（第27図）

R J 15・P K15・R L 15に位置する。第III層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

河川跡は確認部分の幅（東一西）が4.35m、確認面からの深さは35cmである。壁の立ち上がりは西側で急であり、東側の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦であるが、西から中央に向かって段状に落ち込む箇所がある。

堆積土4層に分層した。1層はシルト主体で細砂がラミナ状に入るが、2層は細砂主体で黒色シルトが、3層は細砂主体で粗砂がともにラミナ状に入る。最下層の4層は細砂と黒色シルトが混入している。ラミナ状に堆積していることから水成堆積である。

S L 2031河川跡（第27図）

R H14~15・R I 14~15に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。

河川跡の確認部分は幅（東一西）が4.05m、確認面からの深さは50cmである。壁の立ち上がりは西側は急であり、東側の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は3層に分層した。1層はシルトで混入等は特にない、2層は細砂主体で粗砂・黒色シルトと互層・ラミナ状に堆積している。3層は2層の下にあるが端が僅かに重なっているだけで、東側に幅2.2mで塊状にある。粗砂主体で細砂・黒色シルトと互層・ラミナ状に堆積している。2・3層は水成堆積物である。

S L 2032河川跡（第28図）

R C 16~17に位置する。第III層上面で灰黄褐色土（シルト主体のものと細砂主体のもの2か所）の広がりとして確認した。

河川跡の確認部分は幅（東一西）が4.05m、確認面からの深さは78cmである。壁の立ち上がりは西側の壁は搅乱を受けており確認できなかった。東側の立ち上がりは急であるが、上面付近で緩やかに変化する。底面には20~60cmの傾斜があり、北から南に水が流れていたと考られる。

堆積土13層に分層した。2層以下細砂・粗砂主体になる。また6・9層には腐葉土のような植物遺体が少量堆積している。細砂・粗砂を多く含んでいることから水成堆積である。

3 10区（第29・30・35図）

本区は9区の東側に位置する排水路部分で、農道を挟んで9区と並行するように南北方向約87mのび、南側に位置する12区と接続する。検出遺構は河川跡が4か所である。

S L 2033河川跡（第29図）

R G 13・R H13に位置する。第III層上面で灰色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は遺構の規模が大きいため、立ち上がりのみの調査とした（南一北）。なお北側の立ち上がりは調査区の外にのびており調査範囲で確認できなかったことから、長さは調査区を越えた32m以上であると考られる。壁はの立ち上がりは南側は急であるが、上層付近で緩やかになる。底面は掘り下げていないため不明である。

堆積土6層に分層した。全ての層に1~10mmの大きさの地山土粒が1~3%で混入している。2層と4層、3層と5層の土性は同じである。

S L 2034河川跡（第35図）

Q Q11～12、Q R11～12に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。本遺構は壁での検出が出来ず調査範囲まで掘り下げた底部、平面上でのみ確認することができた。本遺構は調査範囲よりも深く堆積していたがそれ以上掘り下げなかつた。断面土層は両壁は搅乱されており確認することができなかつた。確認面の土層から河川跡と判断した。河川跡の確認部分は幅は（南一北）6.01mである。平面上での確認なので壁の立ち上がり・底面・底面標高は不明である。

堆積土は確認面土層1層だけである。地山粒や炭化物が1%程度混入しており、水成堆積物である。
S L 2035河川跡（第30図）

QL11・QM11・QH10・Q I 10～11・Q J 10～11・Q K11に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（南一北）14m、確認面からの深さは80cmである。壁の立ち上がりは両壁とも緩やかである。底部は部分的に深く下がる。

6層に分層した。1層と2層、3層～5層は同じ土性で地山土粒の混入具合のみの違いである。地山土粒は下層にいくにつれて多く混入している。

S L 2036河川跡（第29図）

QE10～11・Q F11に位置する。第III層上面で暗褐色土の広がりとして確認した。遺構は南北方向に延びるが、南方向の立ち上がりは調査区外へのびていて正確な幅は不明である。調査範囲で確認できなかつたことから、調査範囲を超えた幅は2.1m以上であると考えられる。壁は北側の立ち上がりは急であるが1層からは緩やかになる。底面は掘りきっていなため不明である。

3層に分層した。しまりや粘性、土質に大きな違いはないが、下層へ行くにつれ還元色が強まる。12区でもS L 2036が検出されている。

4 11区

本区は住宅地にの間を通る全長約53mの用水路部分である。地山まで削平したあと庭用の床土が盛られている。床土は植物の浸食を受け土壤化している。11区と13区の間には住宅の新築・改築に伴う第57・96調査が行われている。どちらの調査でも河川跡を確認したのみで遺構・遺物の出土はなかつた。本調査では遺構の検出はなかつたが、遺物は須恵器、陶磁器が出土した。

5 12区（第31～42図）

本区の北側には矢島川が流れしており、南北にのびる9・10区と接続する。本区は全長約390mの排水路部分で、農道を挟んで南側には13区用水路が並列している。検出遺構は河川跡が11か所である。出土遺物は土師器、須恵器、白磁、丸瓦、平瓦、土製品、石製品、木製品（曲げ物底板・箸・斎串）である。

S L 2036河川跡（第31・32図）

OE09～11・Q D10～11に位置する。第III層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅（東一西）は4.7m、確認面からの深さは50cmである。壁は西側は削平・搅乱されており不明である。東側の壁は緩やかに立ち上がる。底面は舟底形である。

堆積土は4層に分層した。1層はシルト、2層は砂質土、3層はシルトである。4層はシルトと砂質土がほぼ同量の混合層である。

出土遺物は1・2・4層から出土した土師器を接合した壺が1点、4層から須恵器の墨書き土器（壺）が2点、須恵器の壺が3点、1・4層から出土した須恵器を接合した壺が1点、1層から須恵器の壺が1点、4層から平瓦が1点出土した。

1・2・4層から出土した土師器や須恵器が接合できることから1～4層は近い時期に堆積した可能性がある。

S L 2037河川跡（第41・42図）

P O 85～90・P P 79～90・P Q 79～80に位置する。第III層上面で暗灰黄色土の広がりとして確認した。東西方向にのびる全長約43.5mの遺構であるが、必ずしも連続しておらず部分的に皿状または帯状に点在している。確認面からの深さは最大で12cm、最小で4cmである。

堆積土は単層である。1～10cmの厚さで粗砂～細砂がラミナ状に貫入していることから水成堆積である。

S L 2038河川跡（第38・39図）

P R 63～66・P S 61～66に位置する。第V層上面にオリーブ褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東～西）9.1m、確認面からの深さは50cmである。壁は東西ともに緩やかに立ち上がり、底面は緩やかな波形である。

堆積土は単層である。砂質土で、径5～10cmの礫が混じる。

S L 2039河川跡（第38・39図）

P S 58～61に位置する。第V層上面に黒褐色土の広がりとして確認した。確認範囲は幅が（東～西）10.9m、確認面からの深さは80cmである。本遺構では南北方向の断面を確認するために断面ベルトを設けた。壁の立ち上がりは、西壁は緩やかで東壁はやや急である。底面は緩やかな波形である。

堆積土は9層に分層した。1層は堆積状況から2層以下が堆積した後に2次堆積した可能性がある。2～8層は砂質土で径5～10cmの礫が混じる。6層では植物遺体の堆積を確認した。9層は粘土でここでも少量ながら植物遺体が堆積し、6～9層までは近い時期に堆積した可能性がある。

S L 2040河川跡（第33・34図）

P T 50～53に位置する。第III層上面に黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東～西）12.5mで、確認面からの深さは98cmである。西側には古い暗渠が通っており、その周辺は擾乱されている。このため西側の壁の立ち上がりは確認できなかった。東側は、なだらかな起伏の後、急に立ち上がる。

堆積土は26層に分層した。1層は東側に長さ1.45m、深さ5cmであるが、その下の2層はS L 2041の上にまで堆積しており、広範囲に確認できる。3～9層は西端に位置する。3層はシルトだが、4～9層は砂質土である。10層はシルトに細砂がラミナ状に貫入しており10層までが1つの水成堆積である。11～20層はS L 2040の中央付近で2層下まで立ち上がっている。2層の下に堆積する11層と19層、11層の下に堆積する12層はシルトであるがそれより下に堆積する層は砂質土であり水成堆積である。S L 2040の東端部に堆積する21～26層はシルトである。

出土遺物は土師器が9～10層から甕が2点（うち1点は13層から出土した破片と接合）、11層から壺が2点、甕が2点、10～11層から甕が2点、24～25層からは壺が1点出土している。須恵器は9～10層から壺が1点、10～11層から甕が1点出土している。土製品は10層から壺が2点、4～9層から白

磁の碗が1点、木製品は9~10層から曲げ物底板が1点、斎串が1点、10~11層から箸が1点出土している。

9~10層の出土遺物と13層の出土遺物が接合できることから10~13層は近い時期に堆積したと考えられる。

S L 2041河川跡（第33・34図）

P T 48~53に位置する。第III層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東~西）1.3m、確認面からの深さは30cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。またS L 2040の2層下に位置するが切り合はない。底部は平坦である。

堆積土は2層に分層した。両層ともシルトであり1層は地山土塊が30%、2層は地山土塊が40%含んでいる。

S L 2042河川跡（第36・37図）

P T 46~48、Q A 43~48に位置する。第III層上面で褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東~西）12.2m、確認面からの深さは95cmである。壁は西側の立ち上がりは緩やかであるが東側の壁は擾乱を受けており不明である。底面は中央部は深く掘り込まれているが東西方向には40cm程の深さで広がっている。

堆積土は16層に分層した。1・5・6・8・12~16の9層はS L 2042の中央付近に堆積しているこの9層に切られる形で17層が西側に堆積している。2~4・7・9・11層はS L 2042中央から東側にかけて薄く広く堆積している。堆積土は全て砂質土であり、堆積状況から水成堆積である。

S L 2043河川跡（第31・32図）

Q E 09~11に位置する。第III層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東~西）3.2m、確認面からの深さは30cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急であり、底面は平坦である。

堆積土は2層に分層した。両層ともにシルトで植物遺体が少量堆積している。

S L 2044河川跡（第31・32図）

Q G 93・94に位置する。第III層上面で暗褐黄色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東~西）5.3m、確認面からの深さは43cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は3層に分層した。3層とも暗褐黄色シルトで地山土粒の混入割合に差がある。1層の下に2・3層が並んで堆積しており西側に3層が、中央から東に向かって2層が広がっている。

出土遺物としては丸瓦が1点出土している。

S L 2045河川跡（第40図）

Q F 01~04に位置する。第III層上面で灰黄色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東~西）7.2m、確認面からの深さは60cmである。壁の立ち上がりは西側は緩やかであり、東側は急である。底面は平坦である。

堆積土は5層に分層した。シルトと砂質土が互層になっていることから水成堆積である。

S L 2046河川跡（第35図）

Q G 93・94に位置する。第III層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が

(東一西) 3.7m、確認面からの深さは 8cm である。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は皿状である。

堆積土は 3 層に分層した。3 層とも粘土で、1・2 層には十和田a火山灰の混入が確認できた。

6 13区（第43～60図、図版14～16）

本区は12区と並行する南北方向にのびる全長約508mの用水路部分である。東側では住宅地のまでのびる。途中で北方向へ向きを変えるがそこからは14区に区分けされる。検出遺構は溝跡が40条、土坑が 7 基、柱穴様ピットが23基、これに河川跡が 7 か所である。出土遺物は土師器、須恵器、土製品、石製品、陶器である。

S L2044河川跡（第46・47図）

Q B05・06、QC 06に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東一西）4.5m、確認面からの深さは60cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は単層である。黒褐色シルトで地山土粒を 3 % を含んでいる。

S L2045河川跡（第46・47図）

Q D00～03に位置する。第III層上面で黄灰色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東一西）6.6m、確認面からの深さは70cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにやや急である。S L2045は立ち上がりの記録だけのため底面形は不明である。

堆積土は 6 層に分層した。2 層以下はシルトと砂質土が互層であることから水成堆積である。

S L2046河川跡（第59図）

Q E 93・94に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東一西）3.0m、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は 3 層に分層した。1～3 層とも黒褐色シルトで 1・2 層は火山灰を含んでおり、含有割合は 2 層の方が多い。東に広がるにつれ 1 层と 2 層は減少していき、途中で 1 层直下が 3 層になる。

S K2051土坑（第43・44図）

P L 02に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。土坑の確認部分は長さが（東一西）54cm、確認面からの深さは14cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直であり、底面は平坦である。

堆積土は 2 層に分層した。2 層とも黒褐色土シルトで地山土粒と炭化物を含む。

S K2052土坑（第43・44図）

P L 02に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。土坑の確認部分は長さが（東一西）31cm、確認面からの深さは32cmである。壁の立ち上がりは東壁は搅乱を受けており不明である。西壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は 2 层に分層した。2 層とも黒褐色土シルトで地山土粒と炭化物を含む。

S K P 2053柱穴様ピット（第43・44図）

P L 01に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東一西）

40cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は急であり、底面はほぼ平坦であるが中央に柱材のあたりとみられる窪みがある。

堆積土は単層である。黒褐色土シルトで、上部は擾乱の影響で一部が削平を受けている。

S K P 2056柱穴様ピット（第43・44図）

P L01に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東一西）50cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁は急であり、東壁はほぼ垂直である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は2層に分層した。2層とも黒褐色土シルトで地山土粒と炭化物を含む。

S K P 2057柱穴様ピット（第43・44図）

P L01に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東一西）42cm、確認面からの深さは24cmである。壁の立ち上がりは両壁とともにほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

堆積土は2層に分層した。1層が柱痕跡である。

出土遺物は1層から土師器と須恵器の甕が1点ずつ出土している。

S K 2060土杭（第45図）

P L00に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東一西）74cm、確認面からの深さは49cmである。壁の立ち上がりは両壁とともにほぼ垂直である。底面はほぼ平坦であるが東側立ち上がり付近で小さく落ち込む。

堆積土は3層に分層した。3層ともシルトで地山土粒と炭化物を含んでいる。特に2層は地山土塊40%と多く含んでいる。

S K 2063土杭（第45図）

P L98・99に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東一西）60cm、確認面からの深さは24cmである。壁の立ち上がりは西壁は急であるが、東壁は擾乱を受けしており不明である。底面は中央付近で80cmほど落ち込んでいる。

堆積土は単層であり、シルトである。

S K 2066土杭（第45図）

P L97に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東一西）1.02m、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりは西壁はやや急、東壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2068溝跡（第45図）

P L96に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）31cm、確認面からの深さは6cmである。壁の立ち上がりは西壁はやや急、東壁はほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2069溝跡（第45図）

P L95・96に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一

西) 33cm、確認面からの深さは8cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S K2070土杭 (第45図)

P L 95に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは(東-西) 55cm、確認面からの深さは4cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2071溝跡 (第45図)

P L・P M95に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は(東-西) 22cm、確認面からの深さは5cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急であり、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2068、2069、2071、は土層の特徴がS K2070と類似していることから S D2068、2069、2071と S K2070は同時期の遺構だと考えられる。

S D2072溝跡 (第48・49図)

P M91に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は(東-西) 29cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2073溝跡 (第48・49図)

P M89・90に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は(東-西) 32cm、確認面からの深さは21cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにはほぼ垂直であり、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2074溝跡 (第48・49図)

P M89に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は(東-西) 31cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁共に急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2072～2074は地山土の混入割合に多少の差異はあるが、ほぼ同じ特徴であり同時期の遺構と考えられる。

S D2075溝跡 (第48・49図)

P M88に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は(東-西) 30cm、確認面からの深さは6cmである。壁の立ち上がりは両壁共にほぼ垂直にであり、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2076溝跡 (第48・49図)

P M88に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は(東-西)

20cm、確認面からの深さは8cmである。壁の立ち上がりは西壁は急であり、東壁は攪乱（暗渠）により不明である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2077溝跡（第48・49図）

P M・P N87に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2078溝跡（第48・49図）

P M・P N86に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）34cm、確認面からの深さは13cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2079溝跡（第48・49図）

P M・P N86に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2075～2079は1.5～2.0m間隔に検出した。溝も同一方向にのびている。

S D 2080溝跡（第50図）

P N85に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）24cm、確認面からの深さは6cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2081溝跡（第50図）

P N84に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2082溝跡（第50図）

P N84に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）24cm、確認面からの深さは11cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2083溝跡（第50図）

P N83に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）13cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

ある。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2084溝跡（第50図）

P N83に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）10cm、確認面からの深さは7cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2085溝跡（第50図）

P N83に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは19cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2086溝跡（第50図）

P N82・83に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）28cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は楕型である。S D2087と切り合い関係にあり、本遺構の方が新しい。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2087溝跡（第50図）

P N82に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。S Dの確認部分は幅が（東－西）26cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直であり、底面は平坦である。S D2087と切り合い関係にあり、本遺構の方が古い。

堆積土は1層に分層した。シルトで地山土塊中～極大25%を含んでいる。

S D 2088溝跡（第50図）

P N82に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）38cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2089溝跡（第50図）

P N82に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）36cm、確認面からの深さは18cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2090溝跡（第50図）

P N81・82に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは18cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。平面は楕型である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2091溝跡（第51図）

P N 80・81に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）24cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2092溝跡（第51図）

P N 80に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）46cm、確認面からの深さは18cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は2層に分層した。2層ともシルトであるが下層の方が大きい地山土塊を含んでいる。

S D 2093溝跡（第51図）

P N 80に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）38cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2094溝跡（第51図）

P N 79・80に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）34cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2095溝跡（第51図）

P N・P O 79に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）24cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は楕型である。

堆積土は2層に分層した。シルトで2層とも地山土塊を多く含むが下層の方がより多く地山土塊を含んでいる。

S D 2096溝跡（第51図）

P N・P O 79に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）26cm、確認面からの深さは6cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2097溝跡（第51図）

P N 78・79、P O 78・79に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）42cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は東から西へ緩やかに傾斜している。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D 2098溝跡（第51図）

P N・P O 78に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。S Dの確認部分は幅が（東一西）62cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は

急に立ち上がる。底面は東から西に緩やかに傾斜している。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2099溝跡（第51図）

P N・P O77に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにはば垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2100溝跡（第51図）

P O76に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）44cm、確認面からの深さは19cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり東壁は急である。底面は平坦である。S D2101と切り合い関係にあり、本遺構が新しい。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2101溝跡（第51図）

P O76に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）20cmである。確認面からの深さは8cmである。壁の立ち上がりは東壁は緩やかであるが西壁はS D2100と切り合っているため不明である。なお本遺構の方が古い。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2102溝跡（第51図）

P O76に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）40cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2103溝跡（第51図）

P O75・76に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分は幅が（東－西）45cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は1層に分層した。シルトで地山土塊中～極大20%を含んでいる。

S D2104溝跡（第51図）

P O75に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）32cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2105溝跡（第52図）

P O73に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）34cm、確認面からの深さは8cmである。壁の立ち上がりは両壁とも急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S K2106土杭（第52図）

P O72に位置する。第III層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）

1.2m、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は中央や東よりから10cmほどの窪みがある。

堆積土は単層であり、シルトである。

S D2107溝跡（第53図）

P Q55・56、P R55に位置する。IV層上面で暗オリーブ灰の広がりとして確認した。S D2107は北壁と南壁の2面で記録をとっており、北壁の確認部分の幅は（東一西）63cm、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁も急である。南壁の確認部分の幅は（東一西）77cm、確認面からの深さ41cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。S D2107は沈殿槽の裏込め土の下から検出されており一部で搅乱の土が流入している。底面は北壁では西側に急に落ち込んでいる。南壁では東側から中央にかけて緩やかに落ち込み、中央から西側に向かっては平坦である。

堆積土は北壁は4層、南壁は6層に分層した。上層はシルトであるが下層に向かって粘土に変化していく。

S L2115河川跡（第54図）

P R48に位置する。III層上面で暗褐色土、灰黄褐色土、黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）7.86m、確認面からの深さは1.15mである。壁の立ち上がりは、西壁は急であるが東壁は緩やかである。底面は完全に掘り下げていないため、不明である。

堆積土は5層に分層した。一番上層の1層はシルトで地山土塊が大～極大で20%を含むが2層以下は砂質土で砂礫小～大を含んでいることから水成堆積である。

S L2116河川跡（第55図）

P S42～44に位置する。III層上面で黒褐色の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東一西）7.25m、確認面からの深さは70cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は完全に掘り下げていないため、不明である。

堆積土は5層に分層した。1、2層はシルトで、特に2層は礫を多く含んでいる。3～5層は砂質土で礫が中～極大で30～50%と多く含んでいる。このことから水成堆積と考えられる。

S L2117河川跡（第57・58図）

Q A22、Q B15～22、Q C15～16に位置する。III層上面で黒褐色、黄灰色の広がりとして確認した。S Lの確認部分の幅は（東一西）14.15m、確認面からの深さは32cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は3層に分層した。レンズ状に堆積しており2層が大部分を占めている。3層は側に幅1.5m、厚さ10cmで堆積している。遺物は全ての層から出土しており、特に2層と3層からは多くの土器片が出土している。また2層、3層には植物遺体が少量含まれていた。

S L2118河川跡（第56図）

Q C09～11に位置する。III層上面で褐灰色の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東西）4m、確認面からの深さは43cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであるが西壁の方がより緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は4層に分層した。1層はシルトで、2層、3層と移る毎に粘性が高くなっていくが4層は

砂質土である。

S D2119溝跡（第59図）

Q E、Q F 91に位置する。III層上面で暗灰黄色の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）54cm、確認面からの深さは24cmである。壁の立ち上がりは両壁共にはほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は2層に分層した。2層とも粘土であるが、1層には水成堆積と思われる砂が層状に混入していることから河川の氾濫などで流れ込んだ土が堆積した層だと考えられる。

S D2120溝跡（第60図）

Q L 48に位置する。III層上面で暗オリーブ色の広がりとして確認した。確認部分の幅は2.2m、確認面からの深さは45cmである。壁の立ち上がりは両壁共に急であり、底面は平坦である。

堆積土は単層である。シルトであるが位置的に外柵材木塀布掘溝跡の可能性もある。遺構内には柵木などの遺物は確認できなかったが、すぐ隣が烟であることから抜き取られた可能性がある。

第2表 柱穴様ピット一覧表

SKP番号	検出区	検出面	平面形	規模 (m)		底面標高 (m)	備考
				長軸	短軸		
2047	PK04	III	圓丸方形	0.22	0.20	33.994	
2048	PK04	III	不整形	0.38	0.13	33.956	暗渠に切られている。
2049	PK04	III	圓丸方形	0.30	0.19	34.043	
2050	PL02	III	不整形	0.22	0.18	33.987	一部が壁にかかっている。
2054	PL01	III	圓丸方形	0.48	0.46	33.916	
2055	PL01	III	不整形	0.18	0.10	33.915	一部が壁にかかっている。
2058	PL01	III	円形	0.34	0.26	33.936	
2059	PL00・01	III	円形	0.40	0.34	33.715	土師器の坏出土
2061	PL99・00	III	円形	0.48	0.46	33.696	土師器の坏・甕出土。甕は内側に煤が付着している。
2062	PL99	III	不整形	0.40	0.29	34.010	土師器の坏・甕出土。甕は外側に煤が付着している。一部が壁にかかっている。
2064	PL98	III	不整形	0.40	0.17	33.970	一部が壁と搅乱に切られている。
2065	PL97	III	円形	0.25	0.25	34.010	
2067	PL97	III	円形	0.28	0.25	34.020	
2108	PR50	III	円形	0.26	0.22	34.360	
2109	PR50	III	円形	0.34	0.34	34.430	
2110	PR49・50	III	不整形	0.39	0.38	34.269	一部が壁にかかっている。
2111	PR49	III	円形	0.30	0.20	34.357	2112と切り合い、こちらが古い。
2112	PR49	III	円形	0.30	0.24	34.237	2111と切り合い、こちらが新しい。
2113	PR48	III	圓丸方形	0.30	0.26	34.385	
2114	PR48	III	不整形	0.22	0.08	34.428	一部が壁にかかっている。

ここに掲載する柱穴様ピットは平面図及び断面図に記録されていないものである。

S K P 2059、2061、2062からは土師器が出土している。このうちS K P 2061からは内側に煤が付いた甕が、S K P 2062からは外側に煤が付いた甕が出土している。S K P の検出は全てIII層の上面である。S K P 2047～2067までは13区でも西側に位置している。S K P 2108～2114は13区の中央付近に位置する。

7 14区

本区は調査区の最東端に位置し、住宅地内を通る用水路である。住宅地と隣接していることもあり所々に搅乱が確認できた。遺構は検出されなかったが遺物は須恵器が出土している。

8 15区（第61～64図、図版17）

本区は調査区のほぼ中央に位置し東西方向に422.5mのびる排水路である。北側には13区が、南側には17区がある。本来の工事予定では直線であったが15区の西端で外柵材木塀角材列を検出したことから、これを迂回する形で工事が変更された。検出遺構は材木塀が2条、河川跡が2か所である。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器が出土した。

S A2121角材列（第61図）

O G08に位置する。確認部分の長さは（東一西）1.3m、幅40cm、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが部分的に搅乱されている。底面はほぼ平坦である。本遺構とS A2122にはボーリング棒による調査で柵木が残存していることを確認している。

堆積土は3層に分層した。1層は裏込め土か2層が裏込めされた後に流入した層で、2層は裏込め土、3層は柵木が埋まっていた層である。堆積土は全て粘土である。

S A2122角材列（第62図）

OM99、00に位置する。確認部分の長さは（北東一南西）1.75m、幅47cm、確認面からの深さは35cmである。断面図は北壁と南壁の2面を記録しており、壁の立ち上がりは、両断面、両壁ともにはほぼ垂直で、底面は、北壁は平坦であるが南壁は部分的に搅乱の影響を受けているせいか起伏がある。また、本遺構はボーリング棒による調査で柵木が残存していることを確認している。

堆積土は3層に分層した。3層は柵木の埋められていた層、2層は柵木の裏込め土、1層はその上にできた礫堆に堆積した層となっている。南壁は水田耕作地にあり、部分的に搅乱されている。また1層には礫が多く含まれていることから河川堆積したと考えられる。

S L 2123河川跡（第63図）

O T37～45、P A34～45に位置する。確認部分の長さは（東一西）30.6m、確認面からの深さは1.1mである。壁の立ち上がりは、西壁は搅乱を受けており不明であるが、東壁は急である。底面は調査範囲よりも奥に河川跡のがのびているため不明である。

堆積土は7層に分層した。1～4層、7層はシルトであるが5、6層は砂質土である。2、4、5、6層は礫を含んでおり、水成堆積である。

S L 2124河川跡（第64図）

P F91～94、P G84～94、P H76～86、P I 68～77、P J 68～71に位置する。確認部分の長さは（東一西）78.8m、確認面からの深さは60cmである。壁の立ち上がりは西壁は急である。東壁は調査区外にのびているため不明である。底面も調査区外にのびているため不明である。

堆積土は2層に分層した。1層はシルトで、2層は砂質土である。また2層は礫を多く含んでおり、水成堆積である。

9 16区（第65～67図）

本区は調査区の南東に位置し、北東一南北方向に110.9mのびる用水路である。調査区の境界上にあり、北側は15区と、南側は17区と接している。また、本区の南側には用水路があり、その時の工事の影響か造成土直下が地山土になる。検出遺構は土坑が2基、柱穴様ピットが1基、河川跡が1か所である。出土遺物には須恵器がある。

S K 2125土杭（第65図）

N O・O 85に位置する。確認部分の長さは（南西一北東）1.63m、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりは南西壁は急であるが北東壁は緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は2層に分層した。2層とも黒褐色シルトである。

S K P 2126土杭（第66図）

O T・P A 78に位置する。確認部分の長さは57cmの正方形の中心に23cmの円形プランがある。確認面からの深さは30cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直であり、底面は平坦である。

堆積土は2層に分層した。1層は柱痕跡で、2層は掘方である。

S K 2127土杭（第66図）

P D・P E 71に位置する。確認部分の長さは（南西一北東）1.5m、確認面からの深さ38cmである。断面図は南西の壁で記録しており、壁の立ち上がりは南東壁は調査区外までのびており不明であるが北西壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は3層に分層した。3層ともシルトで、下層へ進むほど褐色が強くなる。底部から木材が出土した。

S L 2128河川跡（第67図）

P G 69・70に位置する。確認部分の幅は（南西一北東）95cm、確認面からの深さ22cmである。壁の立ち上がりは、西壁は緩やかであるが東壁は河川のえぐり込みで削られており急である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は6層に分層した。1と4層、3と5層は同じ性質の土で互層に堆積している。

10 17区（第68～70図）

本区は調査区の南側に位置し、東一西方向に309.4mのびる用水路である。南側には18区が並行しており、東側は16区がある。ここからは河川跡が3か所検出している。遺物は土師器、須恵器が出土した。

S L 2129河川跡（第68図）

N Q 81・82に位置する。確認部分の幅は（東一西）3.85m、確認面からの深さは32cmある。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は急である。底面はほぼ平坦である。18区でも断面で確認できる。

堆積土は2層に分層した。1層は粘土であるが2層は砂質土である。

S L 2130河川跡（第69図）

O A 48・49に位置する。確認部分の長さは（東一西）3.35m、確認面からの深さは48cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は舟底形である。18区でも断面で確認できる。

堆積土は7層に分層した。1層はシルトであり、土器片が出土している。2～6層までは粘土である。4層には火山灰が板状に堆積している。最下層である7層は砂質土である。

S L 2131河川跡（第70図）

O B37～39、O C37・38に位置する。確認部分の幅は（東一西）7m、確認面からの深さは41cmである。中央部分に搅乱が確認できた。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面はほぼ平坦である。

堆積土は11層に分層した。基本的にシルトであるが底部の11層は砂質土である。下層に下がるにつれグライ化が進んでいる。

11 18区（第71～74図）

本区は南側にあり、17区と並行して東一西方向に306.5mのびる用水路である。東側に進むと南西一北東方向にのびている19区の北側で合流する。南側には20区が位置する。ここからは溝跡1条、土坑2基、河川跡3か所を検出している。出土遺物は土師器、須恵器、木製品（鰯）である。

S L 2129河川跡（第71図）

N O82・83に位置する。S D2132と切りあっており、S L 2129をS D2132が切っていることからS L 2129の方が古い。確認部分の幅は（東一西）2.1mで、確認面からの深さは30cmである。壁の立ち上がりは、西壁はS D2132に切られ不明であるが東壁は緩やかである。底面は起伏が多い。

堆積土は単層でシルトである。

S L 2130河川跡（第72図）

N S47～49、N T47・48に位置する。確認部分の長さは（東一西）4.75mで、確認面からの深さは40cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は一旦急になった後に緩やかに変化する。底面は平坦である。

堆積土は7層に分層した。ほとんどは粘土であるが底部の7層は砂質土である。本遺構の1層から土器片が出土している。

S D2132溝跡（第71図）

N O83に位置する。S L 2129と切りあっており、S L 2129をS D2132が切っていることからS L 2129の方が古い。確認部分の幅は（東一西）75cmで、確認面からの深さは40cmである。壁の立ち上がりは、両壁ともに急で東壁は西壁よりもさらに急になり垂直に近い。底面は楕円形である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S K2133土杭（第71図）

N O80・81に位置する。確認部分の長さは（東一西）2.23mで、確認面からの深さは31cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は楕円形である。

堆積土は4層に分層した。1・2層はシルトであるが3・4層は粘土である。

S K2134土杭（第73図）

O B28に位置する。確認部分の長さは（東一西）90cmで、確認面からの深さは35cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底部は楕円形である。

堆積土は単層であり、シルトである。

S L2135河川跡（第74図）

O E 02~05に位置する。確認部分の幅は（東一西）9.2mで、確認面からの深さは64cmである。本遺構の中心付近には幅2.6m、深さ68cmの擾乱が確認できた。西壁は立ち上がり部分が擾乱されており不明である。東壁は河川跡が調査区外にまでびているためこちらも立ち上がりは不明である。底面は西側はほぼ平坦であるが、東側は深いため調査した範囲では確認できなかった。

堆積土は21層に分層した。粘性や土色、混入物の違いから分層したが、似たような特徴の層がラミナ状に堆積している。また上、中間層はシルトであるが下層へ進むにつれ砂質土になる。11層からは木製の鈸が出土している。

12 19区

本区は調査区の南東に位置し、南西一北東方向に212.8mのびる用・排水路である。ここでは用水路と排水路が並行して設置された。延長上には16区があり北側では18区が近接し、南側では20区と接続する。前のフリューム埋設工事影響か、本区は全体的に擾乱を受けており壁や底面からビニール片や瓶類などを確認した。遺構、遺物の出土はなかった。

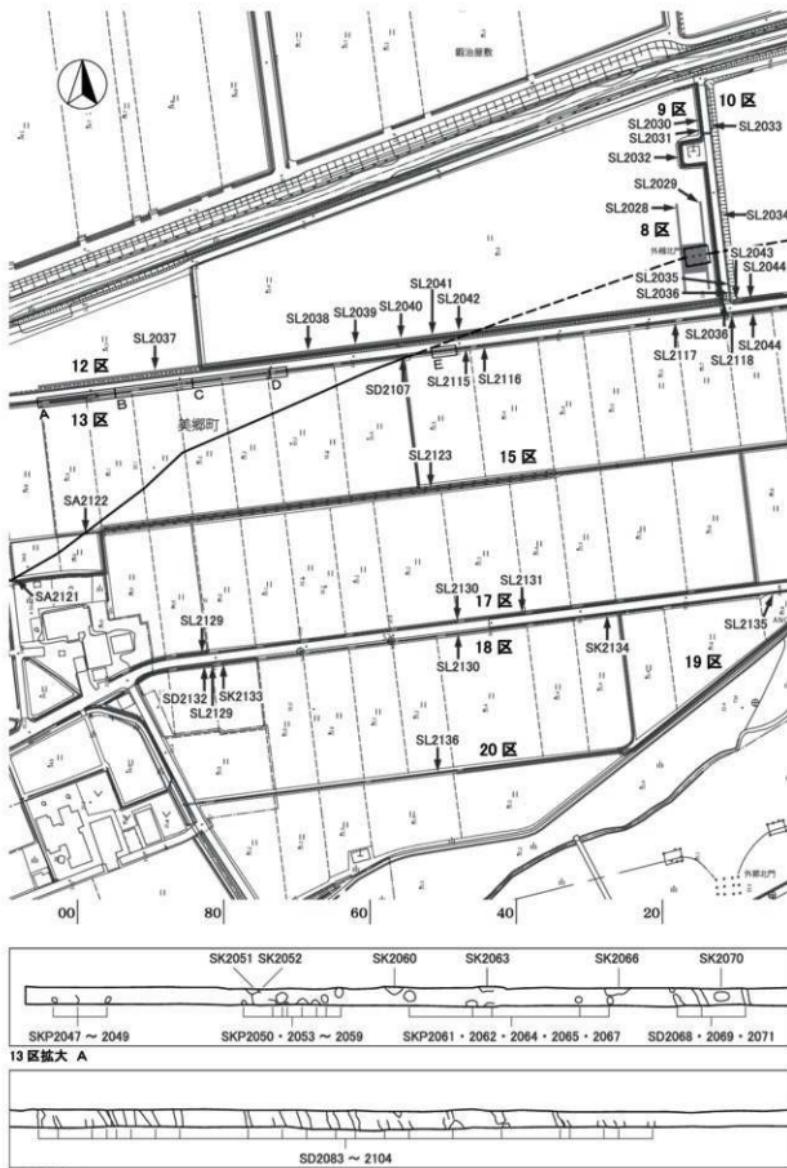
13 20区（第75図）

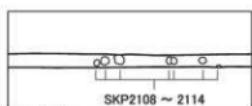
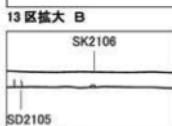
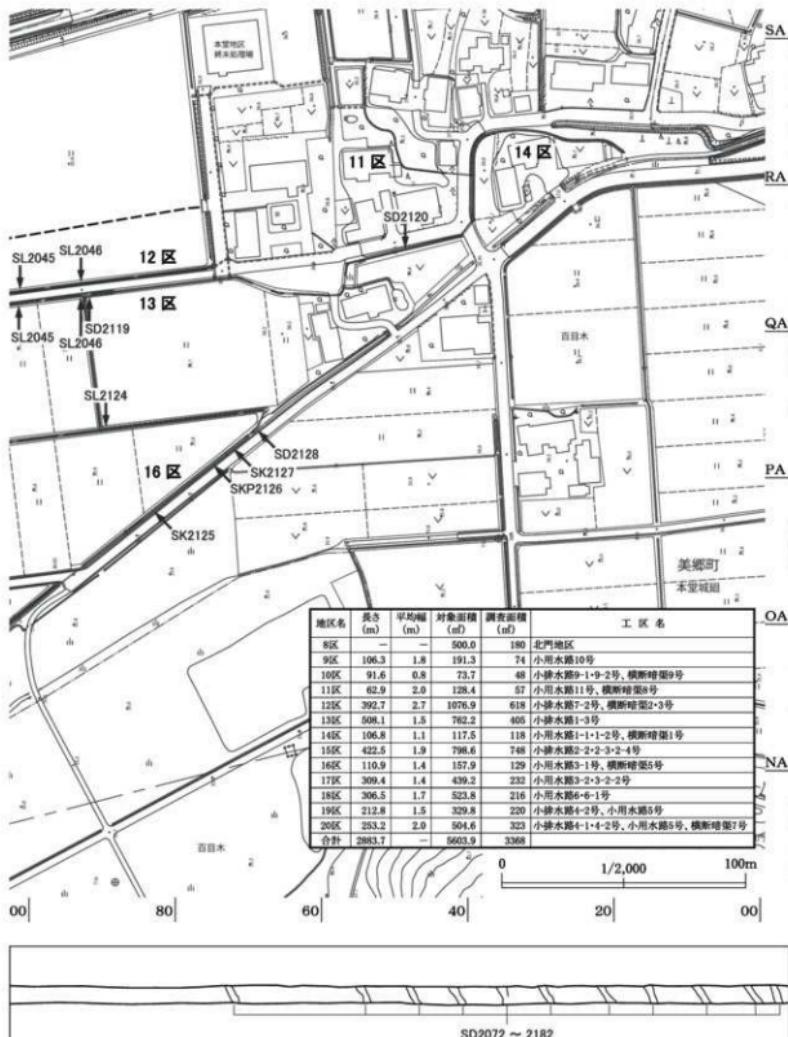
本区は調査区の最南端に位置し東一西方向に253.2mのびる用・排水路である。ここも用水路と排水路が並行して設置され、19区の用排水路と接続する。ここからは河川跡1条を検出した。出土遺物は土師器、須恵器であり、須恵器の中には墨書き器も含まれる。

S L2136河川跡（第75図）

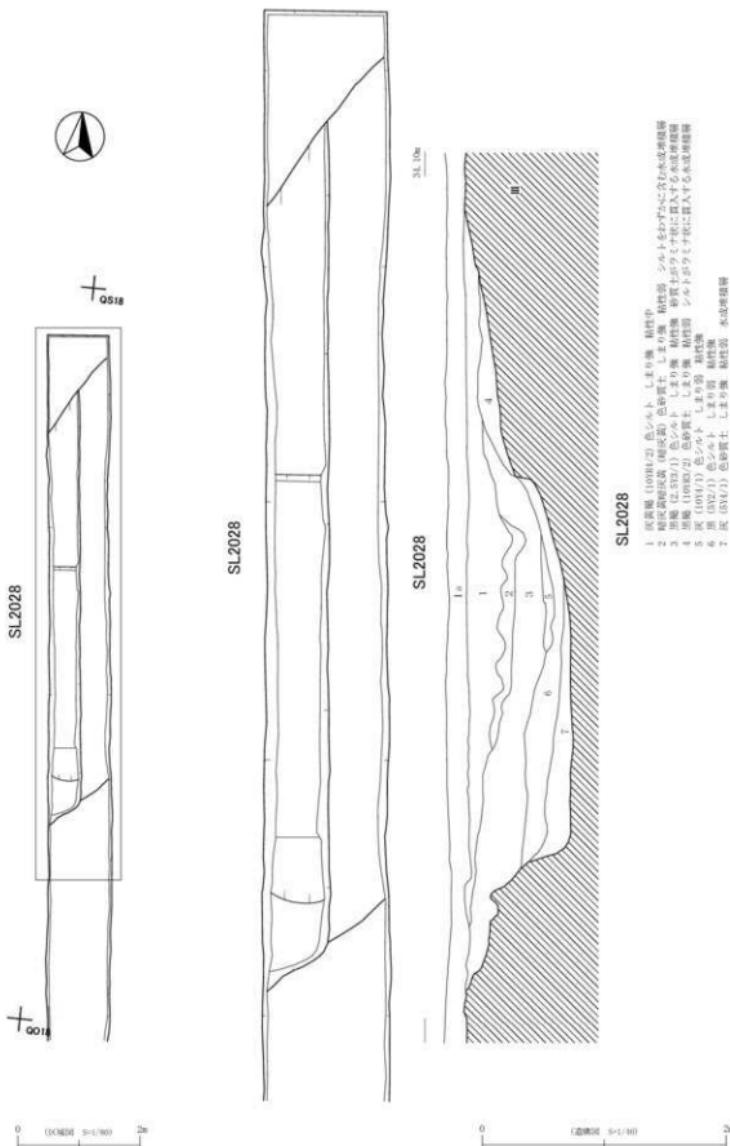
MT 51・52、NA 51・52に位置する。確認部分の幅は6.3m、確認面からの深さは9cmである。壁の立ち上がりは両壁共に緩やかである。底面は本区が全体的に擾乱されているため不明である。

堆積土は2層に分層した。2層とも砂質土であり、1層からは土師器、須恵器が出土している。

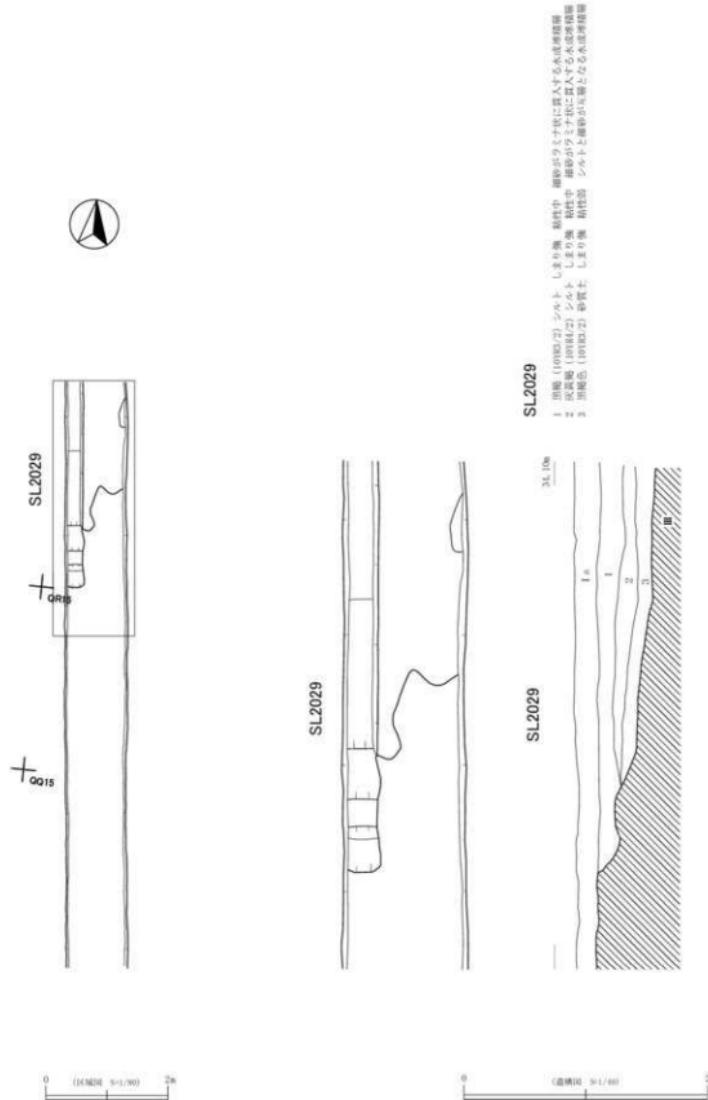




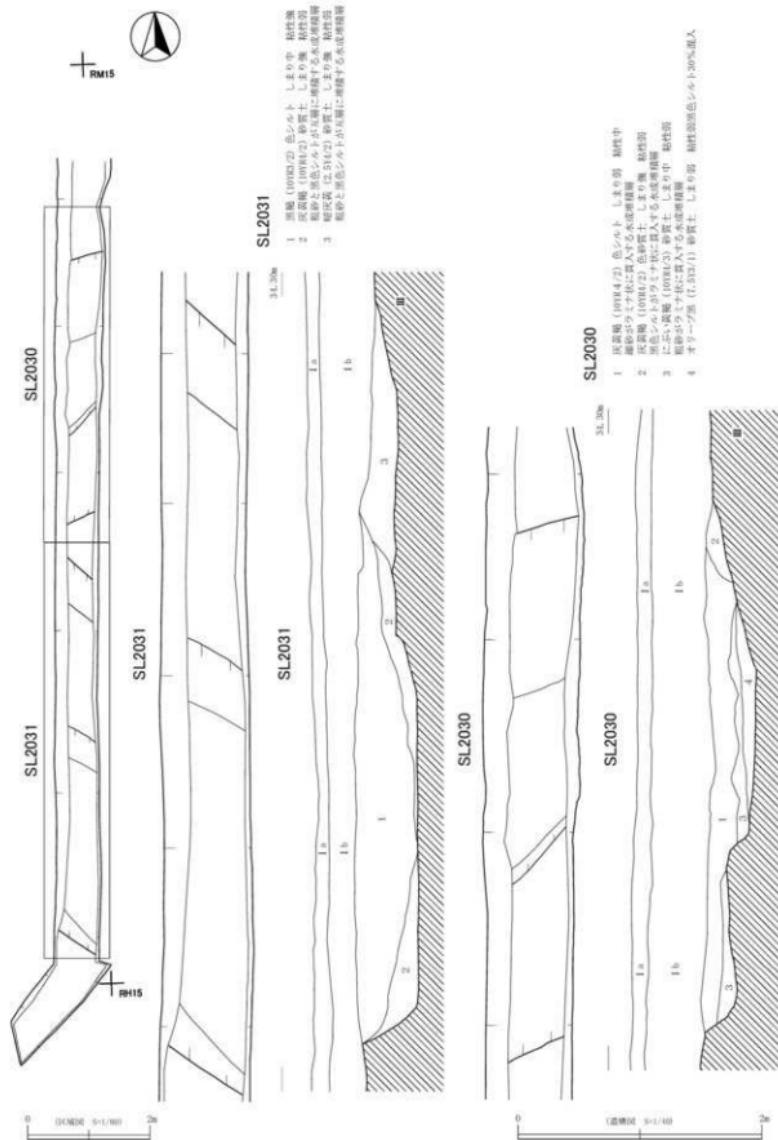
第24図 第145次調査 トレンチ・遺構配置略図（2）



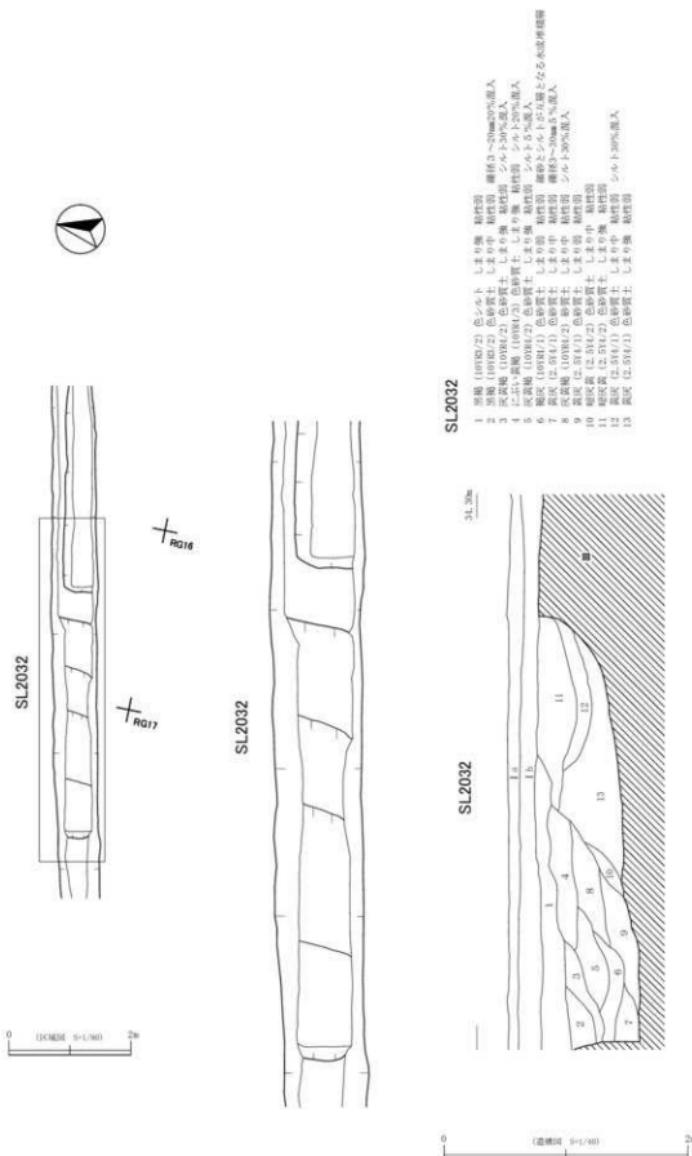
第25図 8区の遺構（1） SL2028



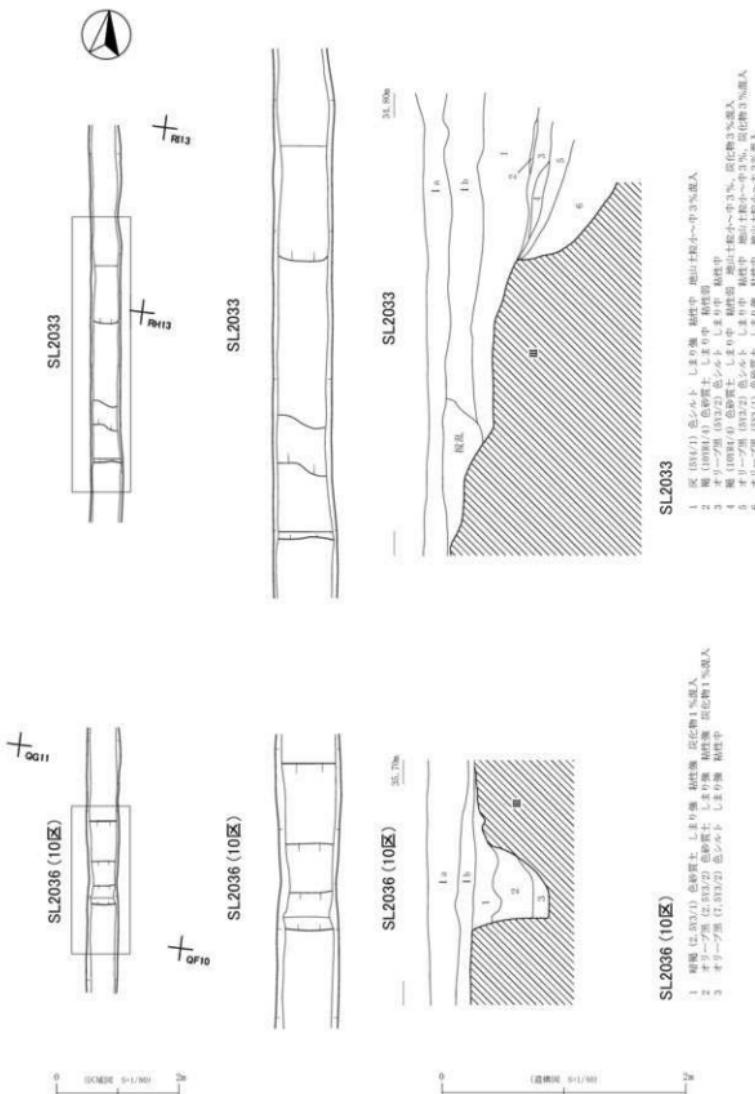
第26図 8区の造構 (2) SL2029



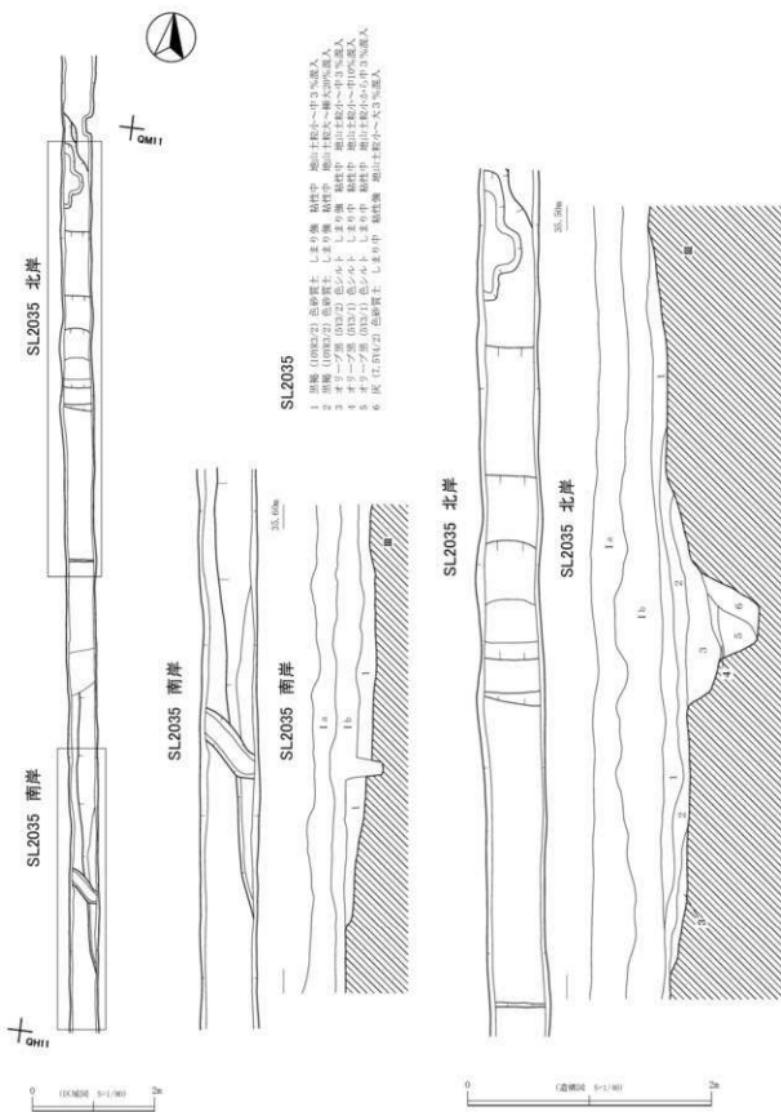
第27図 9区の遺構 (1) SL2030, 2031



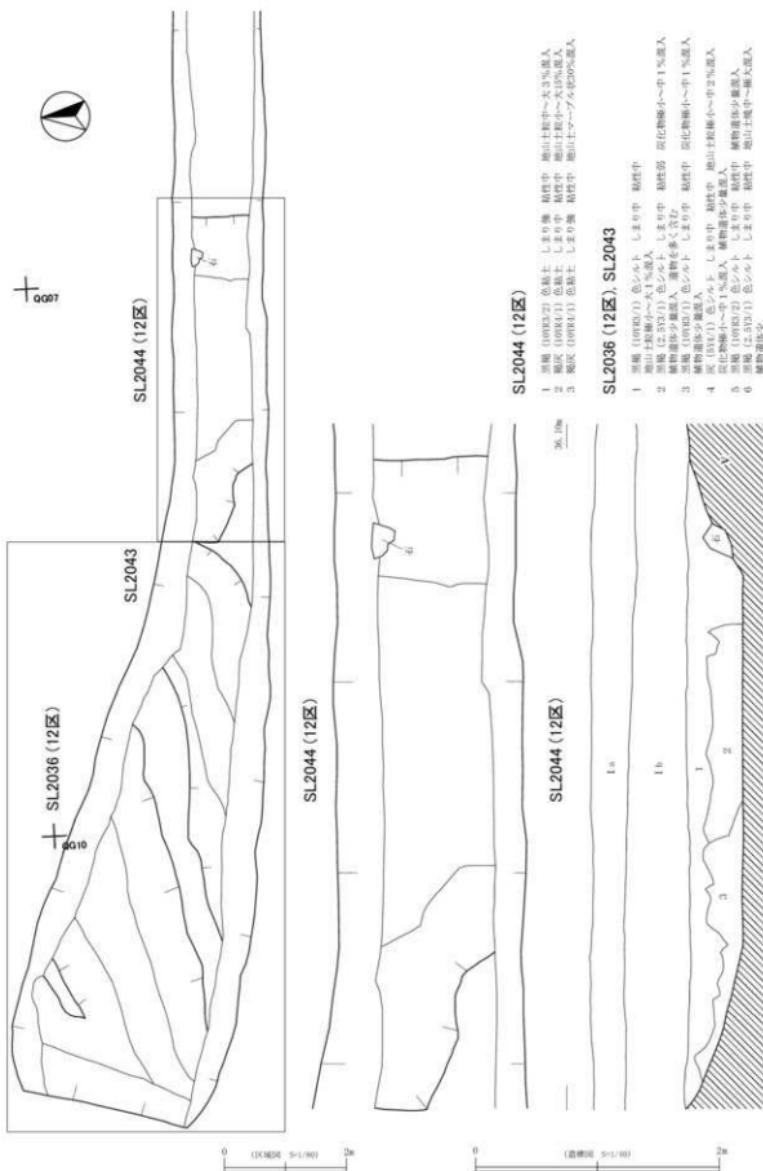
第28図 9区の遺構 (2) SL2032



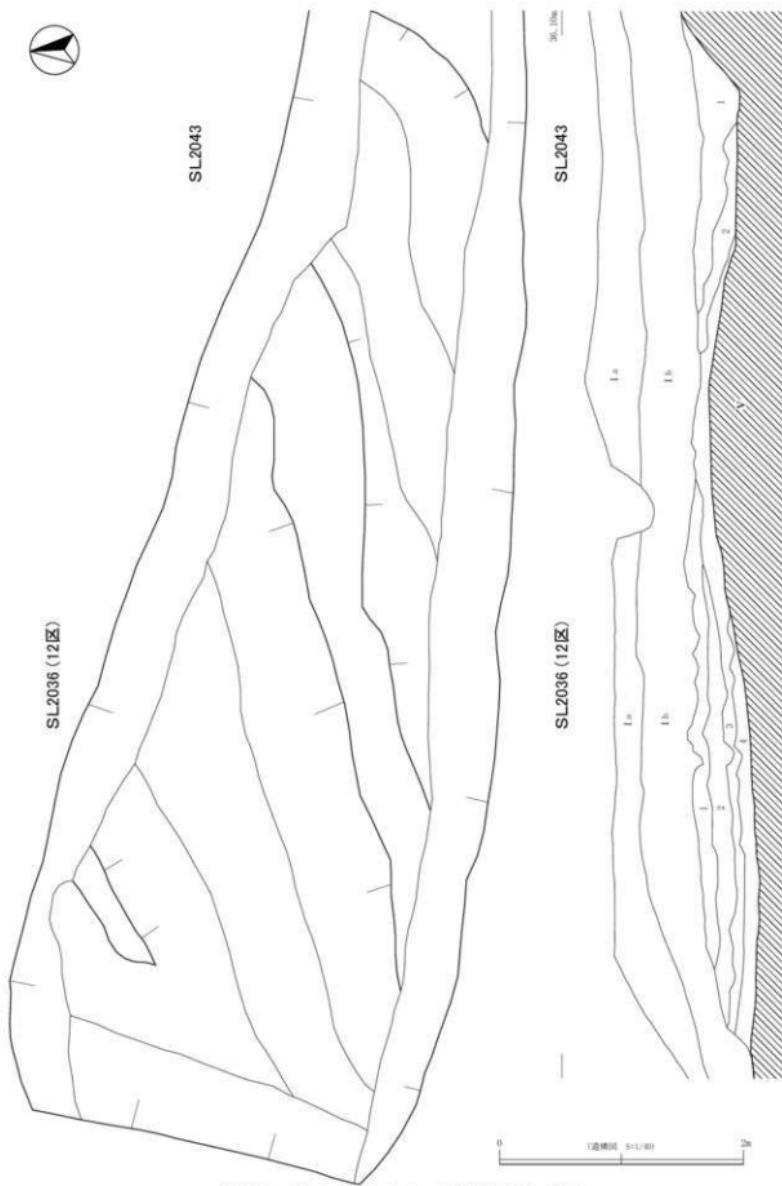
第29図 10区の遺構 (1) SL2033, 2036



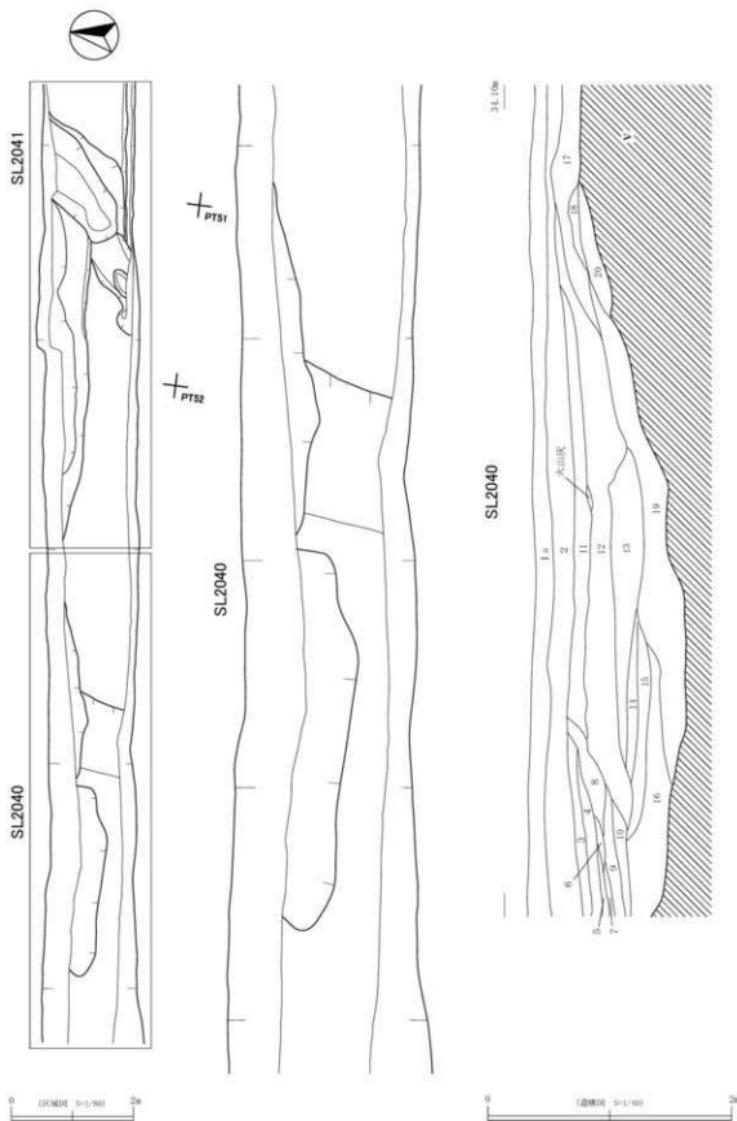
第30図 10区の造構 (2) SL2035



第31図 12区の遺構（1） SL2036, 2043, 2044



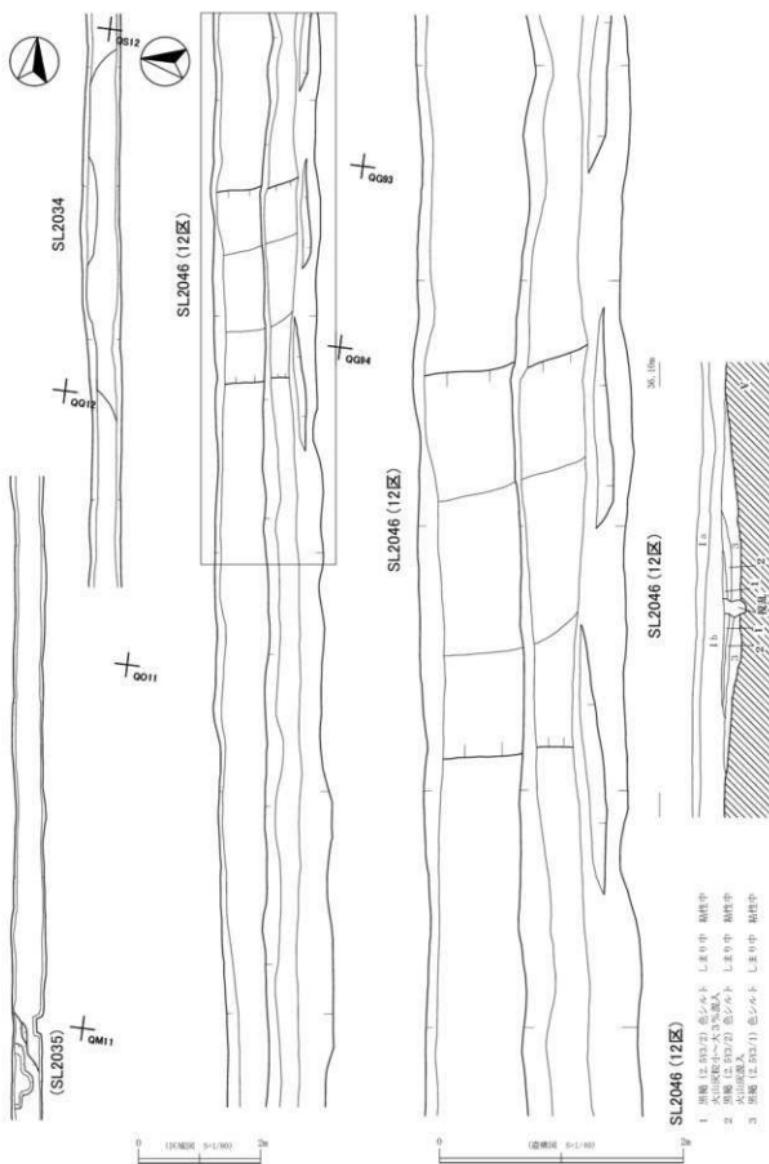
第32図 12区の遺構（2） SL2036, 2043, 2044



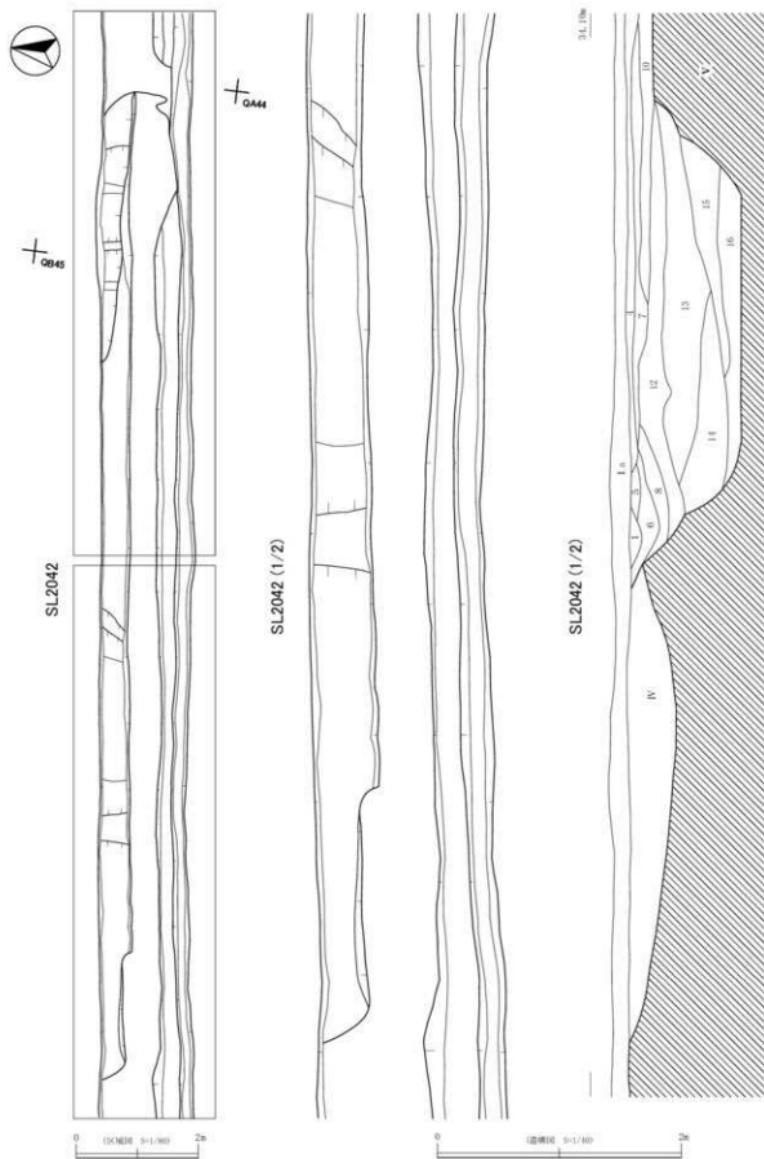
第33図 12区の遺構（3） SL2040, 2041



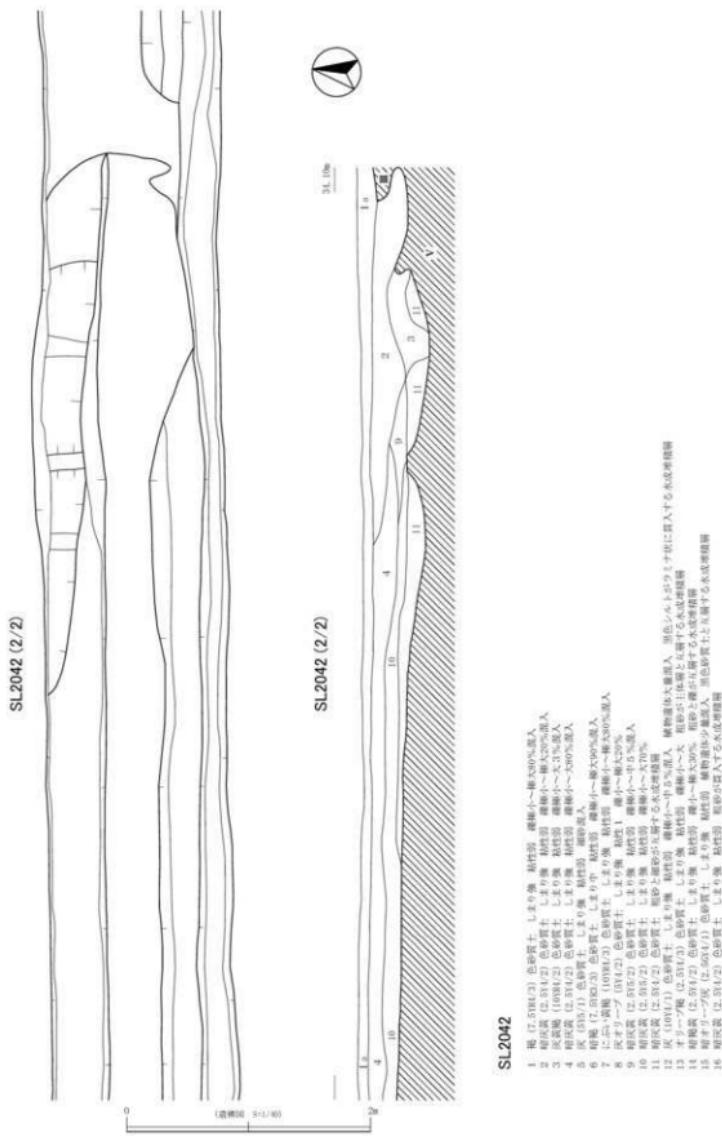
第34図 12区の遺構（4） SL2040, 2041



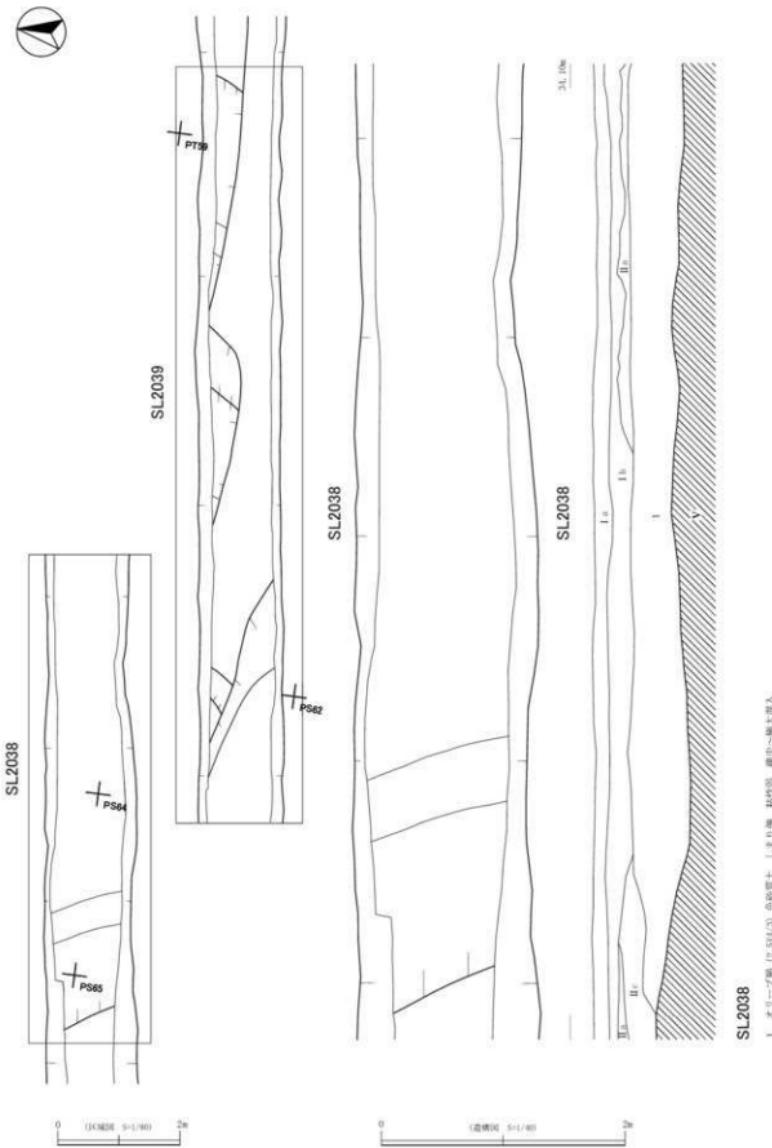
第35図 10・12区の遺構 SL2034, 2046



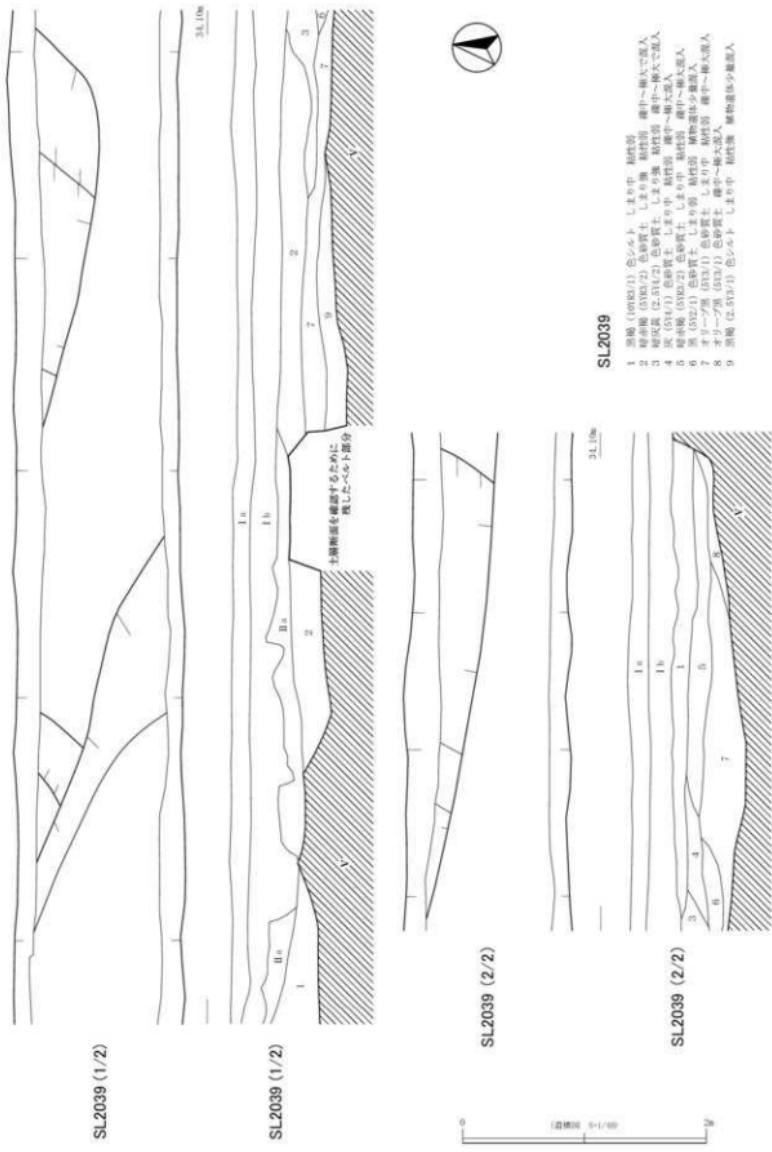
第36図 12区の造構 (5) SL2042



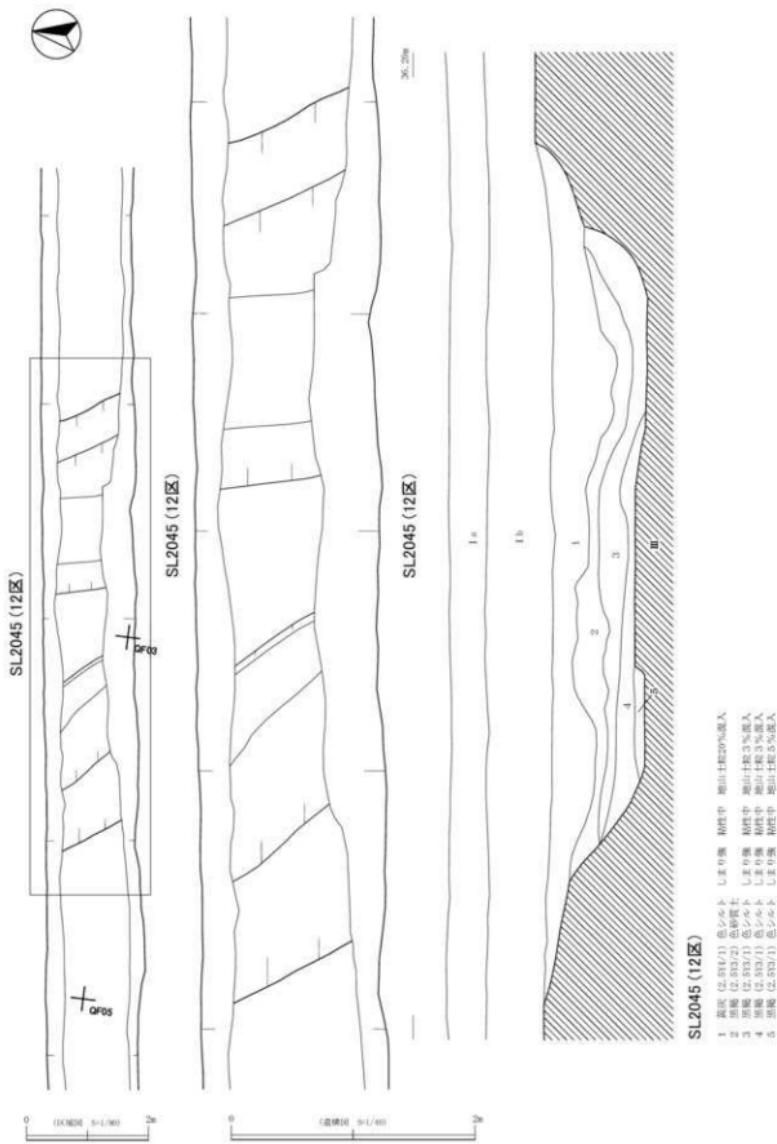
第37図 12区の遺構（6） SL2042



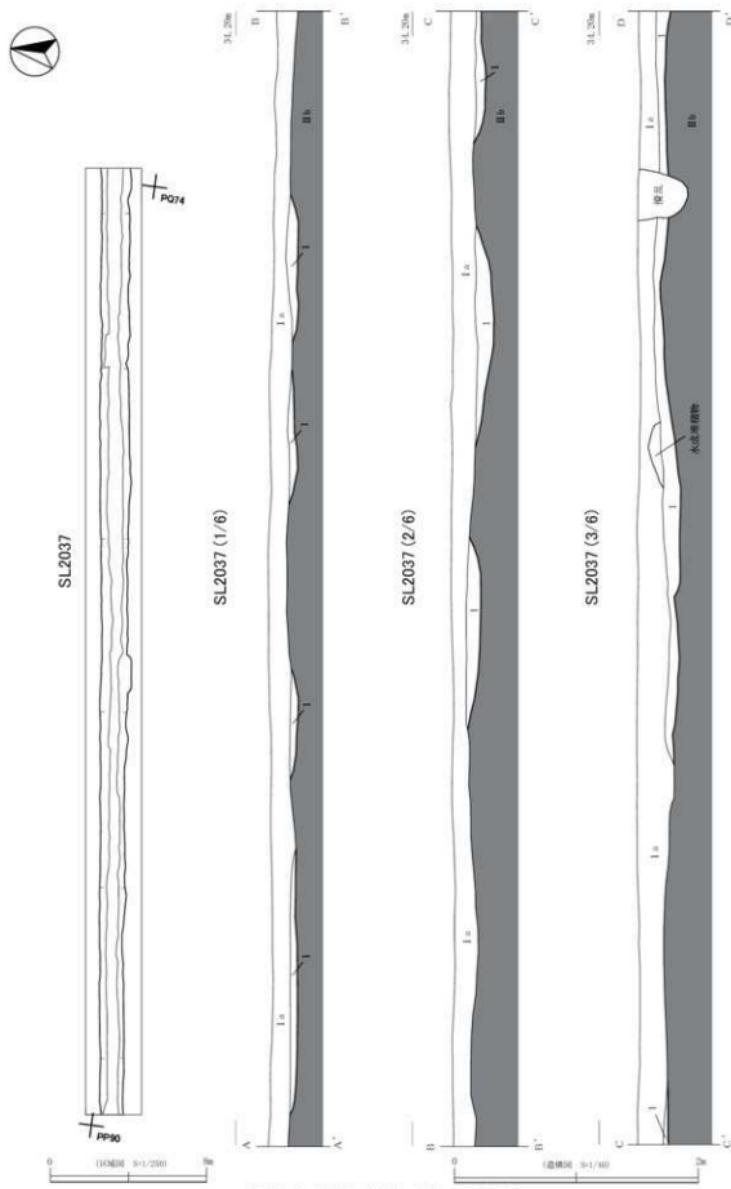
第38図 12区の遺構 (7) SL2038, 2039



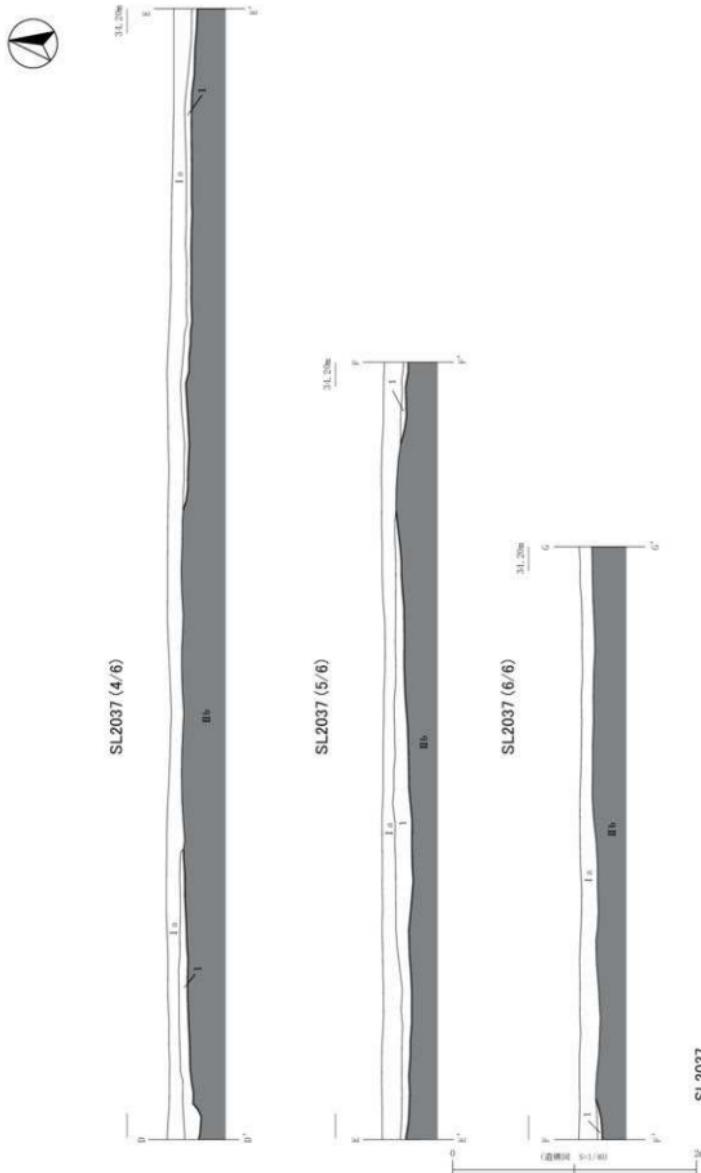
第39図 12区の遺構 (8) SL2038, 2039



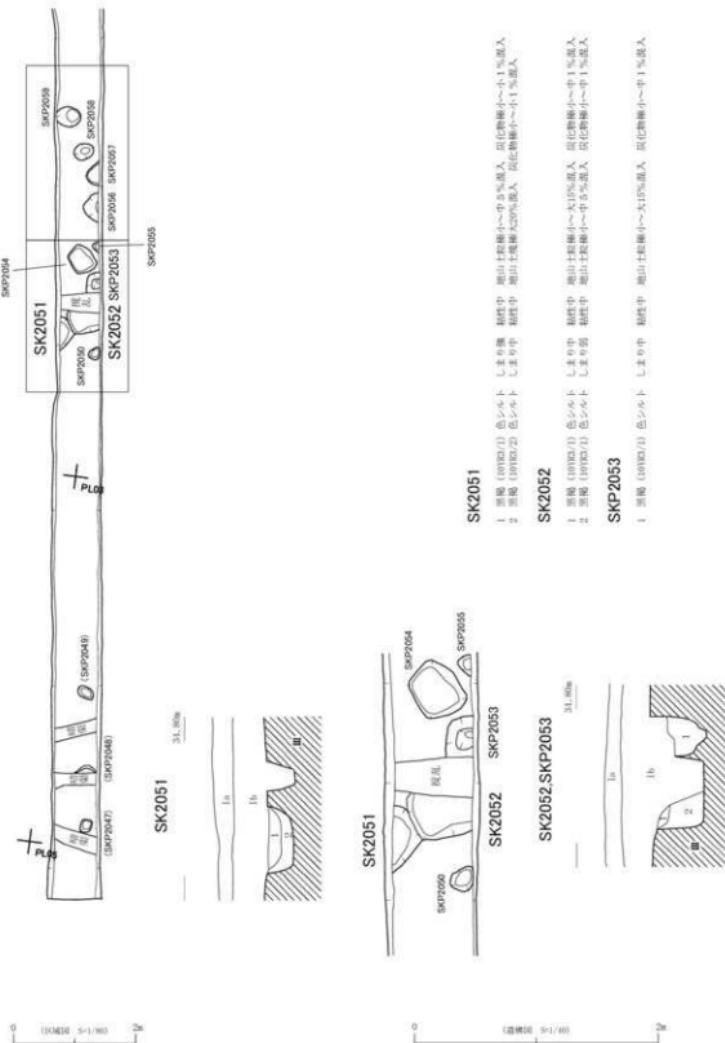
第40図 12区の造構 (9) SL2045



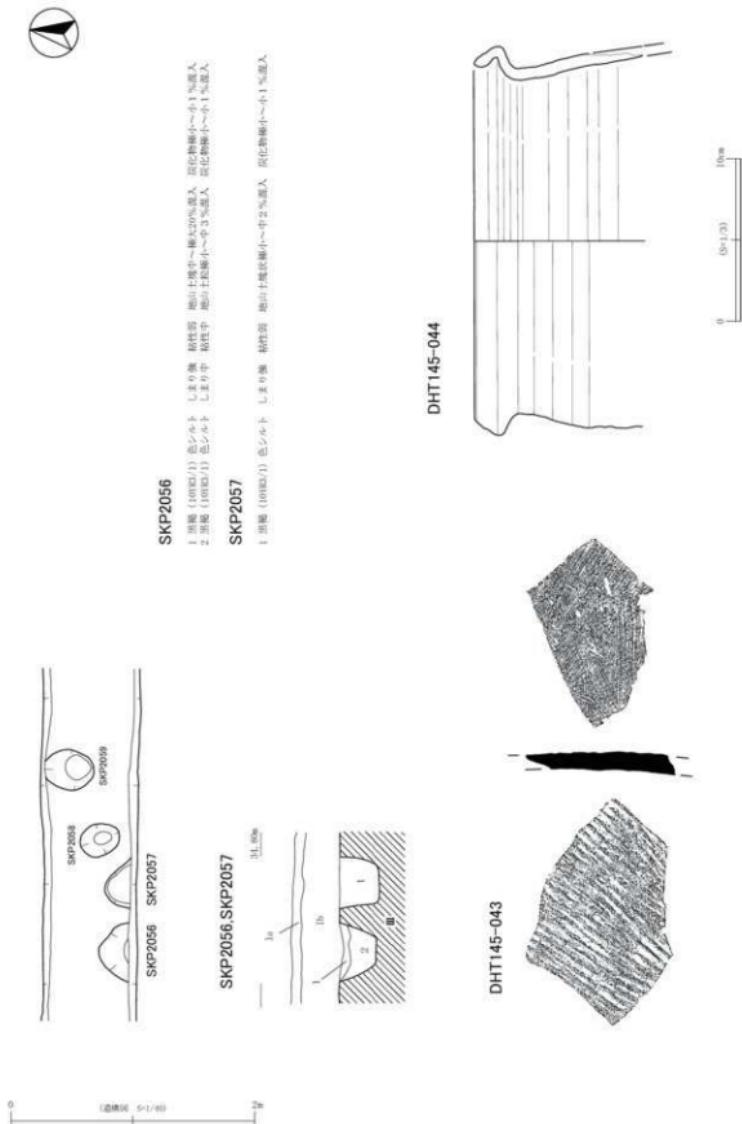
第41図 12区の遺構 (10) SL2037



第42図 12区の造構 (11) SL2037

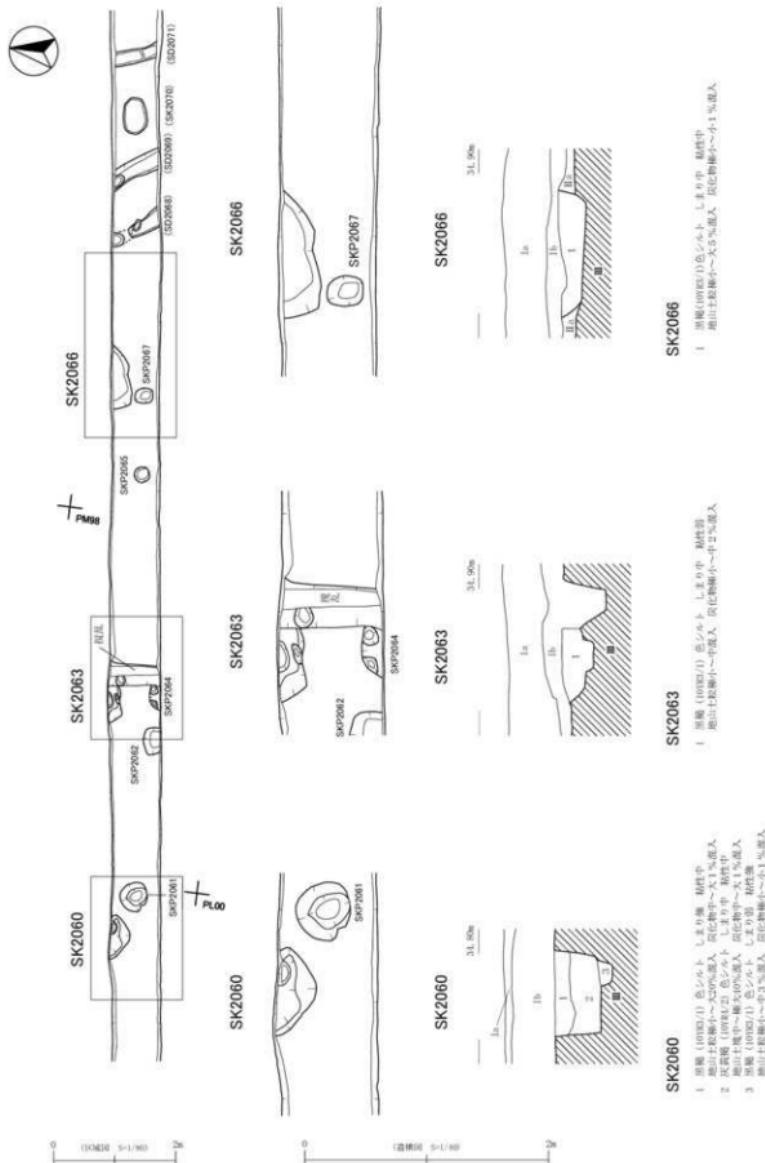


第43図 13区の遺構（1） SKP2051, 2052, SKP2050, 2053～2059

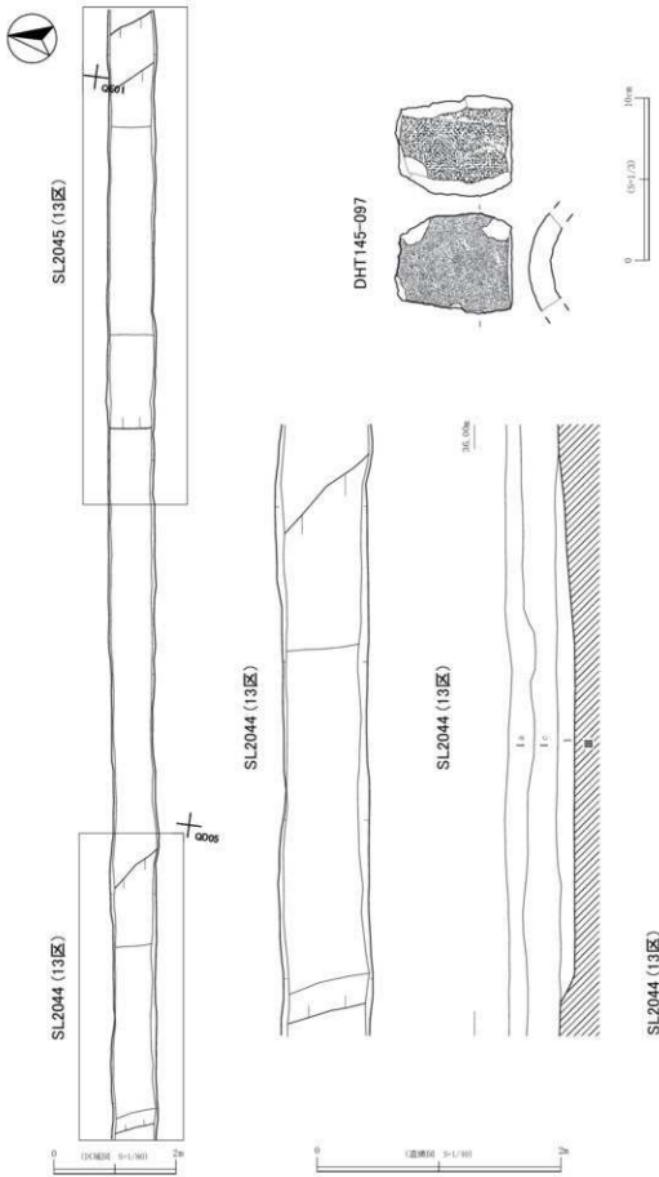


第44図 13区の遺構（2） SKP2051, 2052, SKP2053～2059

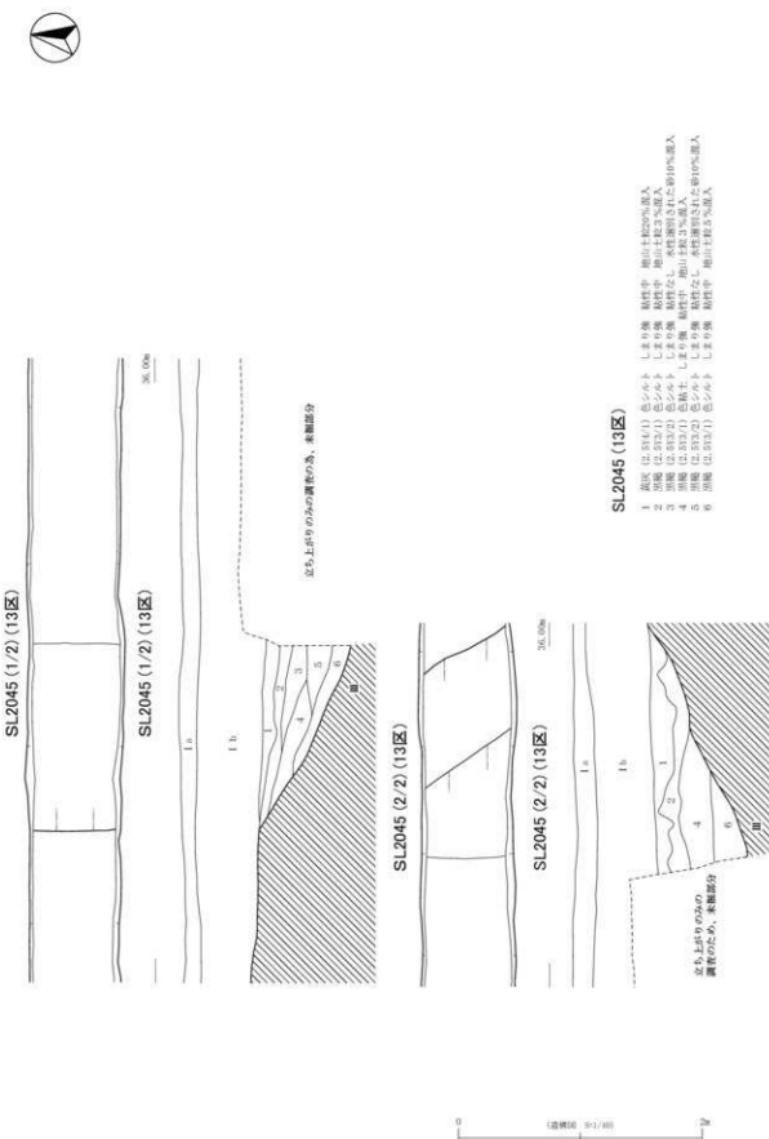
第2節 第145次調査の検出遺構と遺物



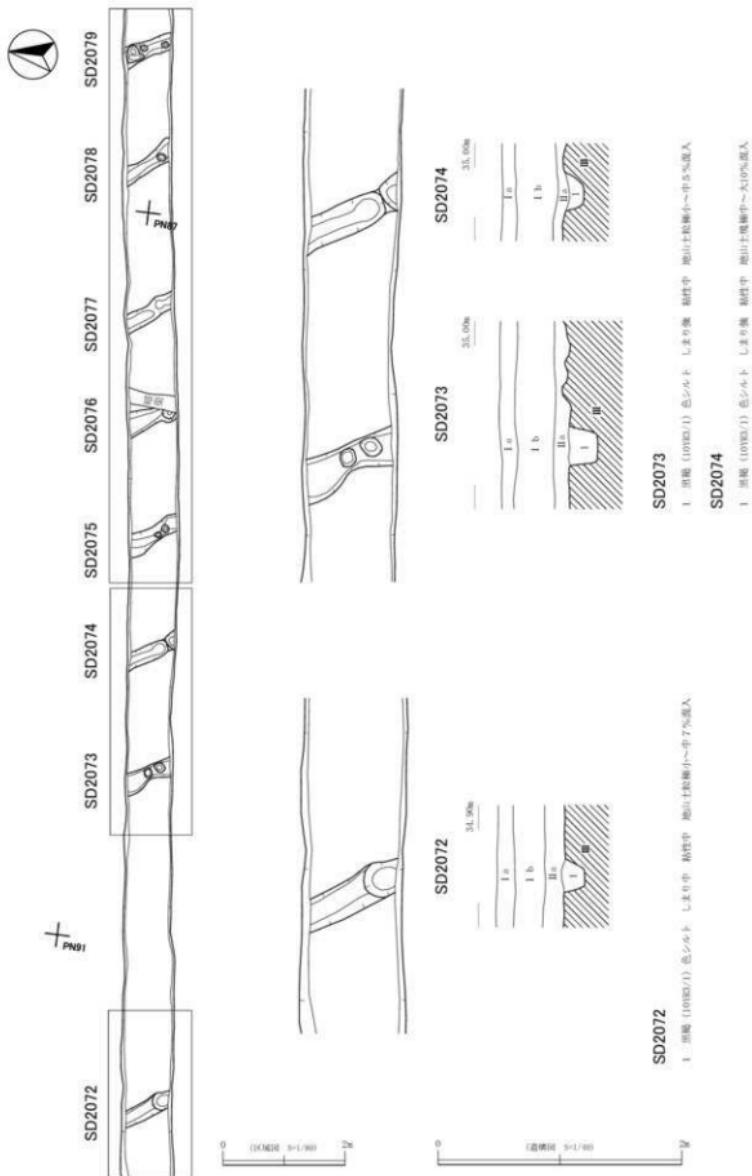
第45図 13区の遺構（3） SK2060, 2063, 2066, SKP2061, 2062, 2064, 2065, 2067



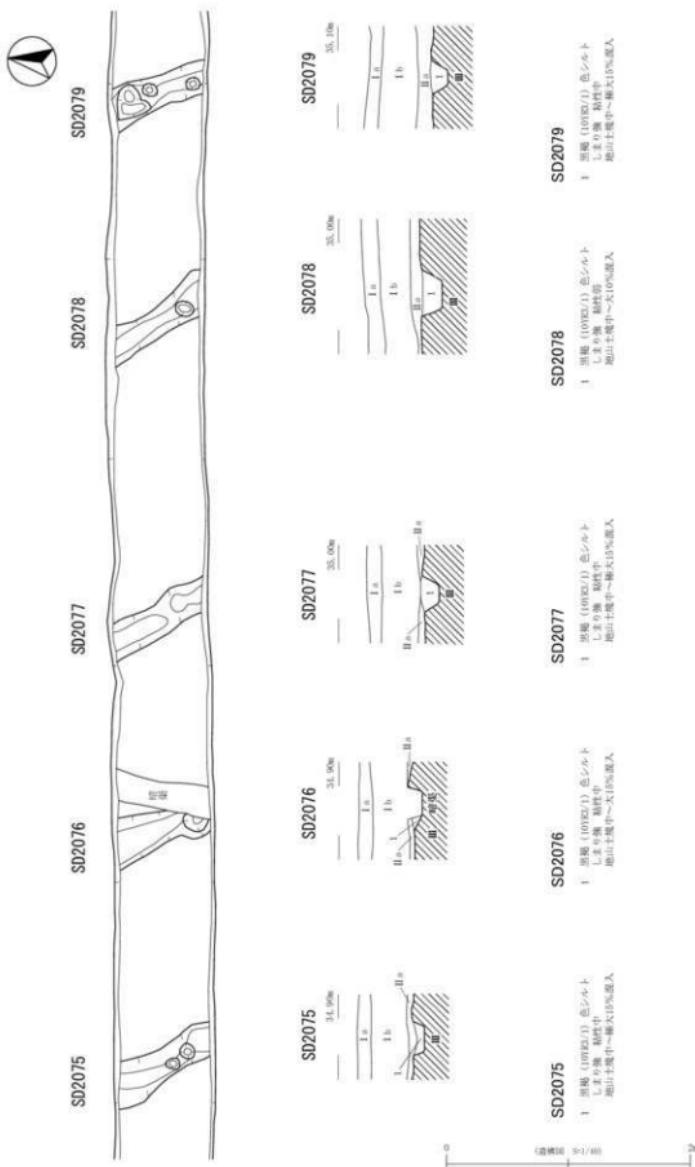
第46図 13区の遺構 (4) SL2044, 2045



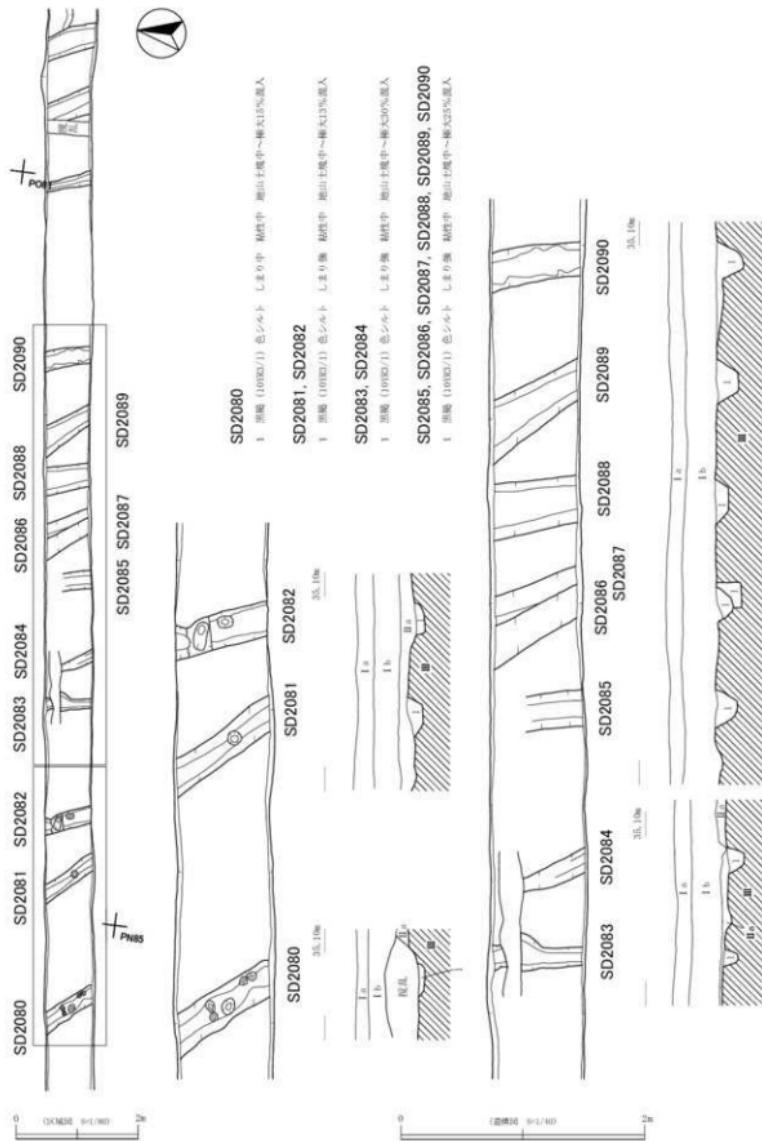
第47図 13区の遺構 (5) SL2045



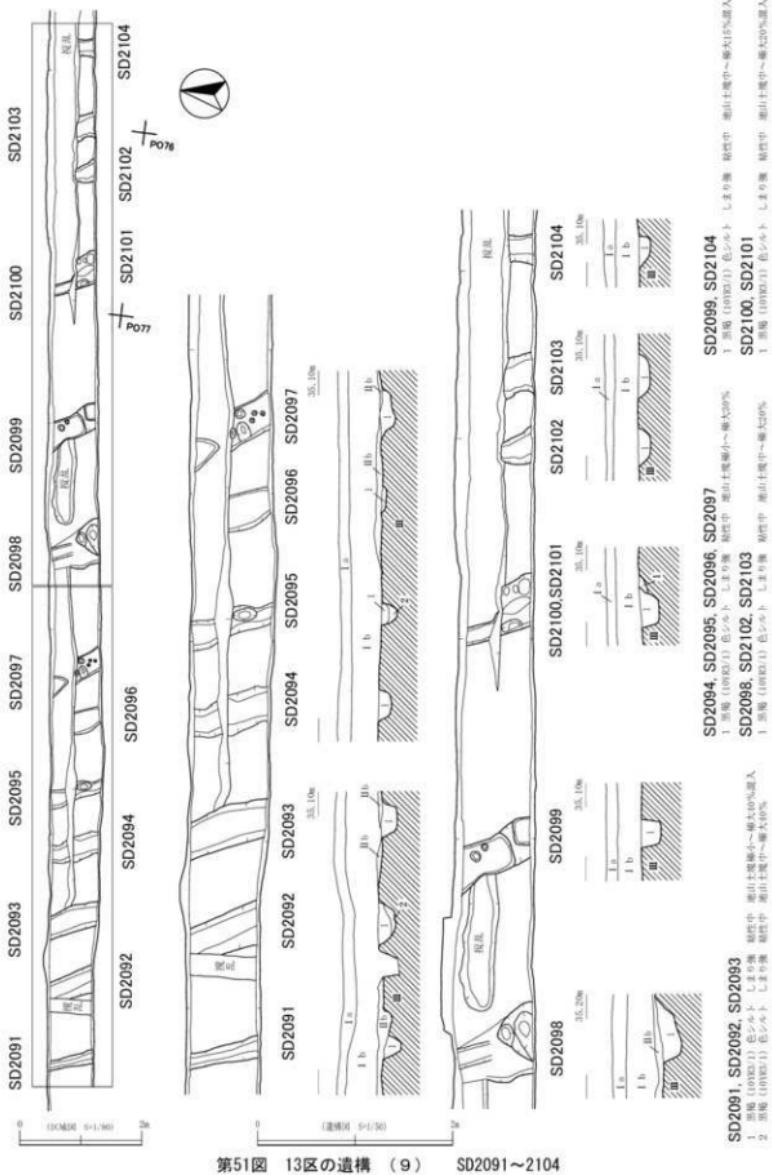
第48図 13区の遺構（6） SD2072～2079



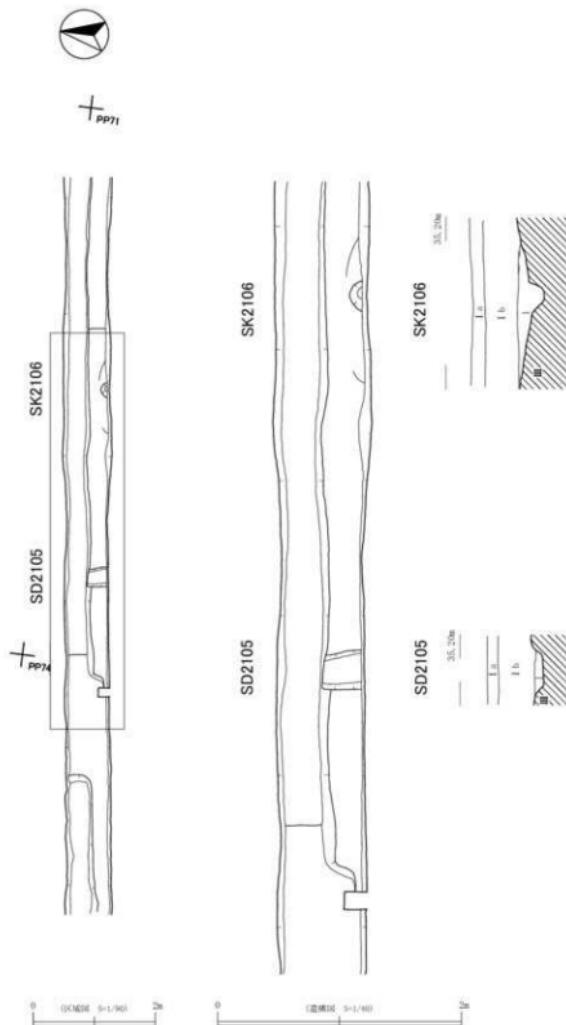
第49図 13区の遺構（7） SD2075～2079



第50図 13区の造構 (8) SD2080~2090

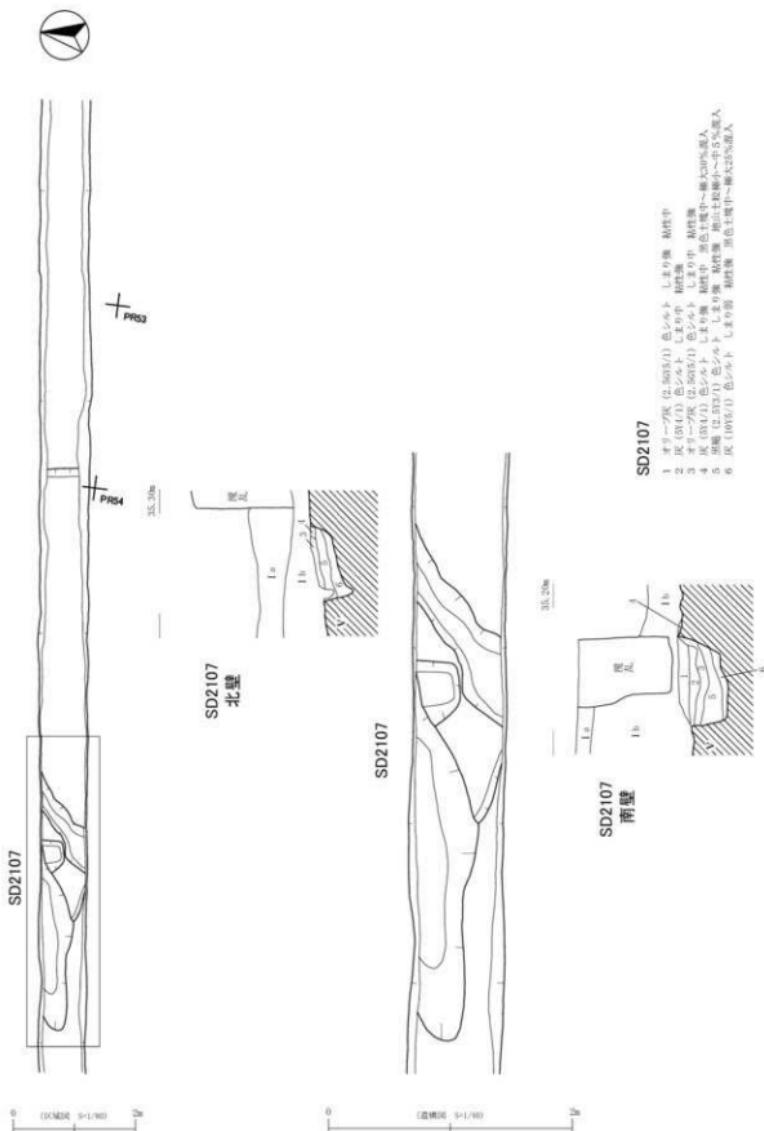


第51図 13区の遺構 (9) SD2091～2104

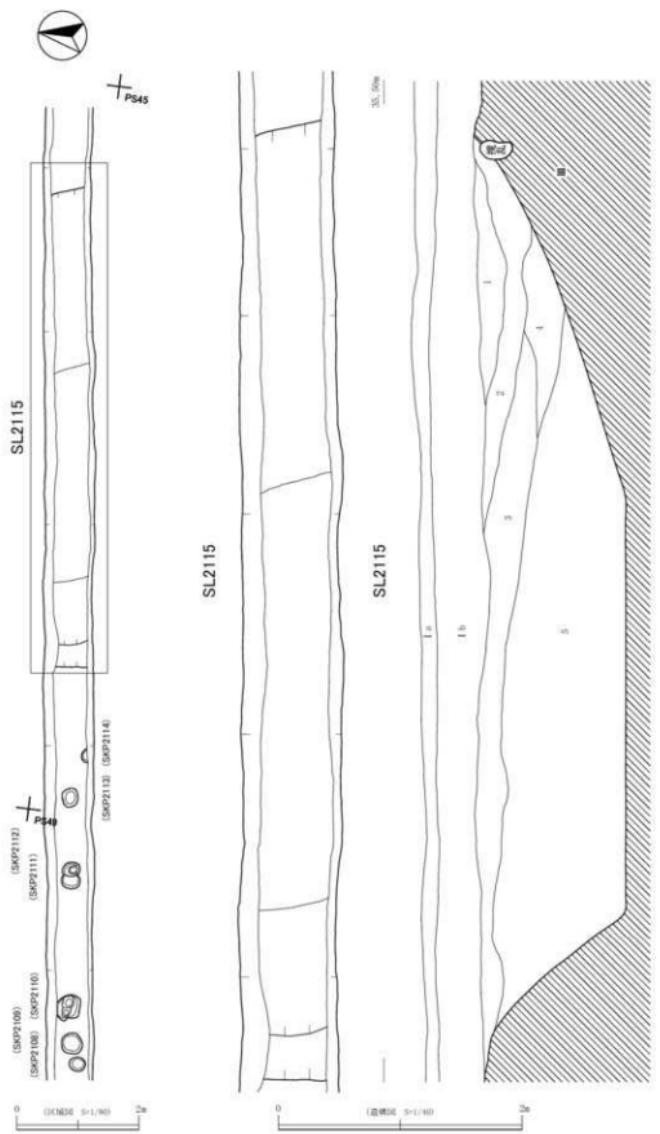


第52図 13区の遺構 (10) SD2105, SK2106

SD2105
1. 並層 (10m/1) 色シルト しまり地 ルミナイト 細粒砂 岩山土壌中～地表20%近く
SK2106
1. 並層 (10m/1) 色シルト しまり地 ルミナイト 細粒砂 岩山土壌中～地表20%近く

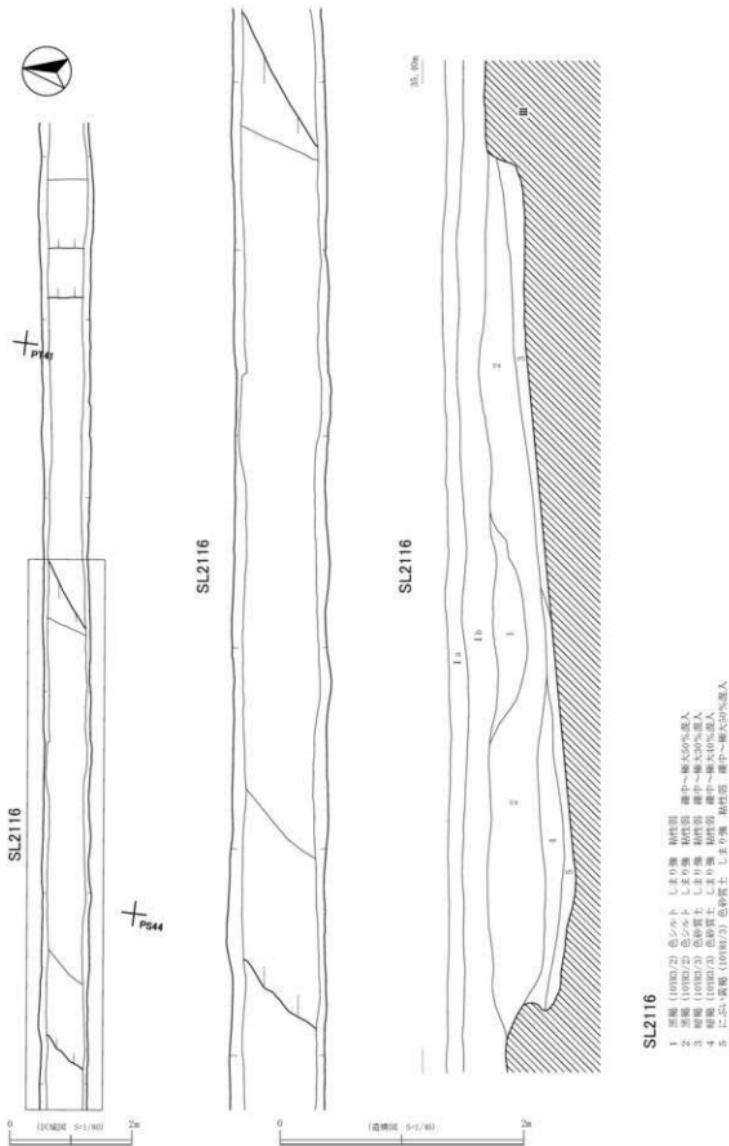


第53図 13区の遺構 (11) SD2107

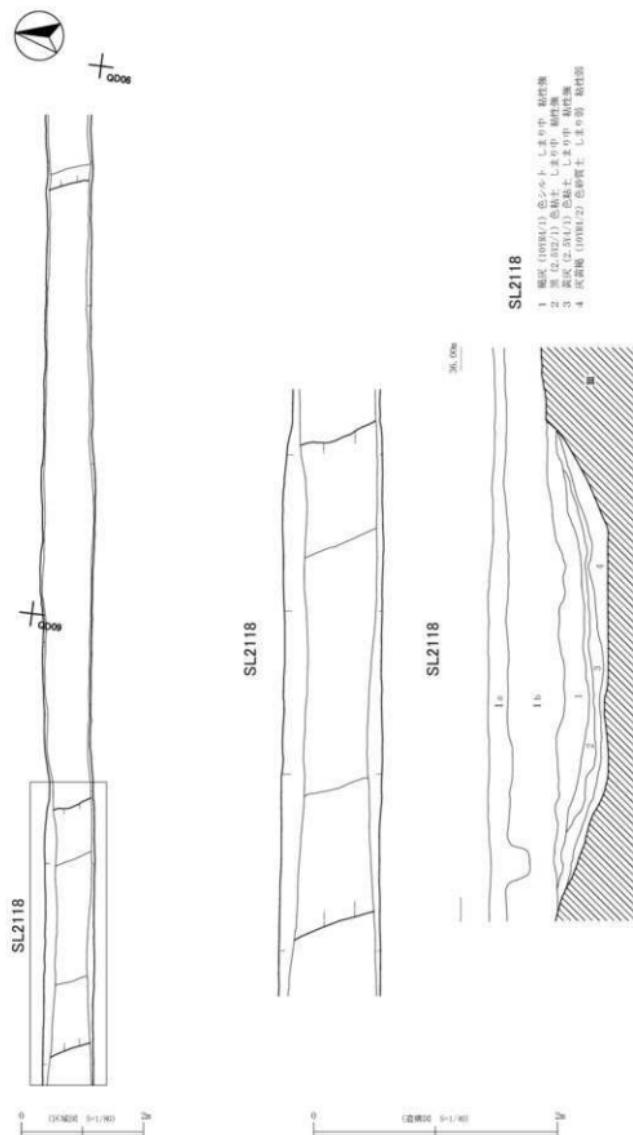


第54図 13区の造構 (12) SL2115

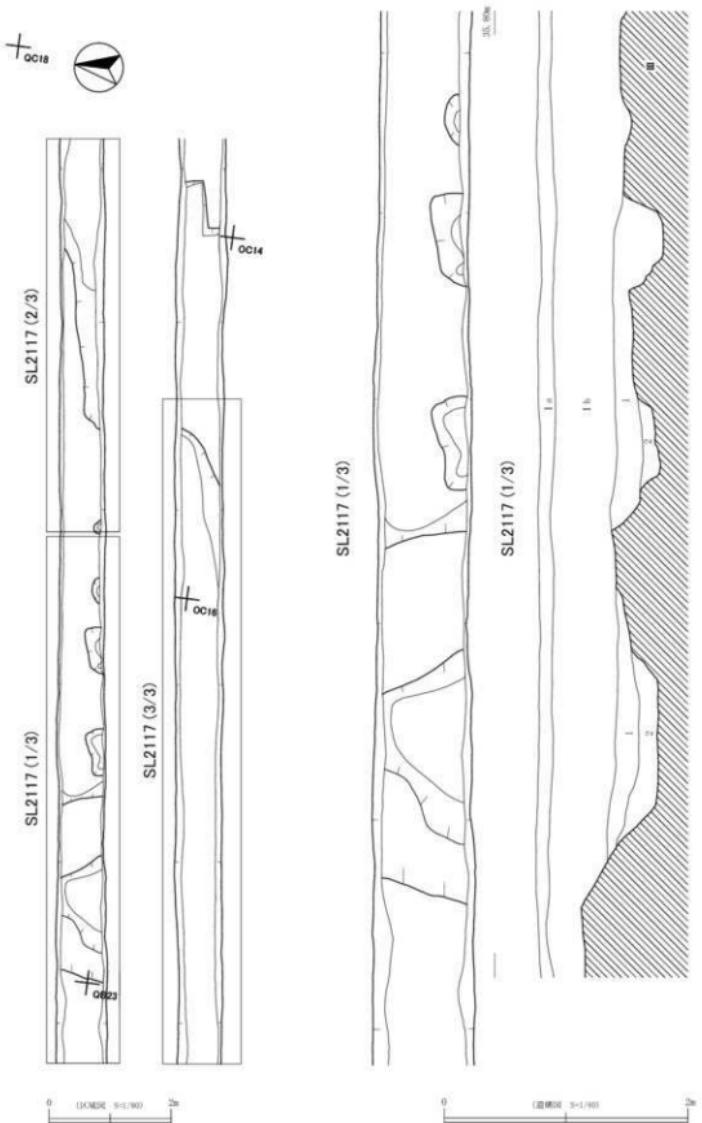
1. 鋸面 (1000/3) シルト、しまり層、粘土岩、地山土塊と一帯で70%程入。
2. 実面 (1000/2) 砂質質土、しまり層、粘土岩、砂質土と成る層。
3. 鋸面 (1000/2) 砂質質土、しまり層、粘土岩、一層大層、水孔有層。
4. 実面 (1000/2) 砂質質土、しまり層、粘土岩、粗砂層と細砂層。
5. 二段分水塊 (1000/4) 砂質質土、しまり層、粘土岩、細砂層、中～細砂層。



第55図 13区の遺構 (13) SL2116

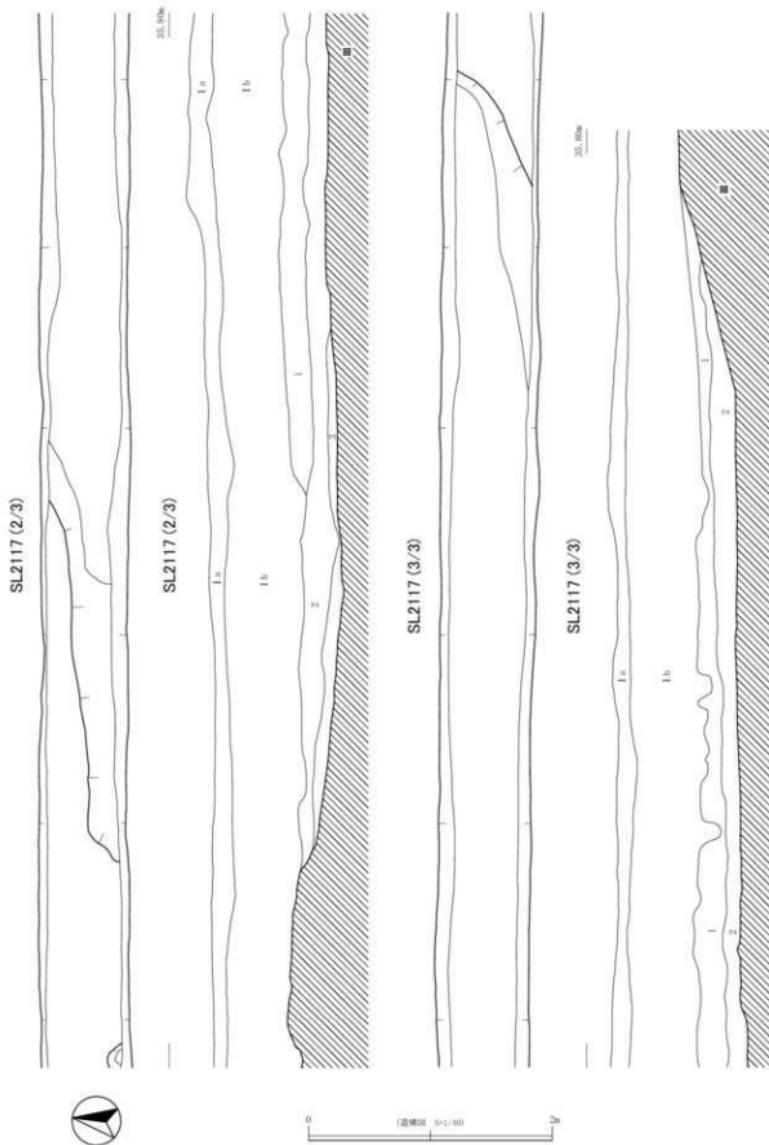


第56図 13区の造構 (14) SL2118

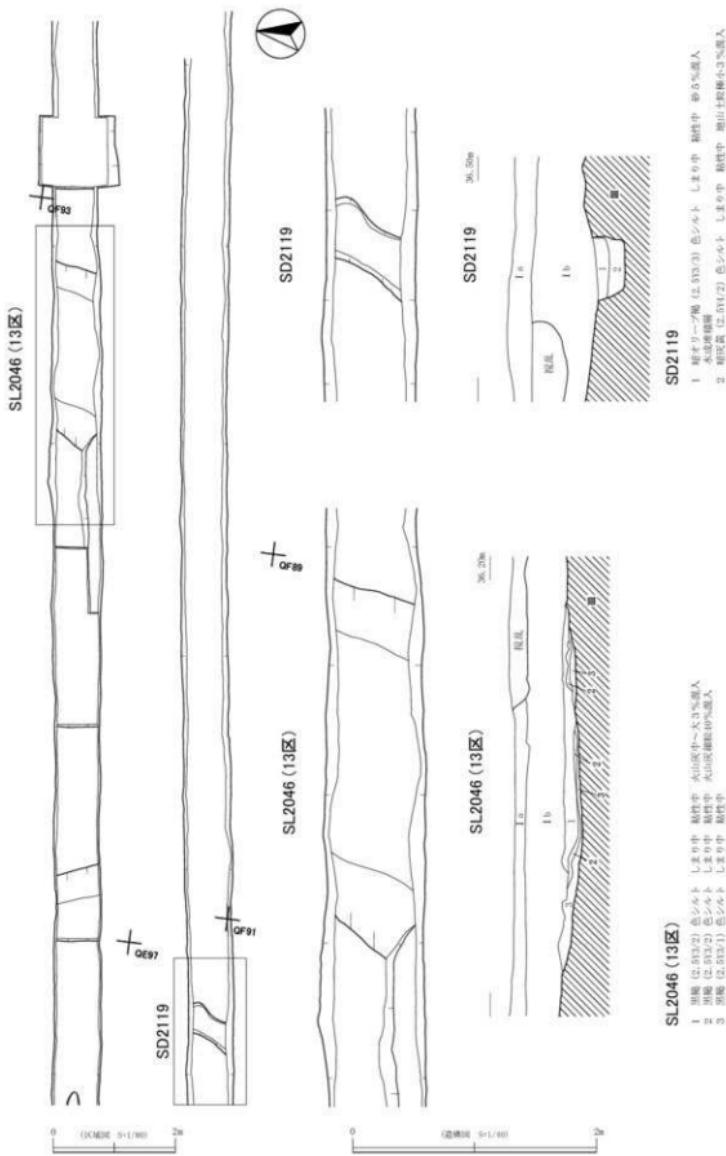


第57図 13区の遺構 (15) SL2117

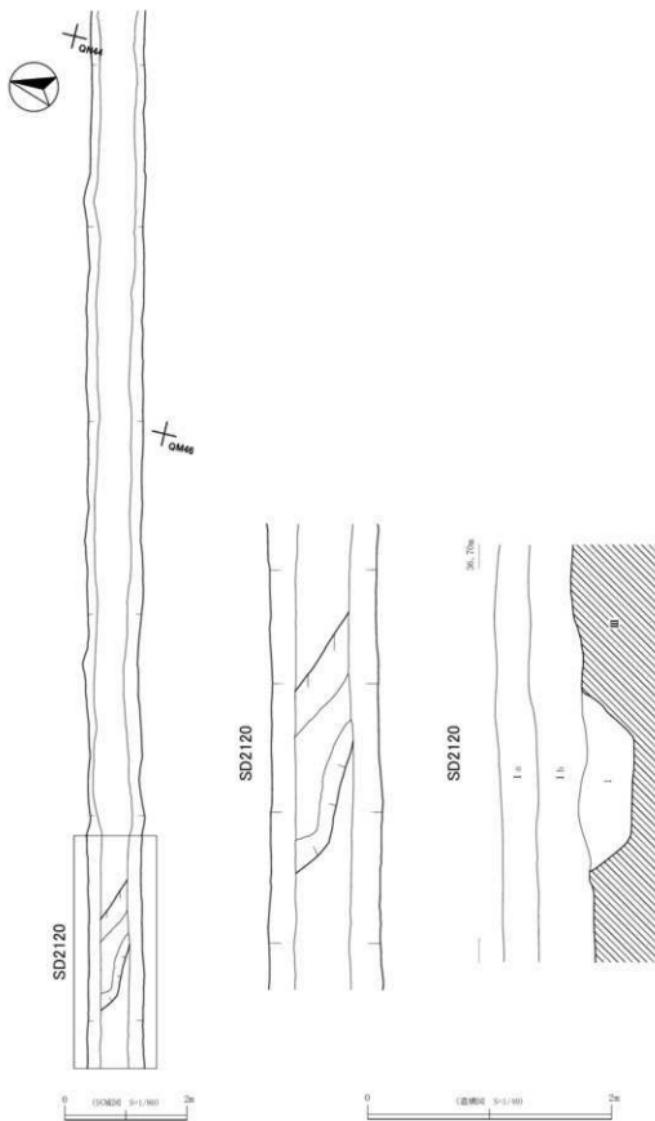
- SL2117
1. 焼成 (1910C1) 色シルト
上り引切
柱柱羽
 2. 青灰 (2.514/1) 色シルト
柱柱中
柱子下窓小一縫大 5% 周辺鉢小一中 1% 底入
柱子下窓小一縫大 5% 周辺鉢小一中 1% 底入
 3. 青灰 (2.519A/1) 色シルト
上り引切



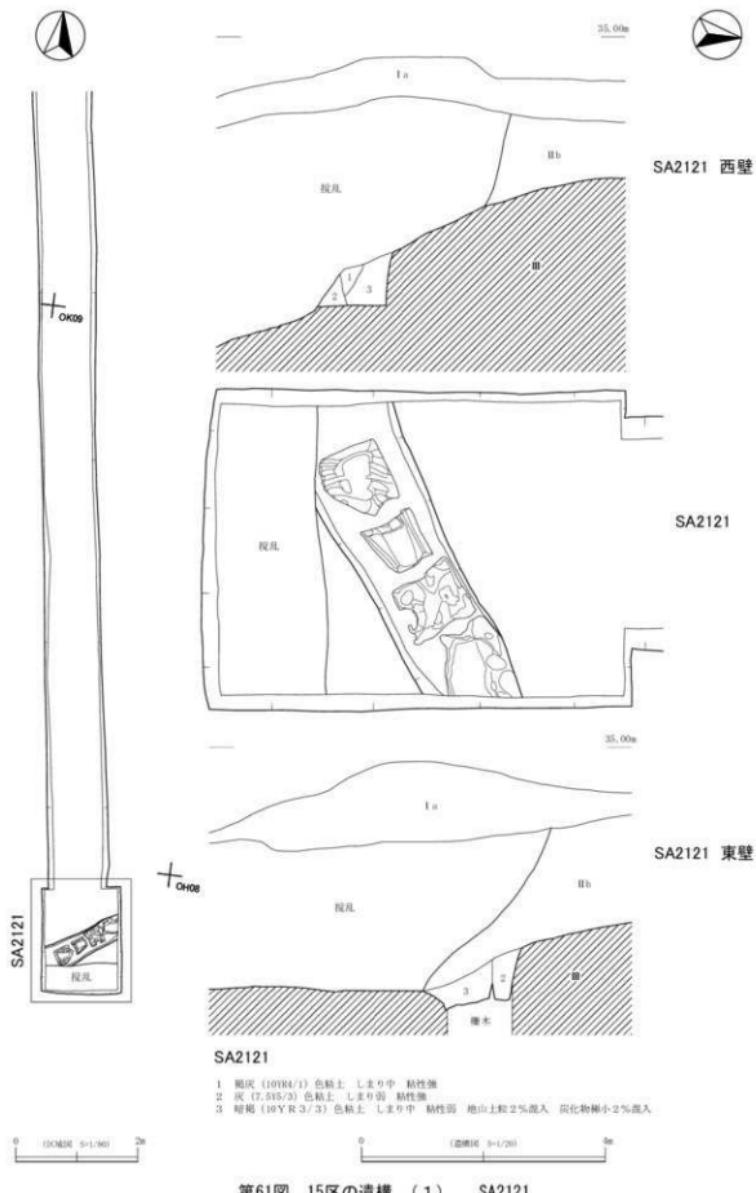
第58図 13区の造構 (16) SL2117



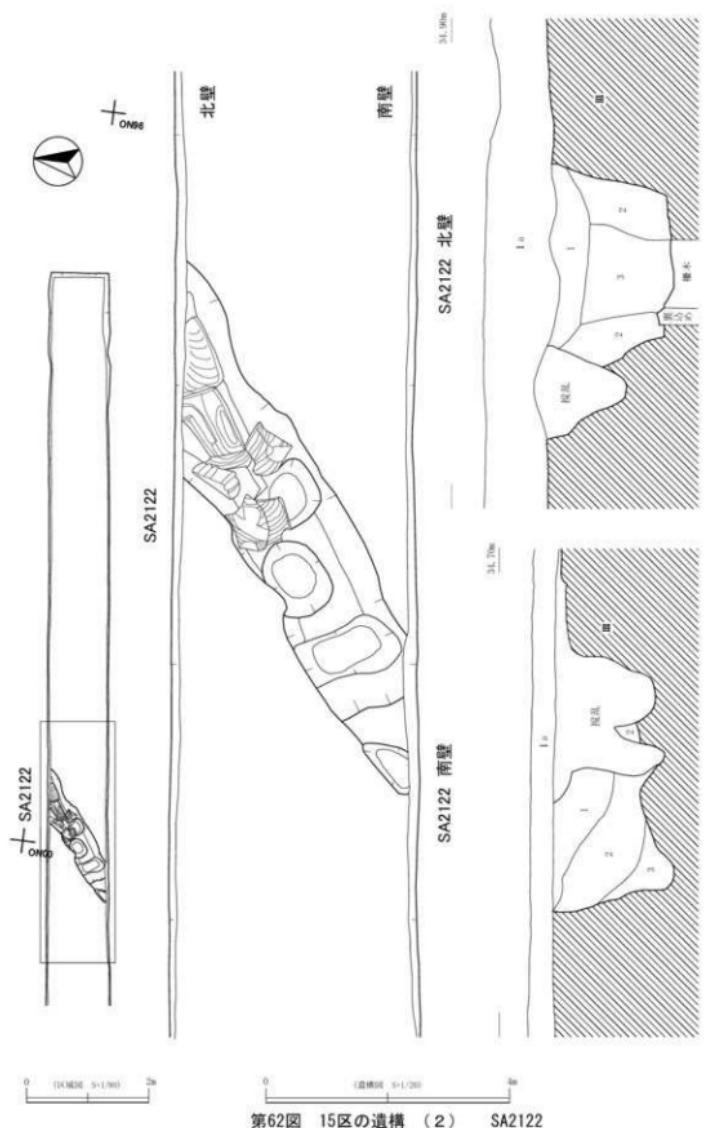
第59図 13区の遺構 (17) SD2119, SL2046



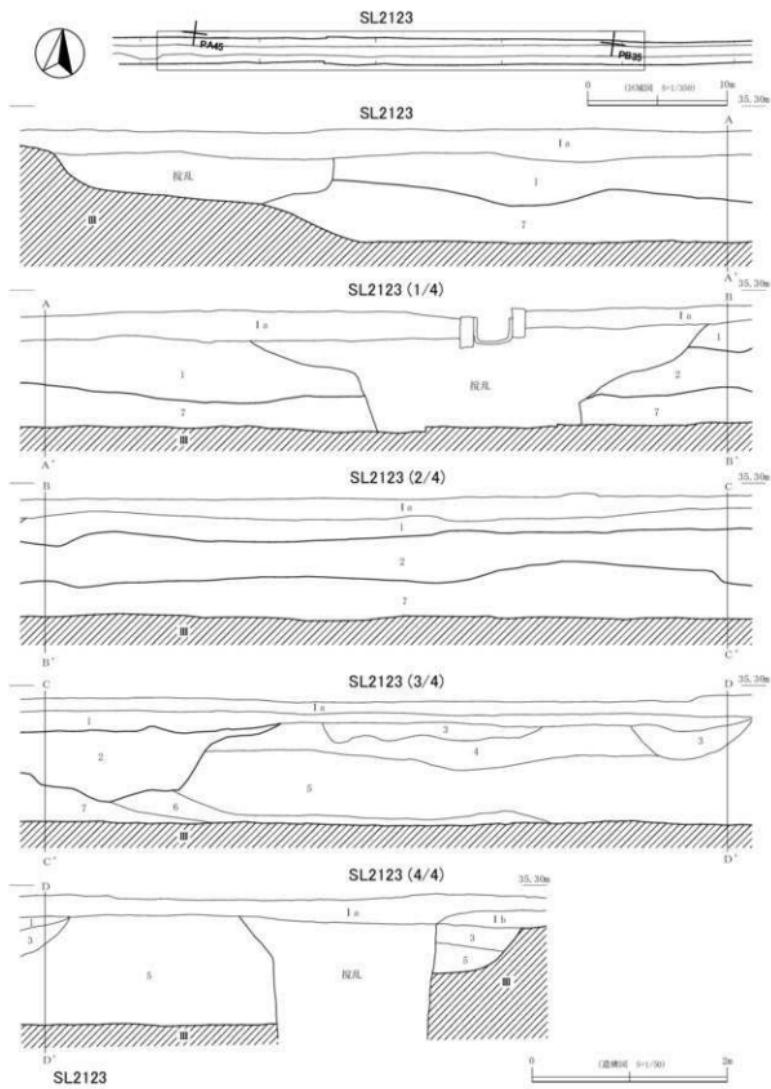
第60図 13区の造構 (18) SD2120



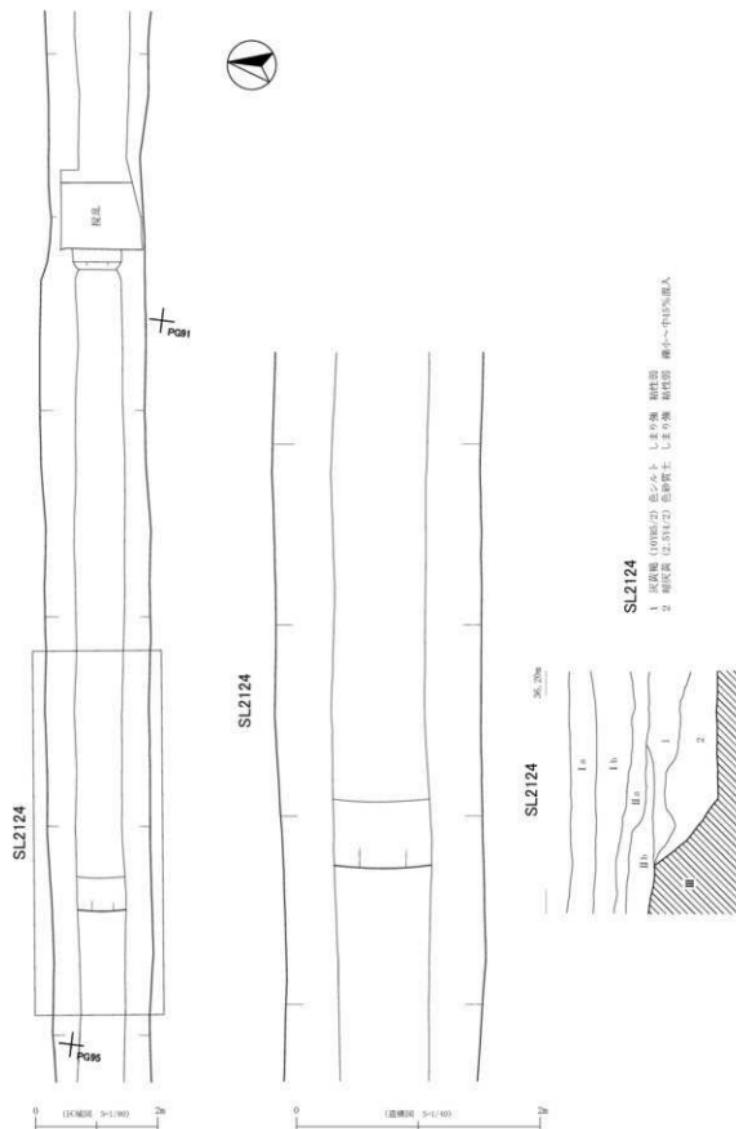
第61図 15区の遺構 (1) SA2121



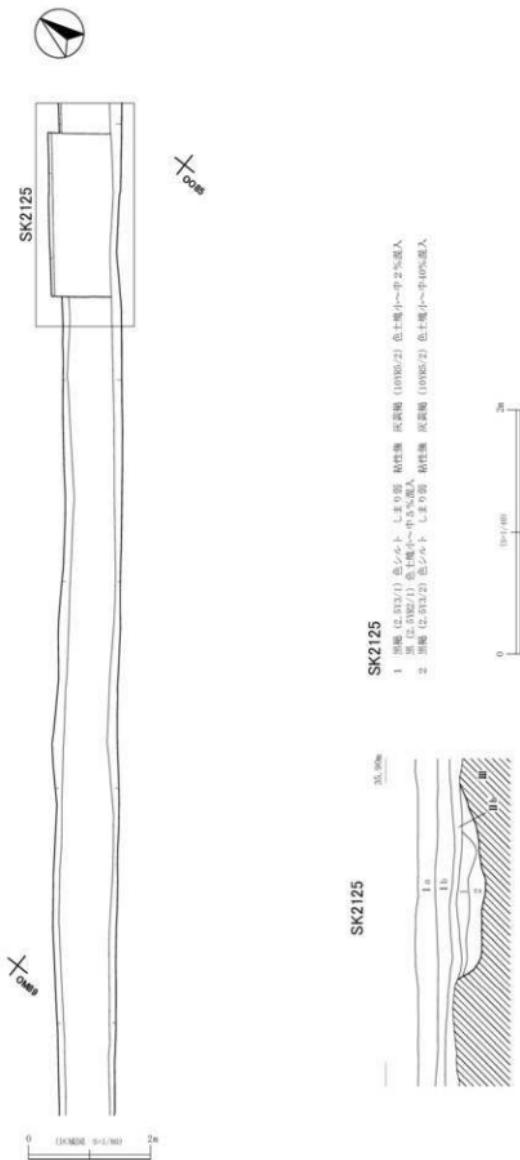
第62図 15区の造構 (2) SA2122



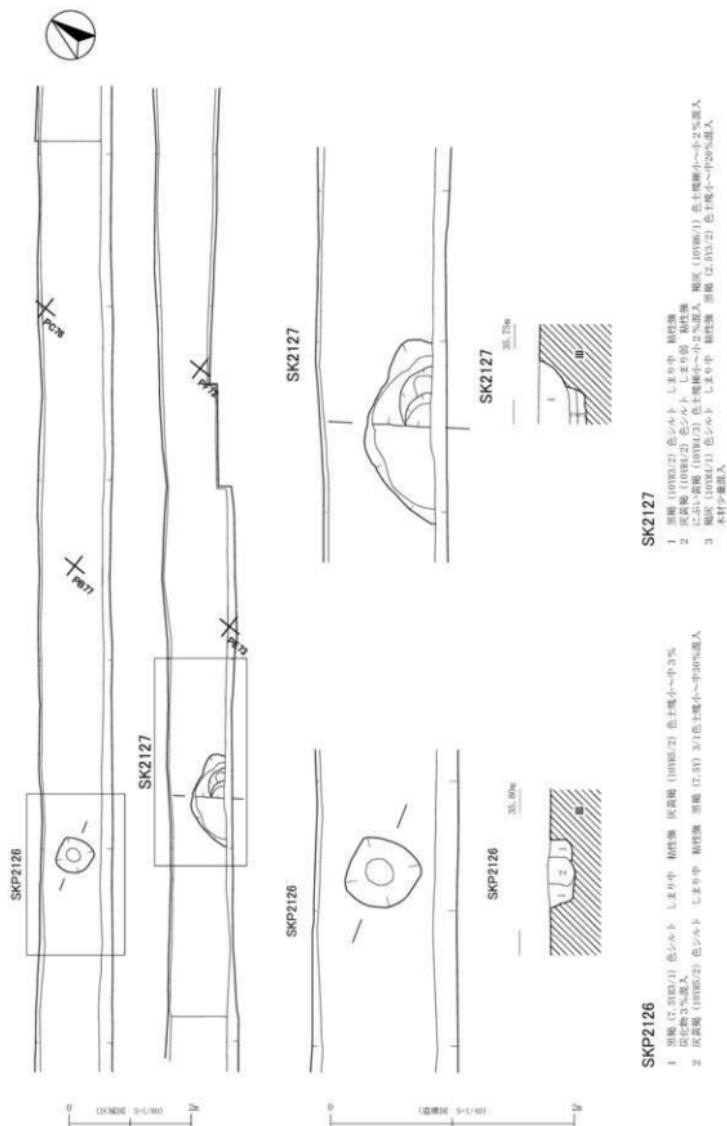
第63図 15区の遺構 (3) SL2123



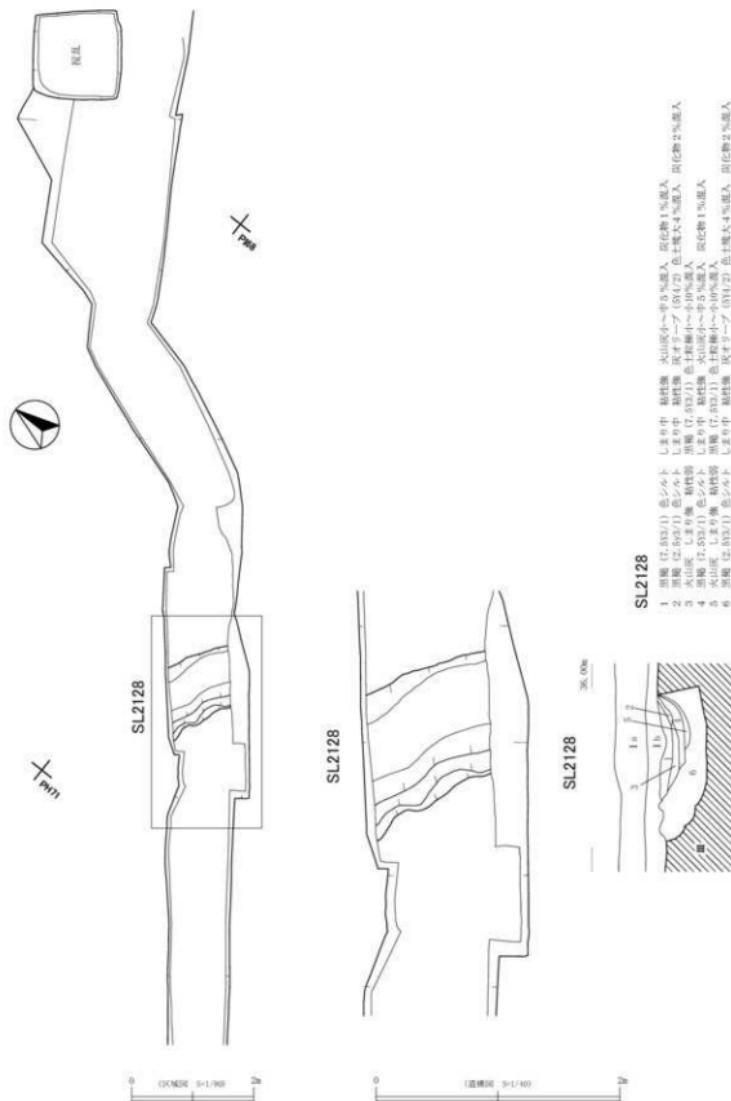
第64図 15区の造構 (4) SL2124



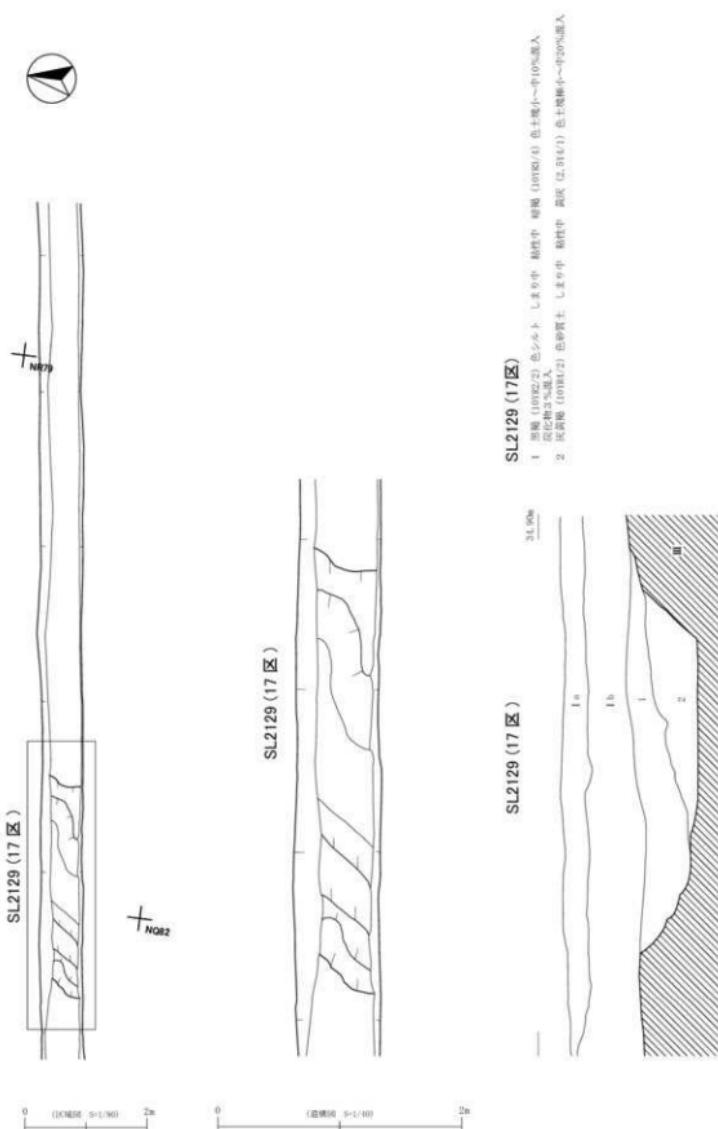
第65図 16区の遺構 (1) SK2125



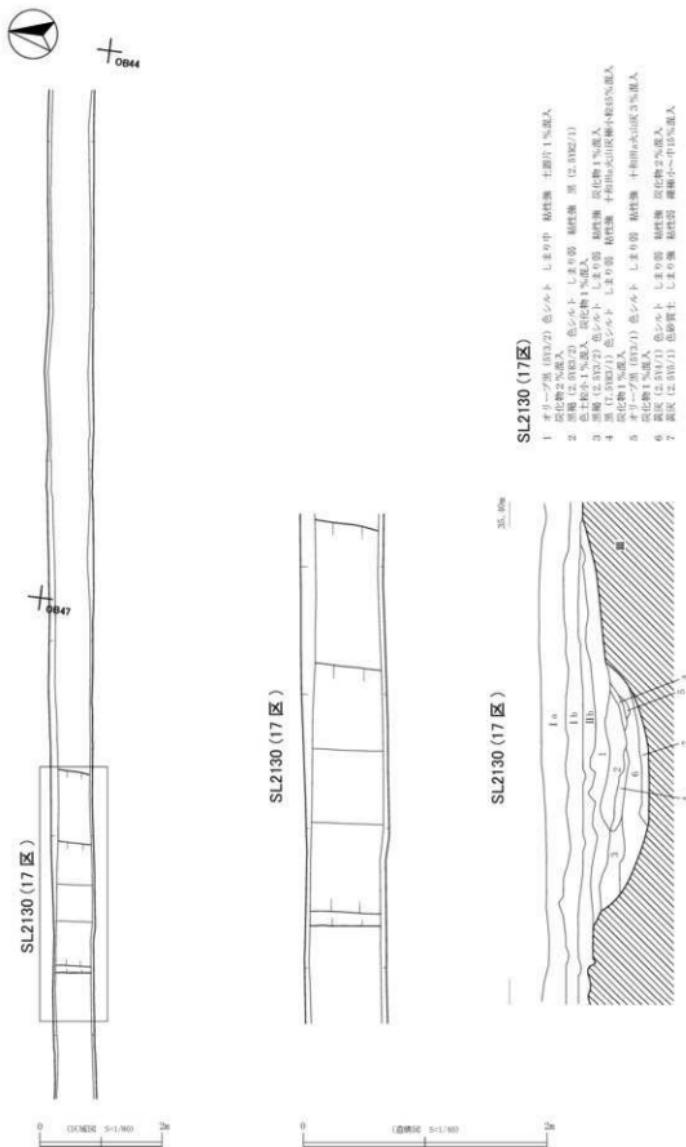
第66図 16区の構造 (2) SKP2127, SKP2126



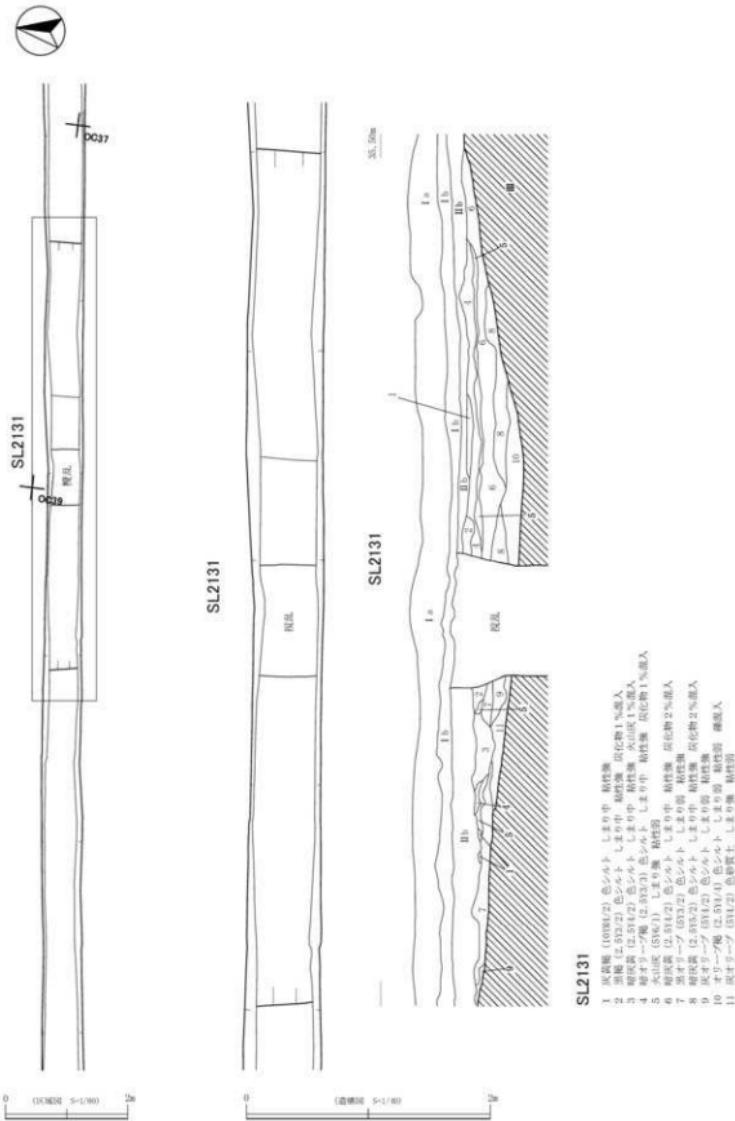
第67図 16区の遺構 (3) SL2128



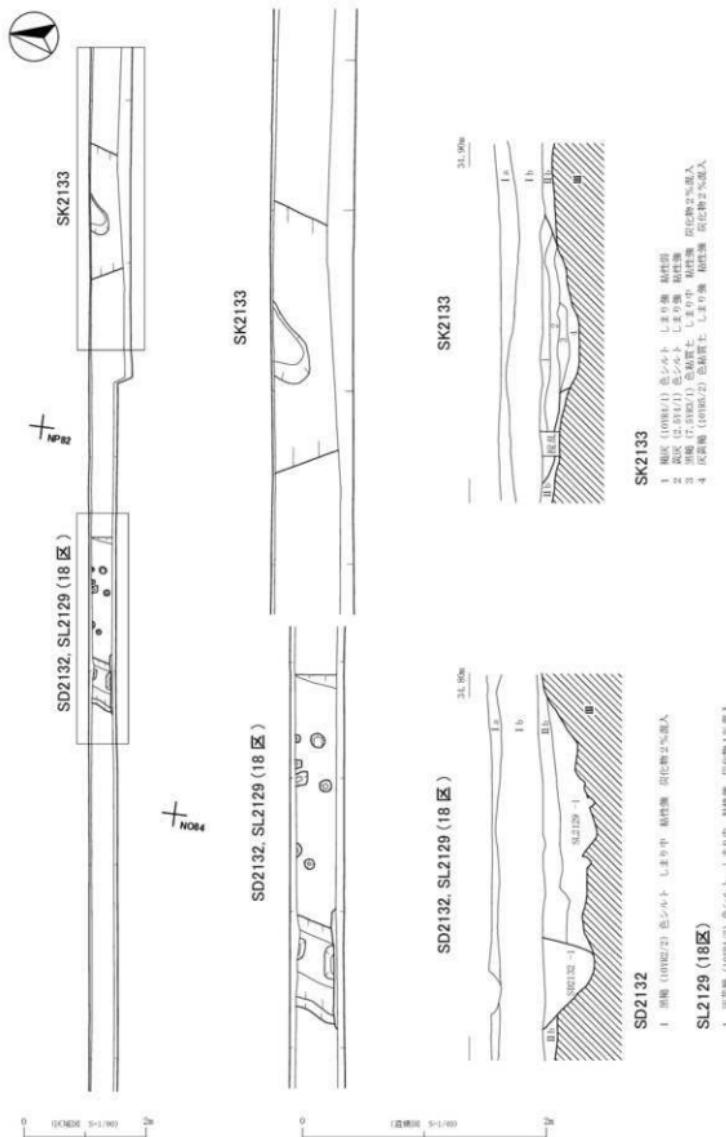
第68図 17区の造構 (1) SL2129



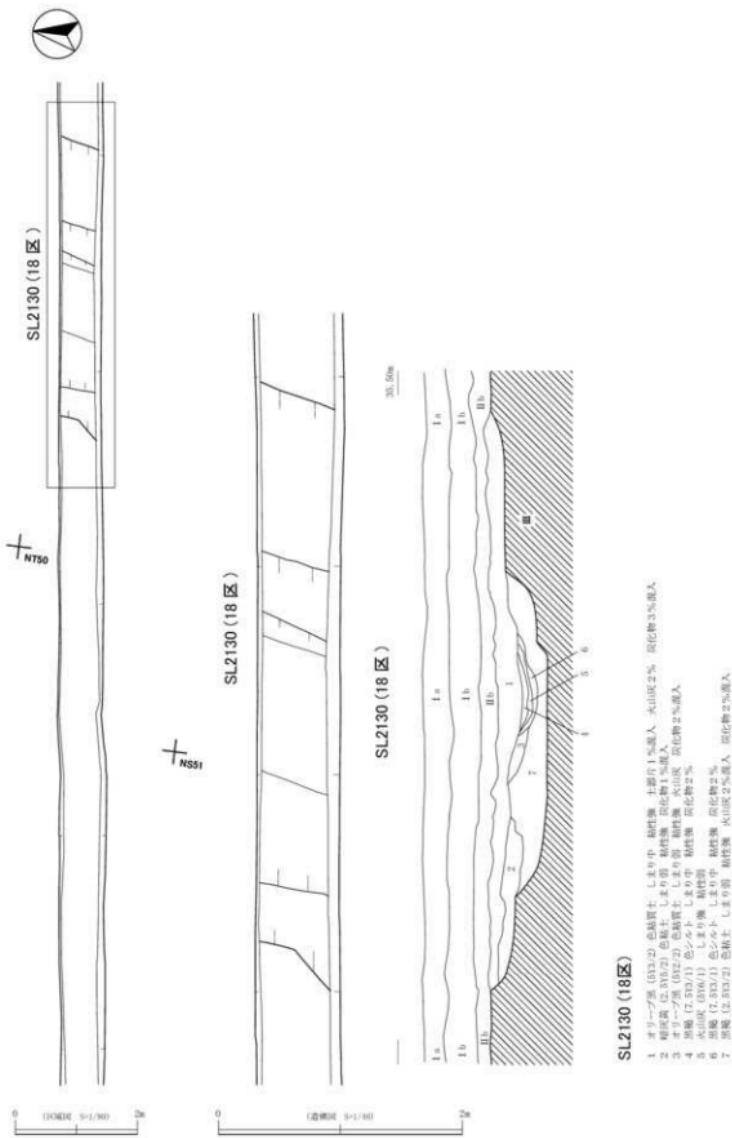
第69図 17区の遺構 (2) SL2130



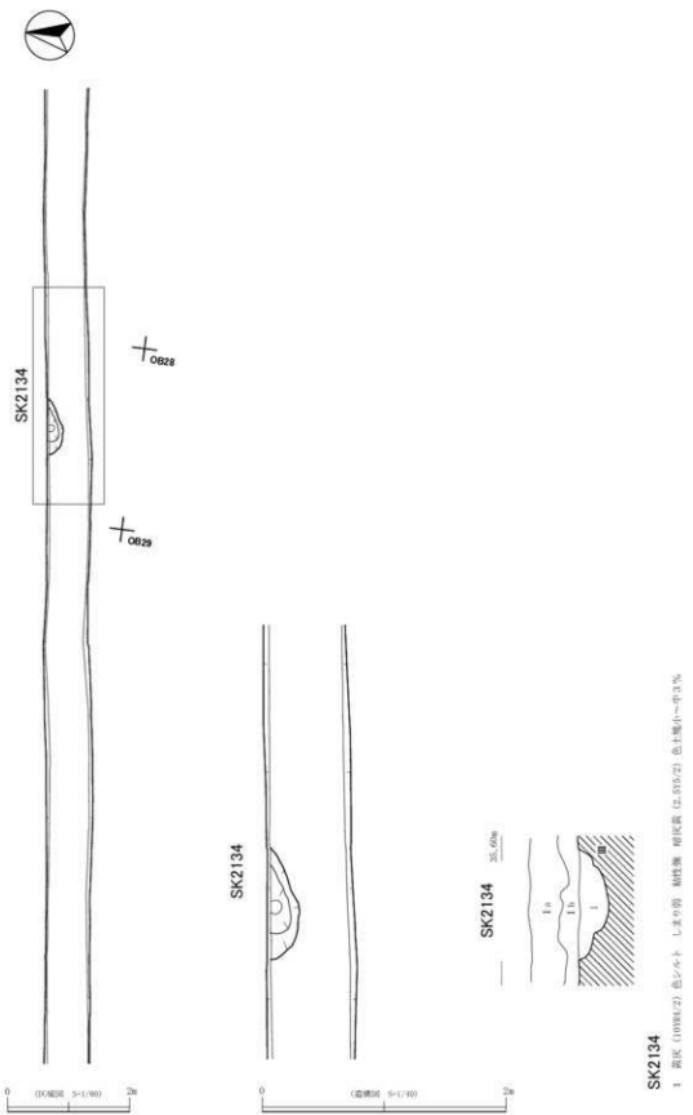
第70図 17区の造構（3） SL2131



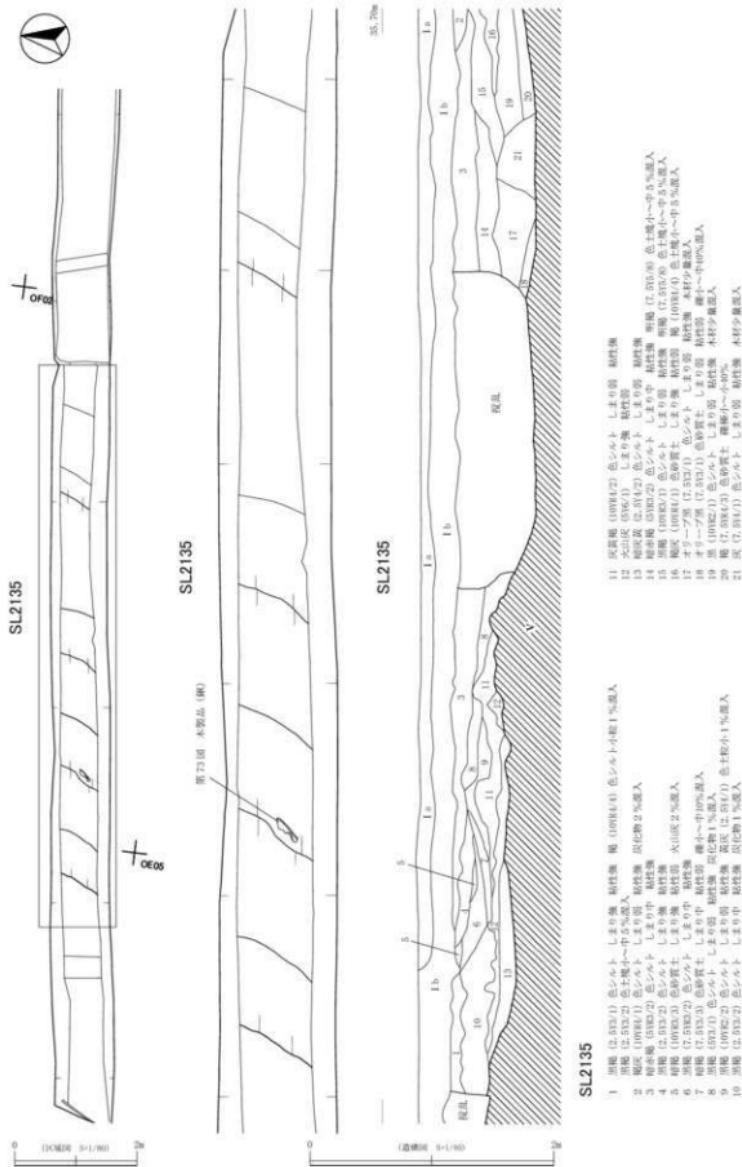
第71図 18区の遺構（1） SD2132, SK2133, SL2129



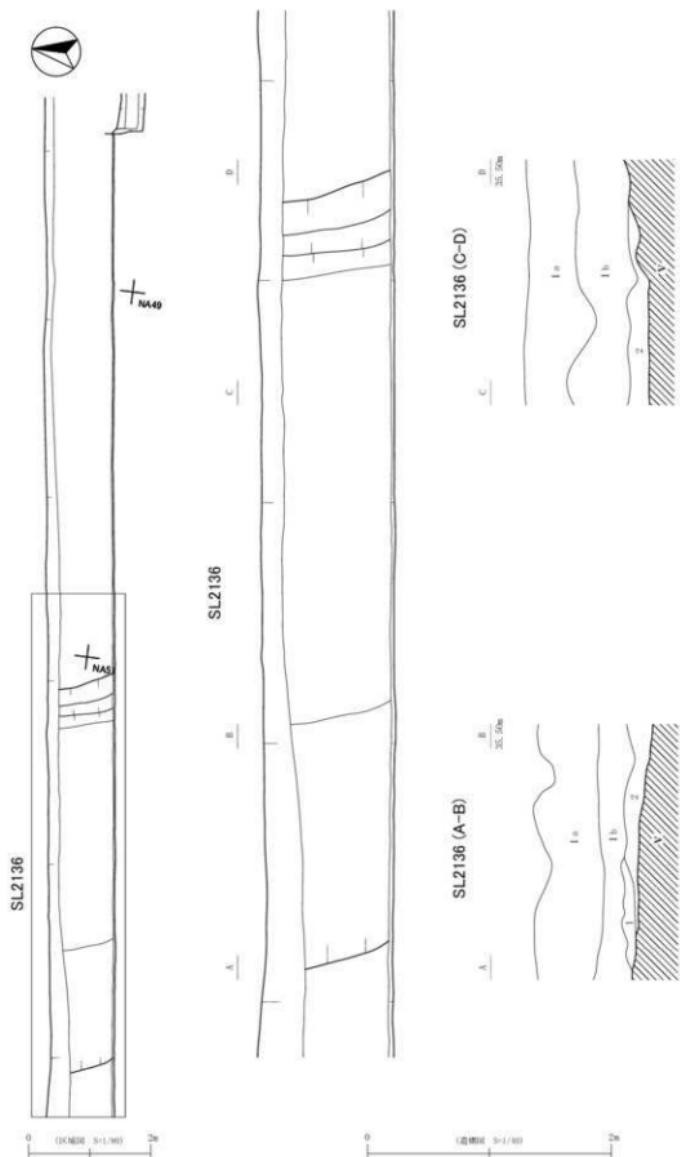
第72図 18区の造構 (2) SL2130



第73図 18区の遺構 (3) SK2134

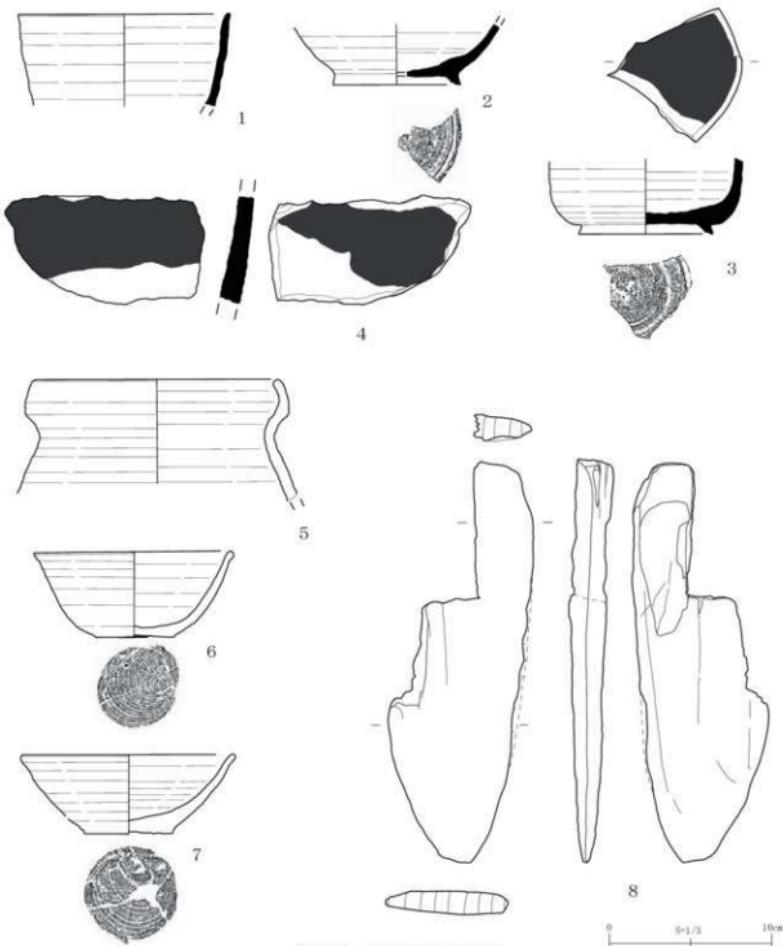


第74図 18区の造構 (4) SL2135



第75図 20区の遺構 SL2136

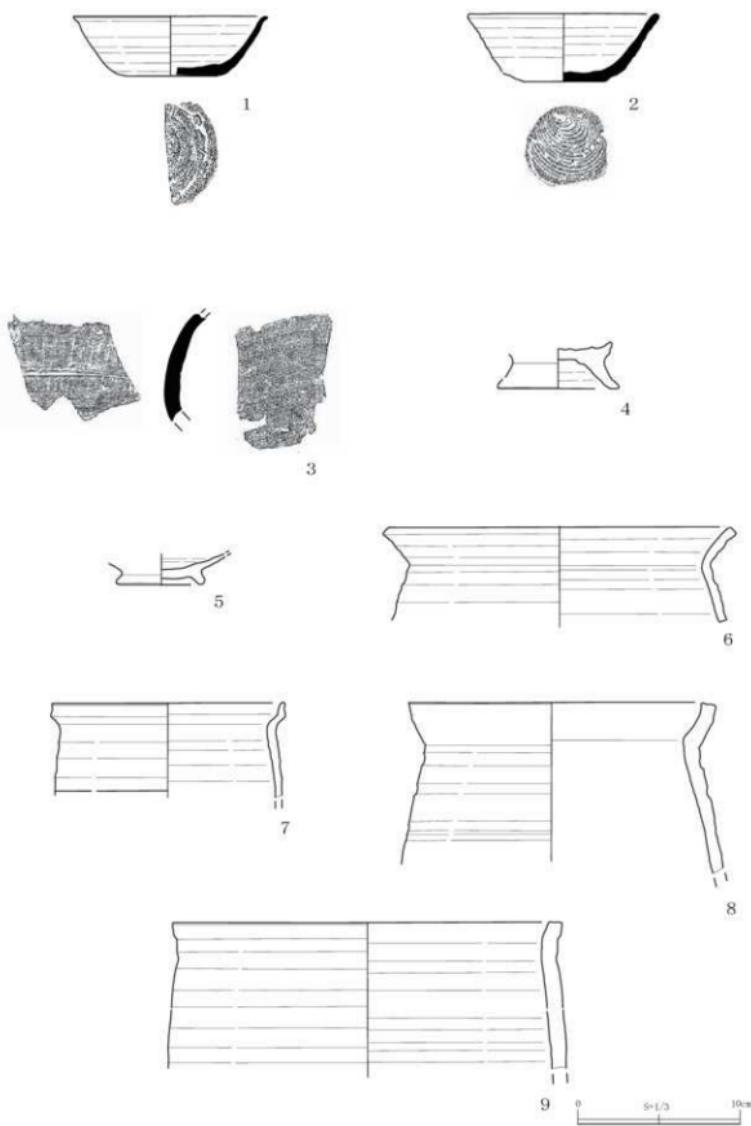
SL2136
 1. 開口 (100cm) 2. 色粉質土・丸山灰・粘性土
 2. 水 (100cm) 1. 水 (100cm) 2. 灰 (100cm)



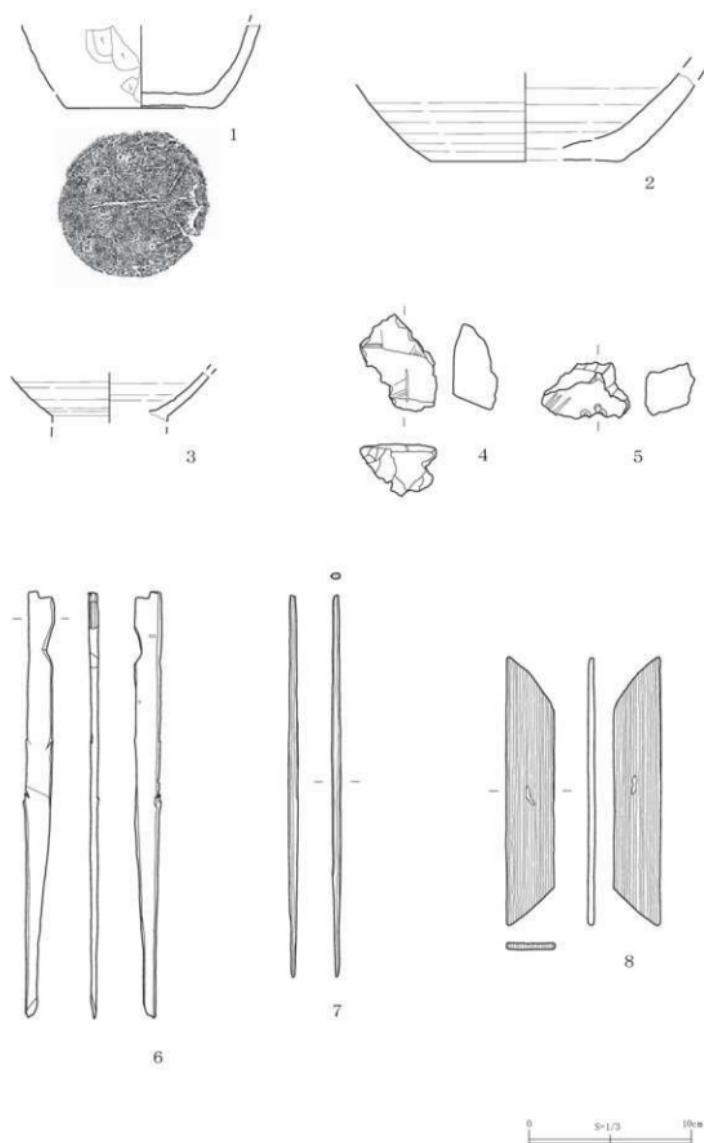
第76図 遺構内出土遺物

第3表 遺構内出土遺物観察表

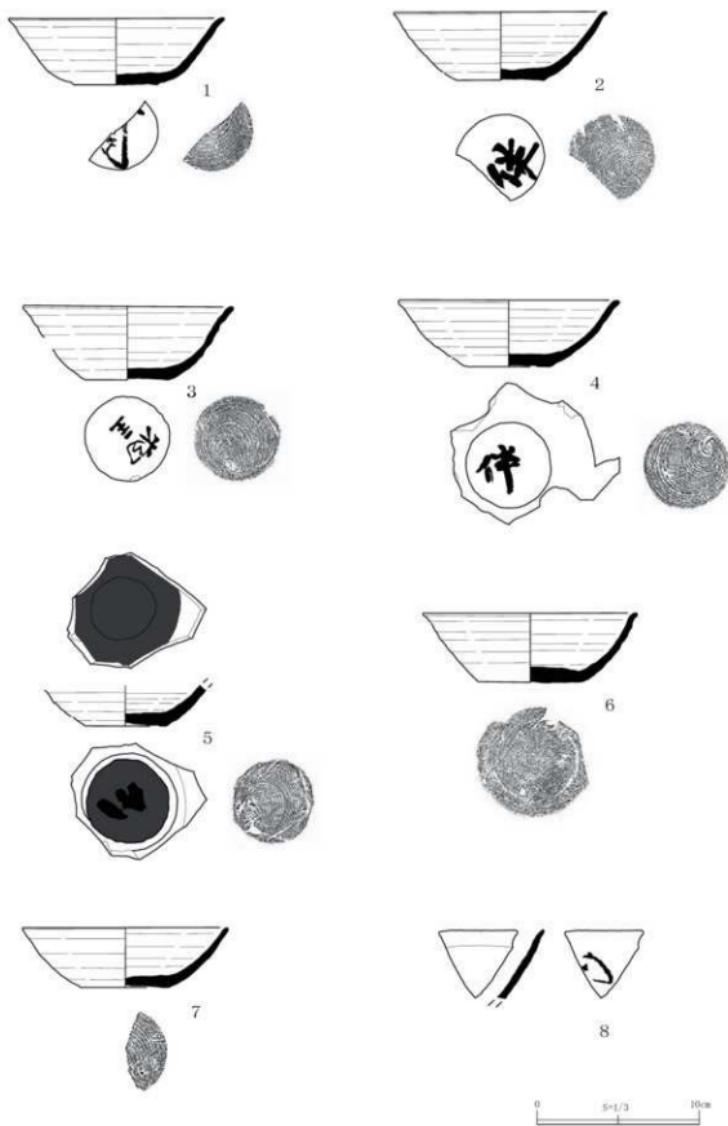
	出土位置	遺構	補位等	種別	器種	外面調査	内部調査	近面調査	口径	底径	高さ	
遺構41	11K(3482)	S12129	2面	瓶底部	片	ロクロ	ロクロ	—	(3.0)	—	—	
遺構42	11K(3483)	S12129	2面	瓶底部	片	ロクロ	ロクロ	回転底切り	—	—	—	
遺構43	11K(3482)	S12117	1面	瓶底部	曲	ロクロ	ロクロ	回転～ラギリ	(3.1)	5.4	4.9	軸用窓
遺構44	11K(3348)	S12130	1面	瓶底部	裏	タタキ	タタキ	—	—	—	—	
遺構45	11K(3480)	S12117	2面	土師器	裏	—	—	—	—	—	—	
遺構46	11K	SK2100	1面	土師器	片	ロクロ	ロクロ	回転底切り	12.2	4.8	5.3	
遺構47	11K(3481)	S12117	2面	土師器	片	ロクロ	ロクロ	回転底切り(左)	(3.1)	5.4	4.9	
遺構48	11K(3484)	S12135	1面	木製品	縫	—	—	—	24.7	48.6	厚2.2	



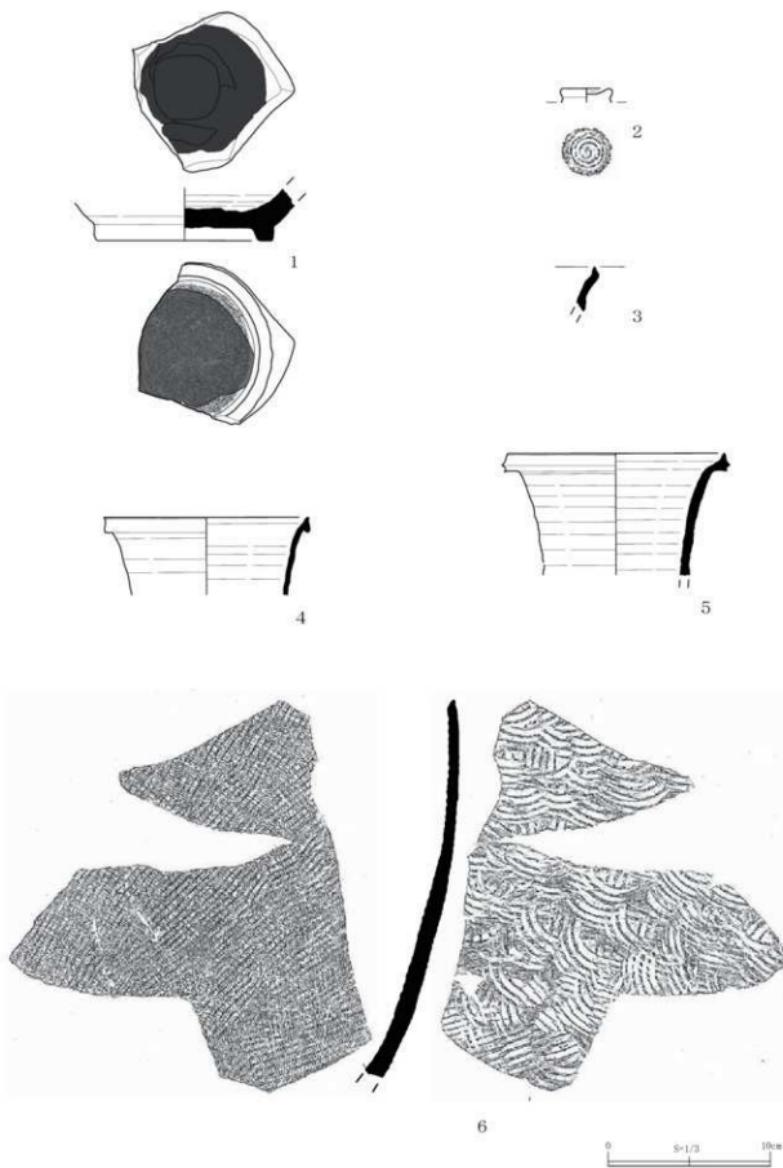
第77図 S L 2040出土遺物（1）



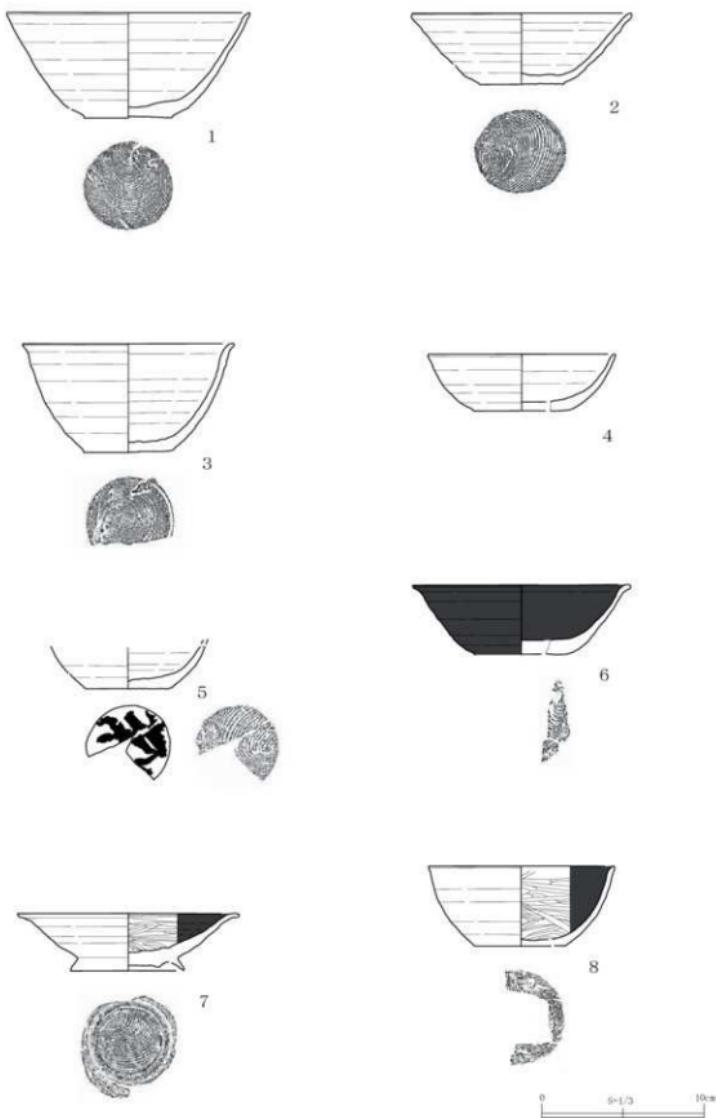
第78図 S L 2040出土遺物 (2)



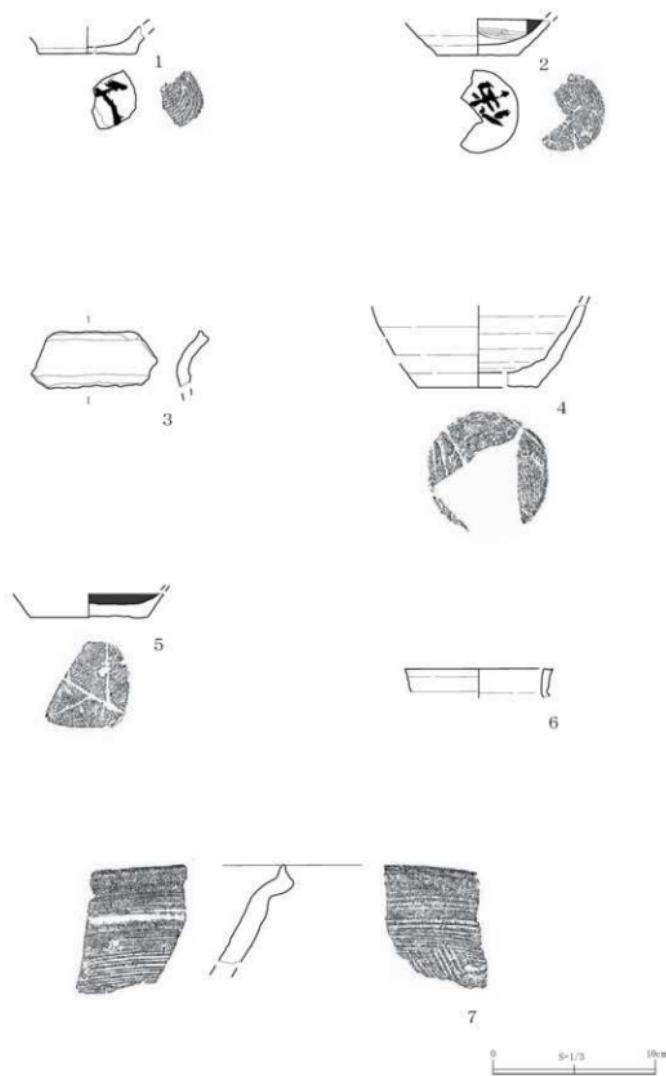
第79図 S L2136出土遺物（1）



第80図 S.L.2136出土遺物（2）



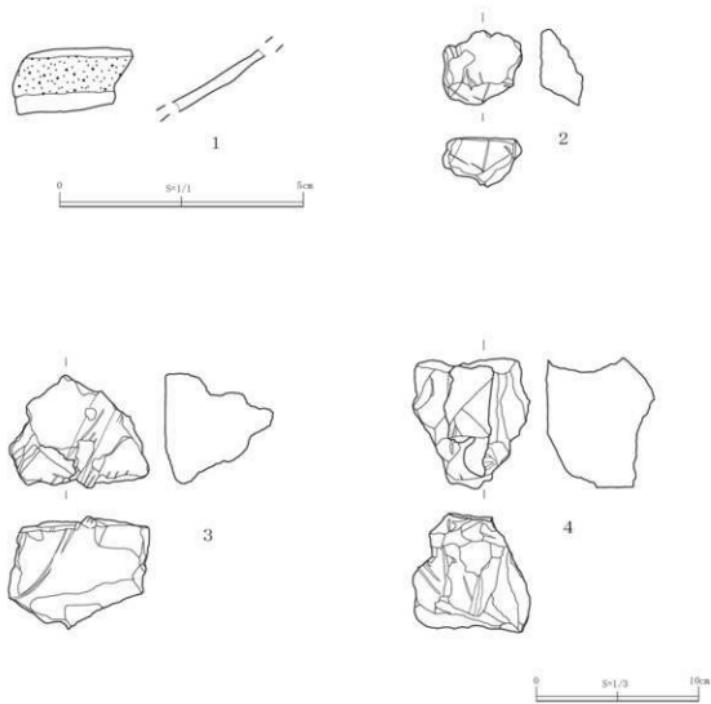
第81図 S L2136出土遺物（3）



第82図 S L 2136出土遺物 (4)

第4表 S.L.2040, 2136出土遺物観察表

	出土位置	遺構	層位等	種別	断面	外表面形	内面調整	底面調整	口径	延径	深高
第17回1	12E(P57)	S1.2040	11~12層	須恵器	坪	—	—	回転ホーリング	0.1, 0	(0.6)	4.7
第17回2	12E(P57)	S1.2040	11~12層	土面器	坪	ロクロナダ	黑色処理	回転ホーリング(左)	0.1, 0	4.9	5.2
第17回3	12E(P56)	S1.2040	13層	須恵器	便	研磨	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—
第17回4	12E(P57)	S1.2040	12層	土面器	台付坪	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	—	7.6	—
第17回5	12E(P52)	S1.2040	26~27層	土面器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング	—	4.1	—
第17回6	12E(P58)	S1.2040	12~13層	土面器	便	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(20.9)	—	—
第17回7	12E(P57)	S1.2040	12~13層	土面器	便	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(4.3)	—	—
第17回8	12E(P57)	S1.2040	12層	土面器	便	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(9.2)	—	—
第17回9	12E(P57)	S1.2040	11~12層	土面器	便	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(8.2)	—	—
第17回1	12E(P56)(P57)	S1.2040	11~13層	土面器	便	ロクロ	ロクロ	ロクロ	—	9.1	—
第17回2	12E(P57)	S1.2040	12層	土面器	便	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(12.6)	—	—
第17回3	12E(P75)	S1.2040	6~7層	石皿	圓	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
出土位置	遺構	層位等	種別	断面	外表面形	内面調整	底面調整	長さ	幅	厚さ	
第17回4	12E(P57)	S1.2040	12層	磚	—	—	—	—	(0.0)	(4.8)	(1.1)
第17回5	12E(P57)	S1.2040	12層	磚	—	—	—	—	(5.2)	(3.3)	(3.0)
第17回6	12E(P57)	S1.2040	11~12層	木製品	盒身	—	—	—	26.2	1.6	0.5
第17回7	12E(P58)	S1.2040	12~13層	木製品	蓋	—	—	—	23.5	0.6	0.3
第17回8	12E(P57)	S1.2040	11~12層	木製品	直板	—	—	—	(16.0)	(2.9)	0.4
第17回1	20E(MTS2NAS1)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(3.2)	(5.2)	4.1
第17回2	20E(MAS0NAS1)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(2.0)	(5.4)	4.2
第17回3	20E(MTS2)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(2.9)	5.2	4.6
第17回4	20E(MTS2)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(3.6)	5.2	4.1
第17回5	20E(MTS2)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング	—	5	(2.3)
第17回6	20E(MTS2-S3)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(3.2)	6.4	4.3
第17回7	20E(MTS2-S3)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(2.6)	(5.4)	3.7
第17回8	20E(MTS2)	S1.2136	2層	須恵器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回1	20E(MTS1)	S1.2136	2層	須恵器	蓋	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回2	20E(MAS0)	S1.2136	2層	須恵器	蓋	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回3	20E(MTS2)	S1.2136	2層	須恵器	蓋	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回4	20E(MTS2)	S1.2136	2層	須恵器	蓋	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(2.6)	—	—
第18回5	20E(MTS1)	S1.2136	2層	須恵器	蓋	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(3.2)	—	—
第18回6	20E(MTS2-NAS0+S1)	S1.2136	2層	須恵器	便	研磨	研磨	—	—	—	—
第18回7	20E(MTS2-S3+S1)	S1.2136	2層	須恵器	便	研磨	研磨	—	—	—	—
第18回8	20E(MTS2-S3+S1)	S1.2136	2層	土面器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(5.0)	5.4	6.5
第18回9	20E(MAS0)	S1.2136	2層	土面器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(3.6)	5.2	4.4
第18回10	20E(MAS0)	S1.2136	2層	土面器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(3.0)	5.6	6.7
第18回11	20E(MTS1)	S1.2136	2層	土面器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(1.4)	(6.6)	3.5
第18回12	20E(MAS0)	S1.2136	2層	土面器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	—	5.2	(2.6)
第18回13	20E(MTS1)	S1.2136	2層	土面器	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(3.4)	(5.4)	4.3
第18回14	20E(MTS2-NAS0+S1)	S1.2136	2層	内里	坪	ハラナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(3.6)	(7.6)	3.5
第18回15	20E(MTS2-NAS0+S1)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	(1.4)	(5.6)	4.9
第18回16	20E(MTS1)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	—	—	—
第18回17	20E(MTS2-NAS0+S1)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	回転ホーリング(左)	—	—	—
第18回18	20E(MAS0)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(5.6)	(2.2)	底面に墨書き「伴」
第18回19	20E(MTS1)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回20	20E(MTS2)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回21	20E(MAS0)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回22	20E(MAS0)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回23	20E(MAS0)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回24	20E(MAS0)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回25	20E(MTS1)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(7.3)	—	—
第18回26	20E(MTS2)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—
第18回27	20E(MAS0)	S1.2136	2層	内里	坪	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—	—



第83図 SKP 2061出土遺物

第5表 SKP 2061出土遺物観察表

出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	口径	底径	周長	備考
8301回1	1層	灰釉陶器	壺	ロクロナゲ→ハケ盛り	ロクロナゲ→ハケ盛り	—	—	—	里田90分類式 9世紀後半
8302回2	1層	陶	壺	—	—	—	—	—	備考
8303回3	1層	陶	壺	—	—	(4.5)	(4.8)	(2.0)	
8303回4	1層	陶	壺	—	—	(7.0)	(8.5)	(6.5)	

第3節 第147次調査の検出遺構と遺物

払田柵跡第147次発掘調査は前年に調査した第143次調査範囲と第145次調査範囲にまたがるほ場整備事業（暗渠設置工事）である。第143次調査範囲を東側調査区、第145次調査範囲を西側調査区とし、更に西側調査区は農道で2分されており南北に分けて調査をおこなった。調査トレンチは外柵推定線と暗渠工事予定地の交点に設定しており、西側調査区をW1区、W2区、…、東側調査区をE1区、E2区、…とした。基本的には1m×1mの幅で調査をおこなっているが必要に応じて拡張している。調査トレンチから遺構を検出しているものもあるが、調査トレンチが限られており遺構が調査トレンチの外にまで伸びていることから遺構の長さは省略する。出土遺物は土師器、須恵器、陶器である。

第147次調査の遺構数総計は材木扉布掘溝跡が2か所、溝跡が1条、柱穴様ピットが1基である。材木扉布掘溝跡の調査にあつては、現状保存を原則とする認識に立ち、遺構確認後に図面・写真の記録を作成した後、埋め戻しを行った。なお、検出した材木扉布掘溝跡2か所は過去に調査が行われたものと連続することから、過去調査分の番号を付している。

1 西側調査区（南側）（第86・87図、図版18・19）

第145次調査区の13区と17区の間に位置し、大部分は水田と麦畑である。調査トレンチはW1区～W21区、W33区～W37区である。検出遺構は布掘溝跡が1条である。

W1区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層（地山土）にあたる。耕作土の厚さは32cmである。Ⅱ層（生活面・遺物包含層）が残存していないことから耕作のために地山面まで削平され、耕作土が造成されたと考えられる。南西～北東方向にのびる布掘溝跡と見られるプランを10YR4/4（褐色土）の上面で10YR4/2（灰黄褐色土）の広がりとして確認した。布掘溝跡の幅は49cmである。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、2か所で角材列と思われる反応を得た。

堆積土の特徴 10YR4/2（灰黄褐色）土主体で10YR5/1（褐色土）土5%、10YR4/4（褐色）土7%、炭化物2%が含まれている。本調査トレンチからは土師器が出土している。

W2区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層（10YR4/3（暗褐色土））にあたる。耕作土の厚さは39cmであり、Ⅲ層上面から南西～北東方向にのびる10YR3/3（暗褐色土）の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は45cmである。W1区で検出した布掘溝跡との位置関係に差異がないことや耕作土やⅢ層には含まれない10YR5/1（褐色土）の土が堆積土に含まれていることからW1の布掘溝跡とW2区の布掘溝跡は同一のものと考えられる。また、布掘溝跡のプランには角材列の一部と思われる木製品が確認できた。

堆積土の特徴 10YR3/3（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐色土）土が30%含まれている。本調査トレンチから遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存していると考えられる。

W3区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層（10YR4/3（暗褐色土））にあたる。耕作土の厚さは10cmであり、Ⅲ

層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/4（暗褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は40cmである。布掘溝跡は一部を南北方向にのびる幅43cmの古い暗渠に切られている。この暗渠は地表面から55cmの位置に埋設されていたが、西側の暗渠埋設工事では70～75cmの深さが必要であることから、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。古い暗渠の下の角材列の有無を確認するためボーリング棒による調査をおこなった。この結果、角材列と思われる反応があり、古い暗渠の下に角材列が残存している可能性がある。

堆積土の特徴 10YR3/4（暗褐色）土主体で10YR3/2（黒褐色）土が15%、10YR5/1（褐灰色）土が15%、炭化物が3%含まれている。本調査トレンチから遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存していると考えられる。

W4区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは0.33mであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は49cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれていることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が7%、10YR4/2（灰黄褐色）土が5%、炭化物が4%を含む。

W5区（第86図、図版19）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは10cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は66cmである。本調査トレンチで検出した布掘溝跡の状況を確認するために完掘した。その結果、布掘溝跡の底部より残存する角材列を検出した。なお、角材列も遺構とみなし、遺物としての取り上げはおこなわなかつた。

堆積土の特徴 本区では平面的に2層に分けられる。①10YR3/2（黒褐色）土が主体で10YR5/1（褐灰色）土が5%含まれている層と②10YR3/2（黒褐色）土が主体で10YR5/1（褐灰色）土が30%含まれている層で①は角材列が埋まっていた層で②が裏込めにあたる。本調査トレンチから遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存している。

W6区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは17cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は37cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれていることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が7%、炭化物が1%を含む。

W7区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは20cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は60cmである。布掘溝跡は一部を南北方向にのびる幅40cmの古い暗渠に切られている。この暗渠は地表面から75cmの位置に埋設されており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、この古い暗渠跡を利用し

て新しい暗渠を埋設することになった。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/3（にぶい黄褐色）土を5%、礫を15%含んでいる。ここは他の調査トレンチと違い砂質土である。古い暗渠を掘りあげたときの壁を見てみるとⅢ層の下に10YR4/3（にぶい黄褐色）土が堆積しており、払田柵創建以前に堆積していた河川跡を掘り込んで角材列を設置していたことがうかがえる。

W8区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは20cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は45cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異が無いことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/3（にぶい黄褐色）土が15%、10YR2/2（黒褐色）土が5%、礫が10%含まれている。砂質土であることから本調査トレンチ下にも河川跡があると考えられる。また南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

W9区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは30cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は51cmである。

他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/2（灰黄褐色）土5%、礫20%を含んでいる。砂質土であることから本調査トレンチ下にも河川跡があると考えられる。

W10区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは19cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は37cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/3（にぶい黄褐色）土10%を含んでいる。

W11区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは16cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は61cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/2（灰黄褐色）土5%、礫15%を含んでいる。砂質土であることから本調査トレンチ下にも河川跡があると考えられる。

W12区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは18cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は52cmである。布掘溝跡のプランには角材列の一部と思われる木製品が確認できた。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が20%、10YR4/2（灰黄褐色）土が10%、炭化物が3%含まれる。南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。本調査トレンチから

遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存していると考えられる。

W13区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは17cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は61cmである。調査トレンチの東側に古い暗渠と思われる溝跡があったが、掘りあげた結果、15cmほどの深さしかなく、他の古い暗渠と違い土管も埋設されていなかったことから搅乱跡と判断した。深さも地表面から30cmほどしかないため、新たな暗渠埋設場所にはならなかった。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土20%が含まれる。また北側と南側の2か所に裏込めと思われる痕跡がある。本調査トレンチからは土師器が出土している。

W14区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは19cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は62cmである。調査トレンチの西側に古い暗渠と思われる溝跡があったが、掘りあげた結果、15cmほどの深さしかなく、他の古い暗渠と違い土管も埋設されていなかったことから搅乱跡と判断した。深さも地表面から35cmほどしかないため、新たな暗渠埋設場所にはならなかった。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が30%が含まれる。また南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

W15区（第86図、図版19）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは24cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は60cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土20%、炭化物3%が含まれる。また南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

W16区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは22cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は60cmである。布掘溝跡の東側は一部が搅乱を受けて壊されている。搅乱された場所は30cmほどで掘り上がり、底面に布掘溝跡と思われるプランが残っていた。ポーリング棒による調査をおこなったが、角材列が残存するような反応は得られなかった。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が20%含まれる。また南北側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

W17区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは24cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東

方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は58cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が30%含まれる。また南北側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。本調査トレンチからは土師器と須恵器が出土している。

W18区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にある。耕作土の厚さは52cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は42cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が30%、炭化物が2%含まれる。また南北側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。耕作土が他の調査トレンチと比べて厚くなっているが東西の壁に布掘溝跡の掘り込みが確認できないことから、この調査トレンチの周囲は他と比べて低く、より多くの造成土（耕作土）が入れられたと考えられる。

W19区（第86図）

水田内に位置し、耕作土、造成土、Ⅱa層（遺物包含層①）からなる。耕作土の厚さは18cm、造成土の厚さは14cmである。耕作土と造成土で分層されるが元は同じ土性であり、耕作を繰り返すことにより土性に変化が生じたものである。Ⅱa層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は40cmである。本区の布掘溝跡の検出は10YR3/1（黒褐色）土から10YR3/2（黒褐色）土を識別する作業で見分けにくい。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が20%、炭化物が3%含まれる。本調査トレンチからは須恵器、磁器、陶器が出土している。

W20区、W21区（第86図）

2つの調査トレンチからは布掘溝跡は検出されなかった。W18区辺りから地形が低くなってしまっており暗渠埋設工事で掘削する70~75cmよりも深い位置に布掘溝跡が残存すると思われる。

W33区（第87図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にある。耕作土の厚さは26cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は53cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が5%、炭化物が3%含まれる。

W34区（第87図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にある。耕作土の厚さは36cmであり、Ⅲ層上面から南西—北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は43cmである。本区の布掘溝跡は南北方向にのびる古い暗渠に切られている。この暗渠は地表部から70cm下に埋設され

ており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、この古い暗渠跡を利用して新しい暗渠を埋設することになった。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が7%、10YR4/2（にぶい黄色）土が40%、炭化物が3%含まれる。

W34区～37区（第87図）

W34区～37区はW1区～W21区、W33区、W34区の調査で確認した暗渠埋設可能箇所だけでは十分な効果が見込めないため急速、暗渠埋設箇所を設定するために調査をおこなったトレンチである。トレンチの設定は、既に古い暗渠の位置を確認していたW7区とW34区から枕暗渠の位置を特定し、ボーリング棒で暗渠に使用されている土管を探しておこなった。検出した暗渠の土管は地表からの70～80cm下に位置し、新たに暗渠を埋設するのに十分な深さがあった。このため、先に確認したW7区とW34区を加えた6つの調査トレンチで暗渠を埋設することになった。

2 西側調査区（北側）（第86・87図、図版18・19）

第145次調査区の10区の東側に位置し、大部分は水田である。調査トレンチはW22区～W32区である。調査区の特徴としてはW23区、W24区には一部にⅡb層が残っておりそこから土師器や須恵器が出土している。W25区～W32区は耕作土直下Ⅲ層になり、遺物の出土もW26区から土師器が出土しただけである。表土の厚さも概ね20cm前後である。Ⅲ層の下に新たな層がないか確認するためW26区とW32区のⅢ層を下げてみたが45cmほど下げてもⅢ層のままであった。検出遺構は溝跡が1条であり、ここではSD2139について説明する。

3 SD2139溝跡（第86・87図、図版18・19）

W22区～W32区の調査トレンチから遺構が検出されなかつたことから、南側にトレンチを拡張した結果確認した遺構である。W26区、W28～W32区の拡張トレンチで検出し、W22区～W25区、W27区では確認できなかった。W27区では重機のキャタピラーとみられる痕跡が残っておりW22区～W32区に係る水田は全体的に削平を受けていると考えられる。水田の南端からの検出であり、一部を枕暗渠（柴暗渠）に切られている。確認部分の幅は50～70cmである。このSD2139は第145次調査で検出したSD2120に向かってのびており同一の遺構の可能性がある。

4 東側調査区（第87・88図、図版18・20）

第143次調査区の東側を南北に通る。大部分は水田と豆畠である。第138次調査で調査区の北側に外柵東門があることを確認している。このため、暗渠は東門を迂回して設置計画が立てられている。本調査区では布掘溝跡と柱穴様ビットを検出している調査トレンチはE1区～E19区である。

E1区（第87図）

東側調査区の最南端で水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR5/1（褐灰色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南～北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は50cmである。布掘溝跡を切るように東～西方向に暗渠がのびている。この暗渠は地表面から70cm下に埋設されており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、それを利

用して新しい暗渠を埋設することになった。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が10%、礫が15%含まれている。

E 2 区（第87図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南—北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は40cmである。E 1 区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が10%、礫が20%含まれている。

E 3 区（第87図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南—北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は70cmである。布掘溝跡内で角材列跡確認した。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が7%、礫が20%含まれている。

E 4 区（第88図）

水田内に位置する。耕作土、造成土、Ⅲ層で耕作土・造成土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南—北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、2か所で角材列と思われる反応を得た。

他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから、同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が5%含まれている。

E 5 区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南—北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が7%含まれている。

E 6 区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南—北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は65cmである。南—北方向にのびる暗渠と切り合っている。この暗渠は地表面から40~45cm下に埋設されてたが、東側の暗渠埋設工事では60~65cmの深さが必要であることから、それを利用した暗渠埋設工事はできなかった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、布掘溝跡の北側で角材列と思われる反応を得た。

堆積土の特徴 10YR3/2（黒褐色）土である。

E 7 区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ

層上面から南一北方向にのびる10YR5/1（褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は50cmである。布掘溝跡を切るように東一西方向に暗渠がのびている。地表面から40～45cm下に埋設され、充分な深さがないことから、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR5/1（褐色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20%含まれている。

E 8区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下III層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは30cmである。III層上面から南一北方向にのびる10YR5/1（褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は85cmである。布掘溝跡を切るように東一西方向に暗渠がのびている。地表面から40～45cm下に埋設され、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR5/1（褐色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が30%含まれている。

E 9区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下III層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。III層上面から南一北方向にのびる10YR5/1（褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は50cmである。暗渠に大きく切られており布掘溝跡は一部しか残存していない。地表面から40～45cm下の位置に埋設され、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。確認のためにサブトレーニチを入れたところ南側に拡張したトレーニチの壁から角材列の抜き取り跡が確認できた。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや暗渠に切られてはいるが、位置関係に大きな差異がないこと、角材列の抜き取り跡が確認出来たことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR5/1（褐色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が10%含まれている。

E 10区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下III層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。III層上面から南一北方向にのびる10YR5/1（褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。本区の耕作土から須恵器が出土している。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR5/1（褐色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20%含まれている。

E 11区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下III層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。III層上面から南一北方向にのびる10YR5/1（褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。本区の耕作土から土師器が出土している。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴 10YR5/1（褐色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20%含まれている。

E 12区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下III層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。III層上面から10YR3/2（黒褐色）土の広がりを確認したが形状は不整形で遺物も出土していないことから年代及び性格は不明である。この場所は昭和5年に調査をおこなっており、その時の調査痕跡の可

能性がある。ここでは柱穴を1基検出しており、ボーリング棒による調査の結果、柱材が残存していることがわかった。昭和5年の調査では柱材を検出するまで下げているため、この柱穴のプランは埋め戻されたプランの可能性もある。

E 13区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土、造成土、III層で耕作土・造成土の厚さは20cmである。III層上面から南北方向にのびる10YR5/1（褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は45cmである。布掘溝跡の東側を暗渠が切っている。地表面から70cm下に埋設されており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、この古い暗渠跡を利用して新しく埋設することになった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、角材列と思われる反応を得た。

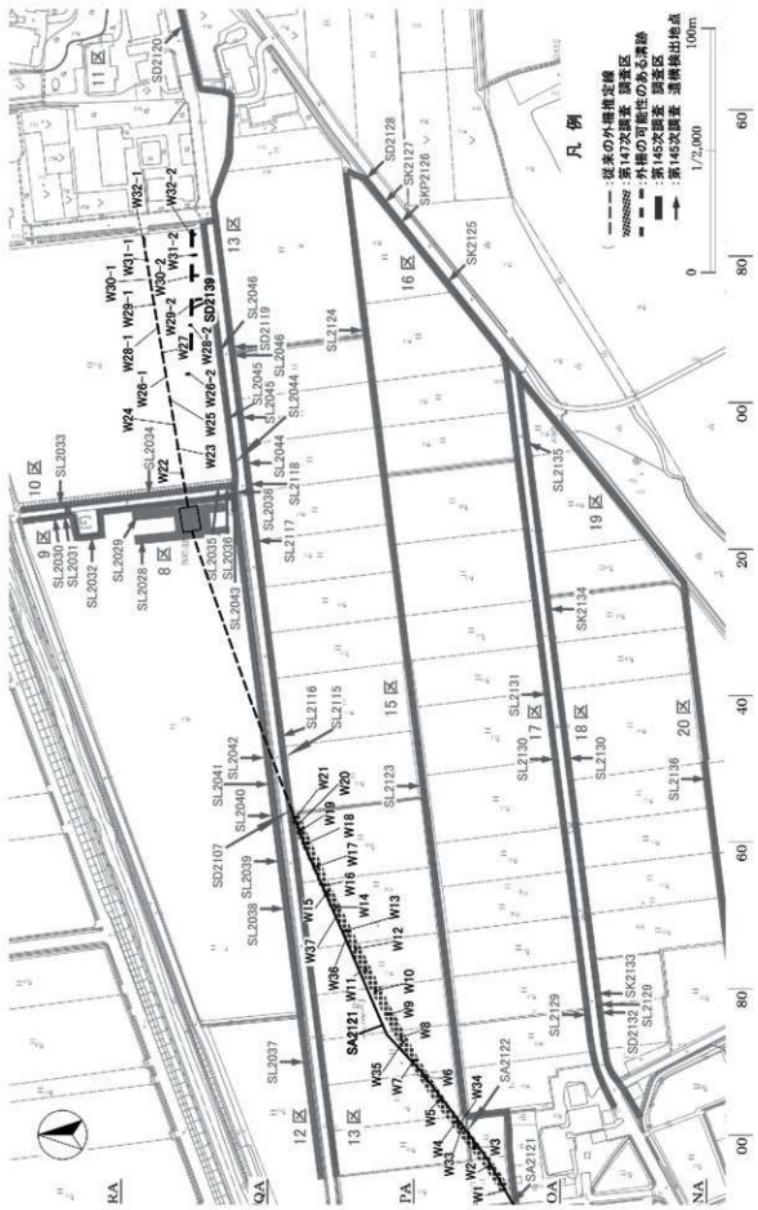
堆積土の特徴 10YR5/1（褐色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20%含まれている。

E 14区・E 15区

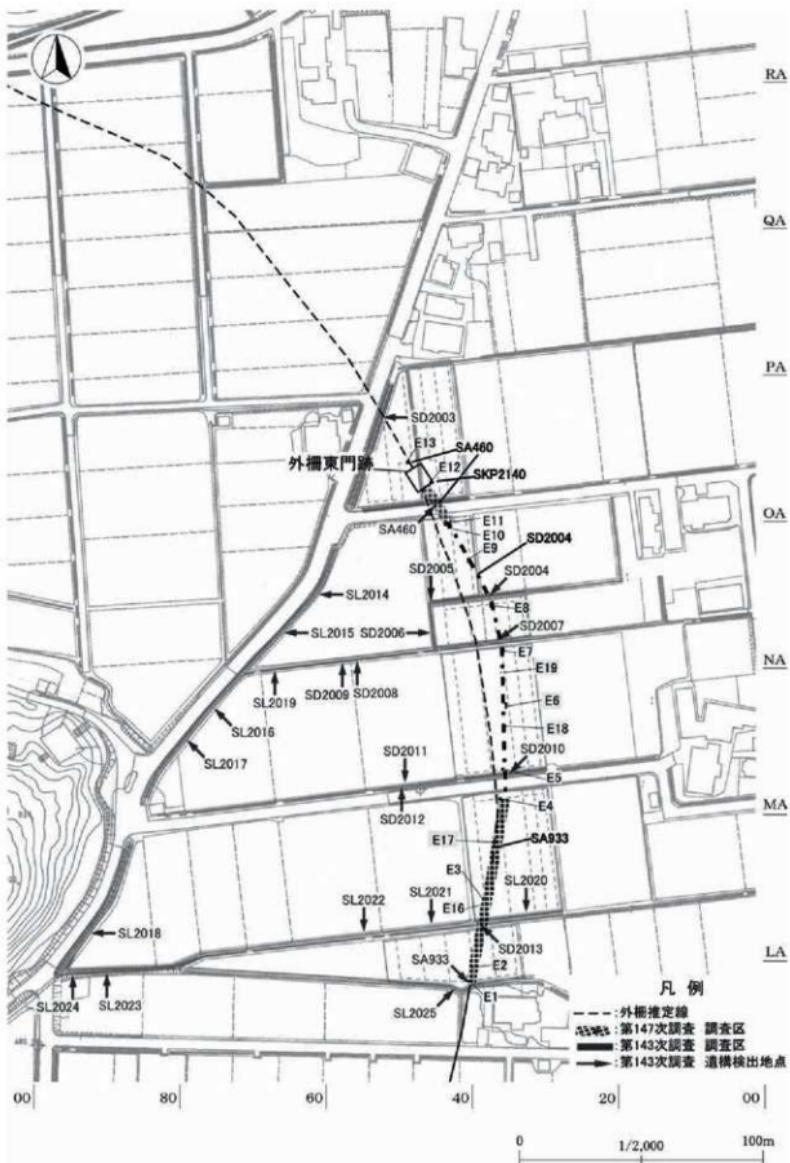
両区から布掘溝跡などの遺構は検出しなかった。表土、耕作土の下は礫、木片を含む黒色土、十和田a火山灰、黒褐色土の順に堆積している。礫と木片を含む黒色土は河川堆積層であり、十和田a火山灰は二次堆積したものである。黒褐色土は第145次調査で確認した遺物包含層①、②に土性が類似しておりがトレンチ調査では黒褐色土が河川堆積によるものか遺物包含層①、②のかは特定できなかった。15区の耕作土から土師器と須恵器（墨書き土器）が出土した。

E 16区～E 19区（第88図）

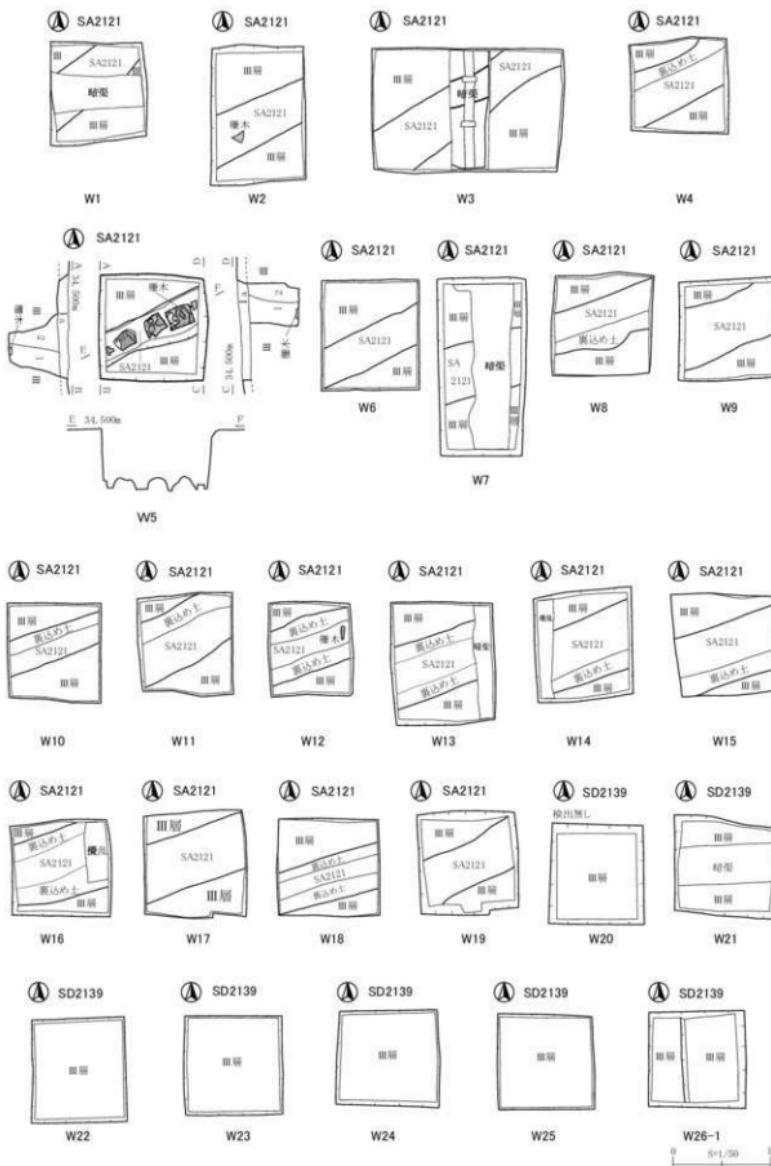
E 16区～E 19区はE 1区～E 15区の調査で確認した暗渠埋設可能箇所だけでは十分な効果が見込めないため急遽、追加設定するために調査をおこなったトレンチである。トレンチは、既に古い暗渠の位置を確認していたE 1区、E 6区、E 7区、E 8区、E 9区、E 13区から枕暗渠の位置を特定し、ボーリング棒で暗渠に使用されている土管を探して設定した。検出した暗渠の土管は地表から70～80cm下にあり、新たに暗渠を埋設するのに十分な深さがあった。このため、先に確認したE 1区とE 13区を加えた8の調査トレンチで暗渠を埋設することになった。E 6区、E 7区、E 8区、E 9区は暗渠の深さが地表面から40～50cmと東側調査区の暗渠工事に必要な60cmの深さに足りなかつたため除外した。



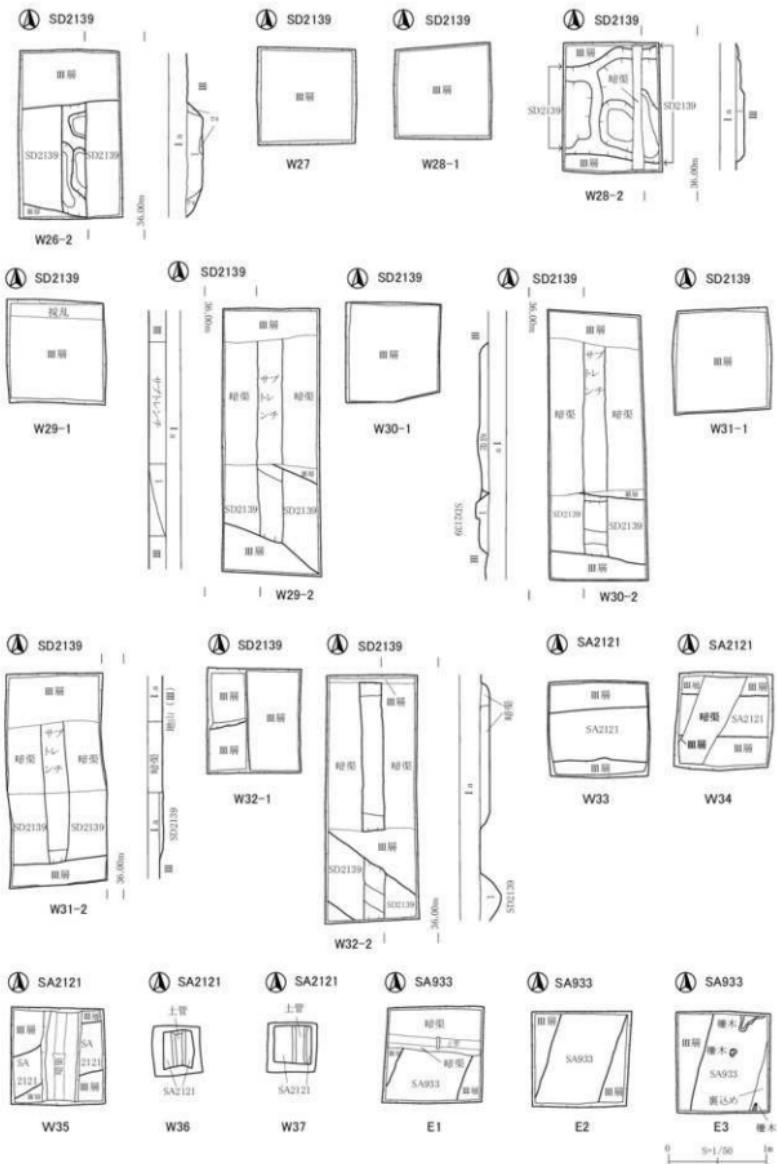
第84図 第147次調査 調査区位置図(外柵北門周辺地区)



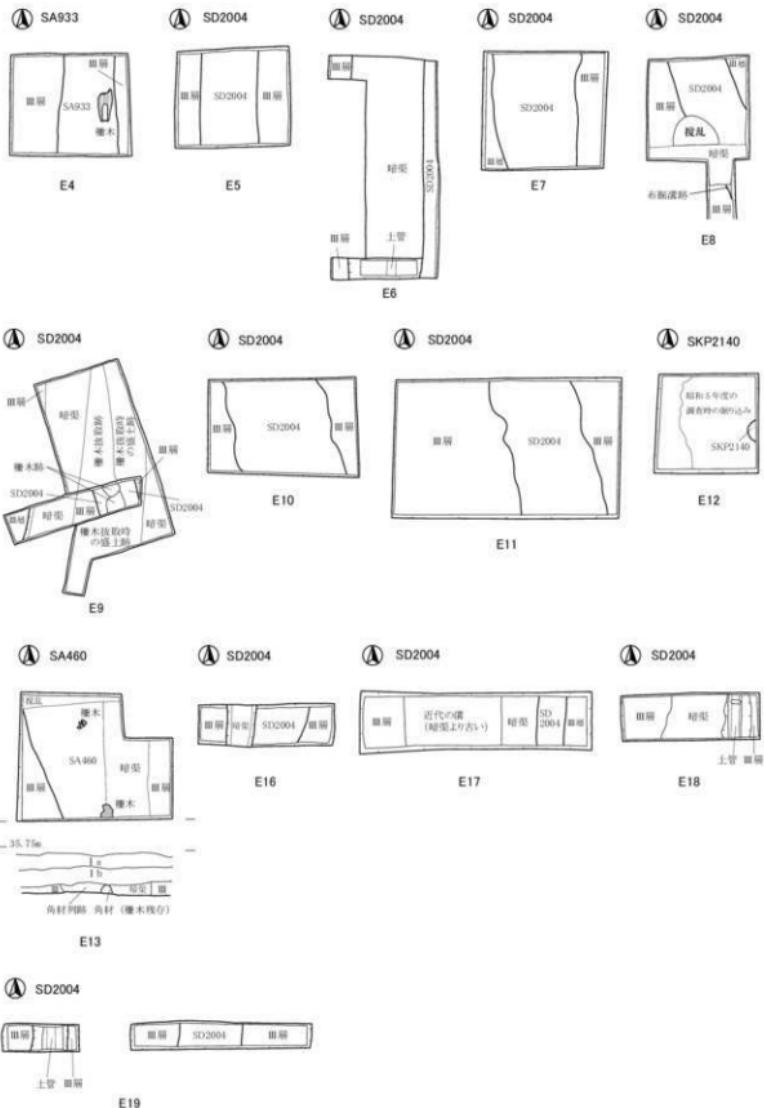
第85図 第147次調査 調査区位置図（外柵東門周辺地区）



第86図 第147次調査地点平面図（1）



第87図 第147次調査地点平面図(2)



第88図 第147次調査地点平面図（3）

第4節 遺構外出土遺物

(1) 第143次調査

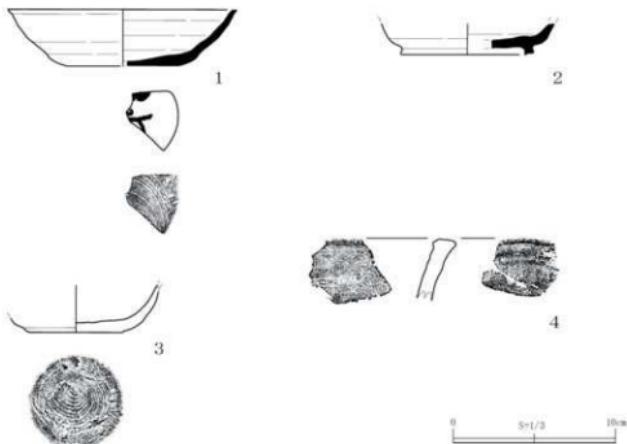
遺構外から須恵器、土師器、内黒土師器、剥片石器、礫石器、木製品が出土した。ここではそれらの内、細片を除くいくつかの遺物を掲載する。なお、個々の遺物の詳細は第7～9表に示す。第90図2・第90図3・第91図2は墨の付着が認められることから転用硯である。また、第90図3の底面には墨書「本」が認められる。第92図2の表面には鋭利な金属器を研いだような凹みが多数あり、磨り石を古代以降に転用した可能性がある。

(2) 第145次調査

遺構外から須恵器、土師器、瓦、須恵器系中世陶器、剥片石器、石製品が出土した。なお、個々の遺物の詳細は第10～11表に示す。第93図3は墨の外面に墨痕がみられるが、断面には認められないことから使用後に意図的に破碎したと考えられる。転用硯若しくは廃棄儀礼に伴う遺物である可能性がある。

(3) 第147次調査

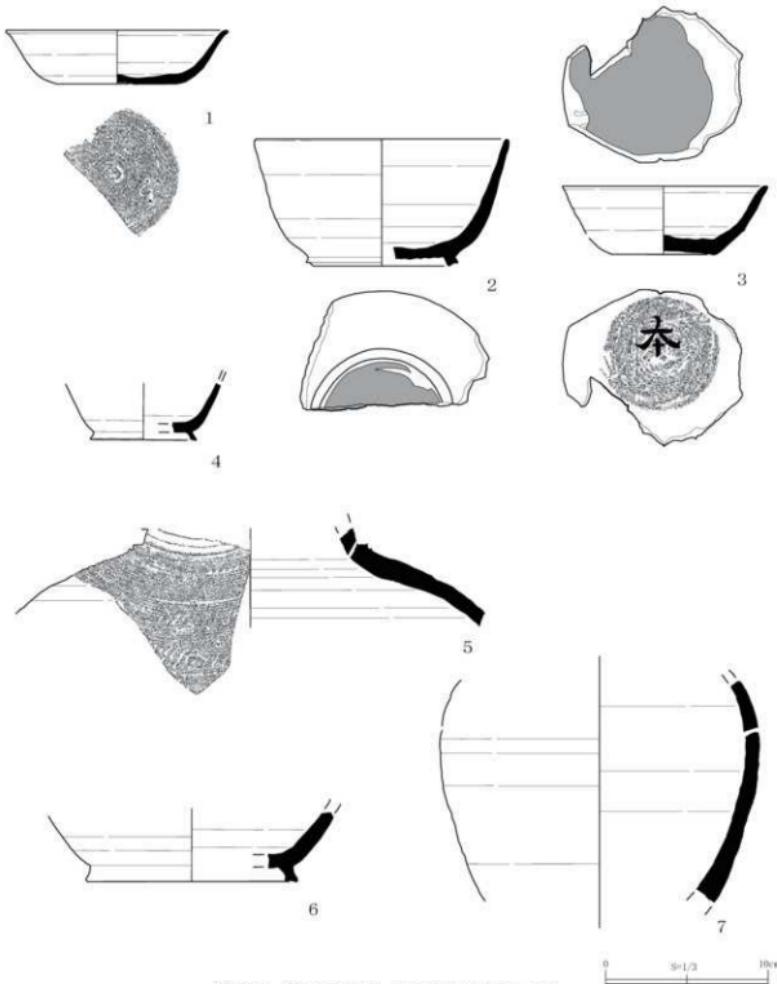
遺構外から須恵器、土師器、瓦須恵器系中世陶器、木製品が出土した。個々の遺物の詳細は第6表に示す。



第89図 第147次調査 遺構外出土遺物

第6表 第147次調査 遺構外出土遺物観察表

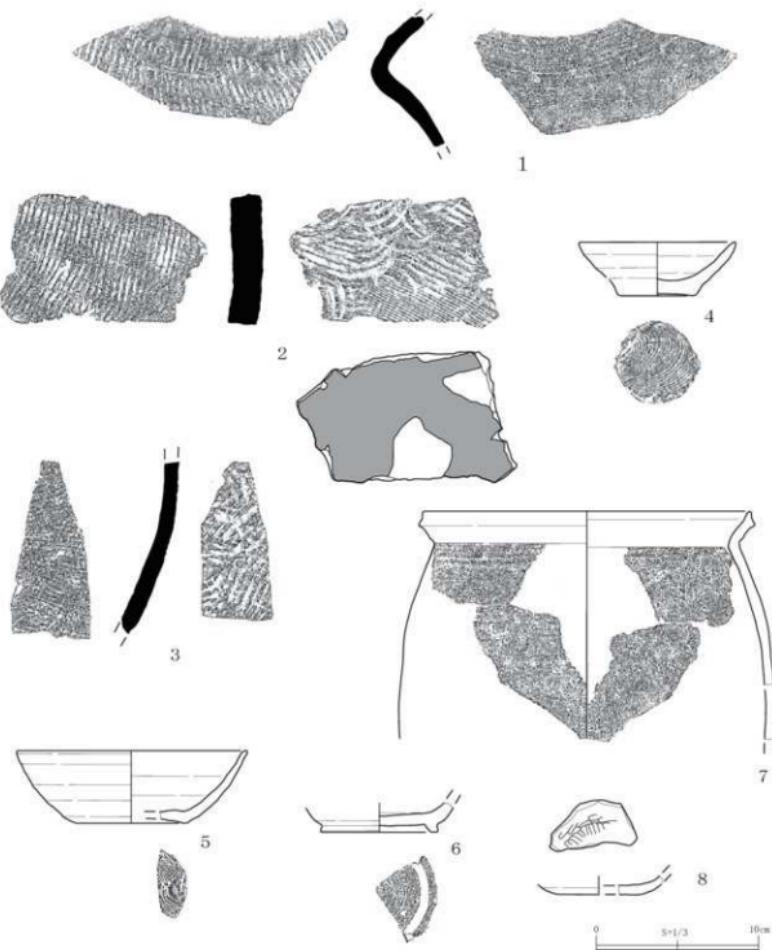
No.	出土位置	層位等	種別	種類	外面調整	内部調整	底面調整	口径	底径	高さ	備考
第89001	II-2 S137	1.5層	須恵器	折	クロロチフ	クロロチフ	回転赤切り(右)	(3.4)			墨書きあり 回流不適
第89002	II-2 ST132	1.5層	須恵器	折	クロロチフ	クロロチフ					(4.1)
第89003	II-2 0902	1.5層	土師器	折	クロロチフ	クロロチフ	回転赤切り(左)	(3.8)			
第89004	II-2 PP97	1.5層	須恵器系中世陶器	變	クロロチフ	クロロチフ					



第90図 第143次調査 遺構外出土遺物（1）

第7表 第143次調査 遺構外出土遺物観察表（1）

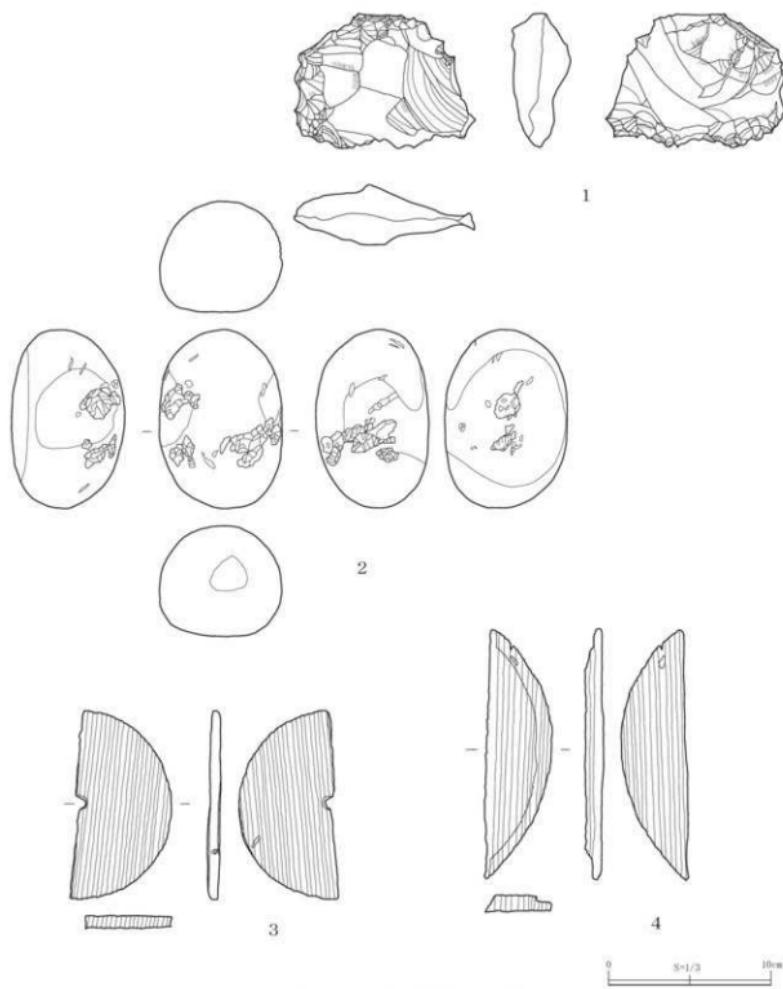
出土位置	層位等	種別	断面	外面調査	内部調査	底面調査	口径	底径	周長	備考
Ⅲ-1100375	上層	乳頭器	片	ロクロナデ	ロクロナデ	円形へラ切り	6(3.6)	(7.4)	3.3	
Ⅲ-1100856	上層	乳頭器	片	ロクロナデ	ロクロナデ		15.6	8.4	7.8	
Ⅲ-1100823	C-1100328	乳頭器	片	ロクロナデ	ロクロナデ	円形へラ切り	12.0	6.4	6.2	墨書き「木」
Ⅲ-1100814	C-1100318	乳頭器	片	ロクロナデ	ロクロナデ			(6.5)		
Ⅲ-1100815	C-1100324	上層	乳頭器	片	ロクロナデ	ロクロナデ				
Ⅲ-1100816	C-4103A59	乳頭器	直	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ				13.0	
Ⅲ-1100376	上層	乳頭器	裏	ロクロナデ	ロクロナデ					



第91図 第143次調査 遺構外出土遺物（2）

第8表 第143次調査 遺構外出土遺物観察表（2）

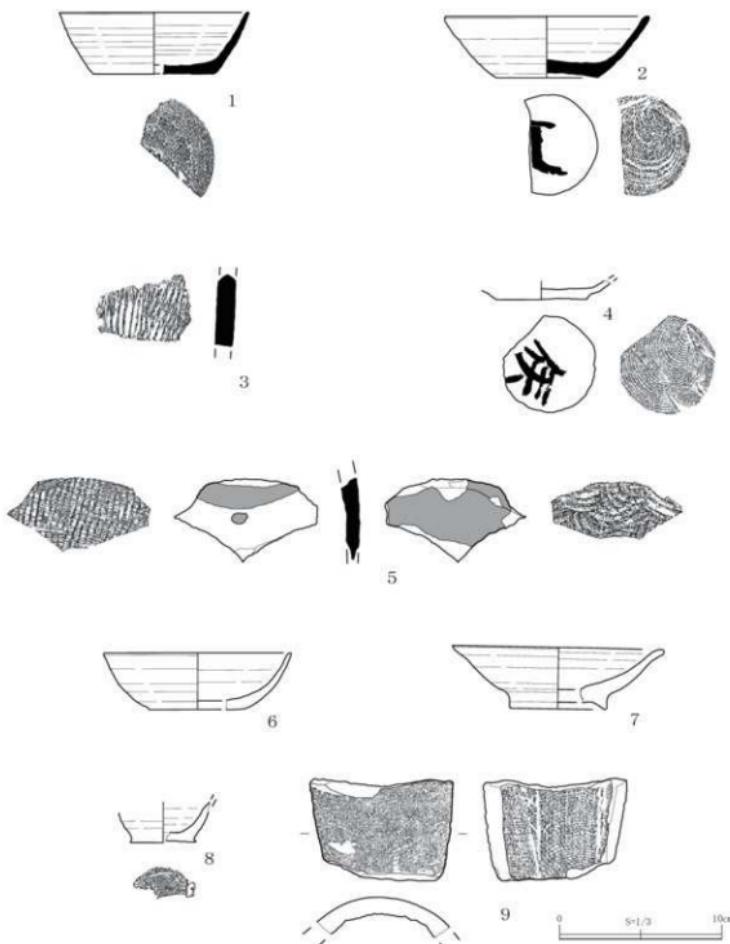
	出土位置	層位等	種別	断面	外面調整	内面調整	底面調整	口縁	底縁	脚部	備考
第91図1	C-110605	IV層 里窯跡	甕	横	ロクロナダ 一叩き	ロクロナダ					
第91図2	C-710309	I層 里窯跡	甕	叩き	叩き						
第91図3	C-605370	I層 里窯跡	甕	叩き	叩き						
第91図4	C-101307	IV層 土焼跡	所	ロクロナダ	ロクロナダ	内面(面切り(右))	9.6	4.5	3.3	内面に火炎痕	
第91図5	C-614131	I層 土焼跡	所	ロクロナダ	ロクロナダ	内面(面切り)	(34.2)	96.60	4.5		
第91図6	C-303340	I層 土焼跡	所	ロクロナダ	ロクロナダ			17.40			
第91図7	C-110805	I層 土焼跡	甕	ハフロナダ ハケ目	ハフロナダ ハケ目	ハフロナダ ハケ目	—	20.2			
第91図8	C-603102	I層 内里土焼跡	所	ロクロナダ	ロクロナダ 一ヘラミガタ				5.2		



第92図 第143次調査 遺構外出土遺物（3）

第9表 第143次調査 遺構外出土遺物観察表（3）

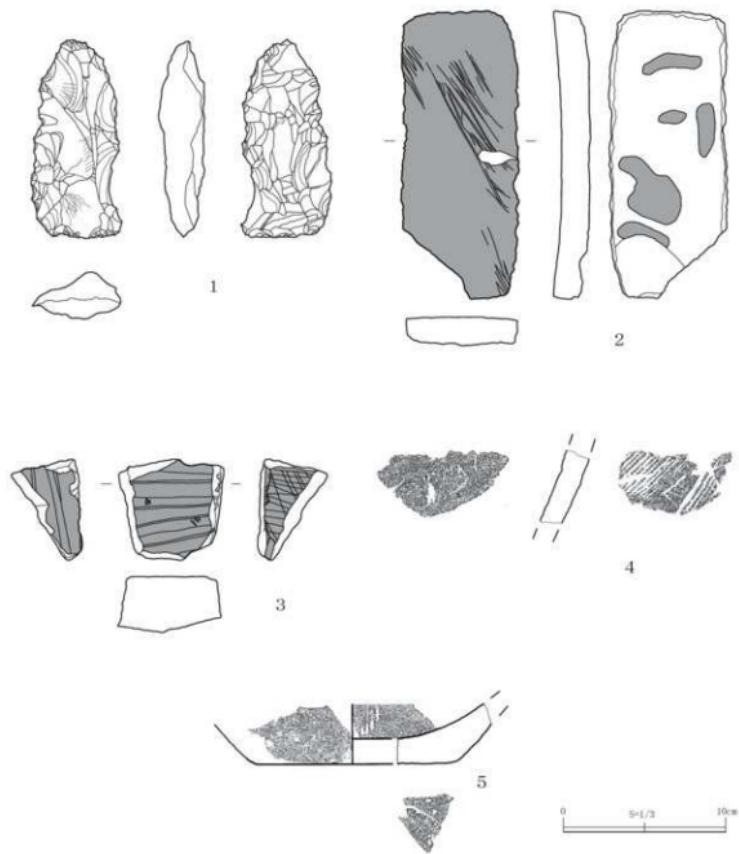
	出土位置	層位等	種別	基種	長さ	幅	厚さ	備考
第90回1	C-38CK3D	1層	石器	スクレーフツル	5.5	7.4	1.4	
第90回2	C-38CLP32	1層	鍛石器	解石	11.0	7.5	6.9	
第90回3	C-1KOR31	鉢	木製品	曲物底板	(15.1)	(3.9)	6.9	中央に穿孔
第90回4	C-1KOH34	1層	木製品	曲物底板	11.4	10.10	6.0	



第93図 第145次調査 遺構外出土遺物（1）

第10表 第145次調査 遺構外出土遺物観察表（1）

出土箇所	編行番号	種別	面種	外面調整	内部調整	口径	底径	高さ	備考
第93段1	12K(0837)	直縁	直底盤	跡	ロクロ	ロクロ	—	—	—
第93段2	17K(0829)	直縁	直底盤	跡	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	底面に擦傷（判明不確）
第93段3	13K(0199)	直縁	直底盤	跡	タテキ	タテキ	—	—	外面、前面に擦傷あり。転用組合。
第93段4	20K(0752)	直縁	直底盤	跡	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	底面に擦傷（伊？）
第93段5	12K(0692～93)	直縁	直底盤	跡	—	—	—	—	転用組
第93段6	20K(0751)	直縁	直底盤	跡	ロクロナダ	ロクロナダ	—	(11.6) (6.0)	3.5 内面上面と外面にスス状固化物付着。 不明謎？
第93段7	15K(0855)	直縁	直底盤	直	ロクロ	ロクロ	—	(13.0) (6.0)	3.8
第93段8	15K(0935)	直縁	直底盤	直	—	—	—	—	—
第93段9	20K(0752)	直縁	直	丸	丸	—	—	—	—



第94図 第145次調査 遺構外出土遺物（2）

第11表 第145次調査 遺構外出土遺物観察表（2）

出土箇所	層位等	種別	基盤	外面調整	内面調整	底面調整	長さ	幅	厚さ
第94図1	200C 060643	粗石	剥片石器	石核	—	—	9.1	3.7	2.1
第94図2	130CQ085~86	1層	粗石	—	—	—	17.7	6.0	1.8
第94図3	120P02	1層	粗石	—	—	—	6.6	3.6	—
出土位置		剥離等	基盤	外面調整	内面調整	底面調整	口徑	底径	断面
第94図4	130CP137	1層	剥離基 底面調	粗跡	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	—
第94図5	130CQ97	1層	剥離基 底面調	粗跡	ロクロナダ	ロクロナダ	—	—	(12.2)

第5章 総括

本堂城回地区のほう整備事業に係る発掘調査は第143次、第145次、第147次調査の3次にわたって行われた。対象となった調査区は外柵北門周辺と外柵東門周辺の2つの地区であり、本章ではその地区ごとに調査の成果と今後の課題をまとめ、総括したい。

第1節 外柵北門周辺地区

1 外柵北門跡

外柵北門跡を確認するために、推定地に9.8m×8mの規模でトレンチを設け、面的に調査を行った（第145次調査8区）。しかし、表土（耕作土）直下で地山が露出し、結果として北門の痕跡は確認できなかった。8区東側を南北に走る農道の高さから、本来は北西方向に緩やかに傾斜する地形であったことが北側に残っている墓地や地権者の話から推定されるが、耕地整理により農道以西を切土し水田造成したためと考えられる。北門跡推定地付近での農道から水田面までの比高は約1.7mあり、柱穴掘形があったとしても削平された可能性が高い。このような状況から外柵北門は從来の認識通り、すでに滅失したものと考えられる。

2 外柵材木塀

外柵周辺地区において材木塀を初めて検出したのが第145次調査であり、15区において2か所確認した（S A2121・2122）。第147次調査では、この2か所の間（W1～3）、さらには北西側（W4～19）で外柵線を確定した。第145次調査時では2か所で検出した材木塀が同一のものである確認がなかったため遺構番号を2つ付しているが、第147次調査の結果、同一の材木塀としたほうが妥当であるという結論に至ったため、外柵北門周辺地区の北門以西で確認した外柵線についてはS A2121に統一した。W20・21では暗渠掘削深度（約70cm）では布掘溝跡の検出面には到達せず、旧地形は北に向かって下がっていくことが分かった。また、第145次調査確認のS D2107はS A2121の延長線上に位置するため布掘溝跡である可能性が高い。

S D2107以東では材木塀・布掘溝跡は検出できず、北門同様に耕地整理により削平されたと考えられる。北門跡推定地東側（W22～34）の外柵推定線上でも外柵の痕跡は検出できなかった。しかし、外柵推定線より南（W26・28～32）でS D2139を確認した。この溝跡を検出した水田もまた耕作土直下に地山が露出することから、耕地整理のための整地が行われ、上部が削平されたと想定される。この溝跡が断続的ではあるが北門跡地に向かっていること、推定線上では外柵の痕跡が全く見つからないことから、今回検出したS D2139が布掘溝跡の底部が残存したもの可能性はある。また、第145次調査で検出したS D2120も位置的には北門跡とS D2139の延長上にあり、同一の溝跡と考えられる。外柵北門から東門にかけては外柵線配置状況が不明瞭な地域であり、今後の外柵線確定のための目安となる資料を得ることができたことは一つの成果である。

3 外柵外の遺構

第145次調査13区西端部において柱穴と土坑がまとめて検出されている。これらの遺構は外柵線

から北（外側）50m程に位置し、柱穴のうち1基（SKP2057）では柱痕跡中から土師器甕と須恵器甕の破片が重なった状態で出土し、儀礼行為と考えられる。

柱穴出土遺物は10世紀初頭に属する可能性が高い。また、SKP2061からは愛知県猿投窯跡群の一つ黒雀90号窯式の灰釉陶器皿（第83図1）註1と埠（第83図2～4）が出土している。これから、外柵の外側に9世紀後半から10世紀初頭にかけて建物施設があった可能性が高いことがわかる。今回調査対象となった外柵北門周辺の沖積地は、払田柵跡の中でも過去の調査事例が少なく、これまで、遺構の分布状況は不明確であった。矢島川が入り江状に蛇行する部分に近接する外柵の外側において、規模や形態は不明ながら、外柵滅失後である9世紀後半以降も建物が存在したことを示す柱穴が確認されたのは一つの大きな成果と言えよう。

第2節 外柵東門周辺地区

1 外柵東門跡と周辺地形

外柵東門の位置は第138次調査において特定されており、今回の調査では第138次調査時の図面を基に東門の位置を復元し、ボーリング探査によって位置を確定した。南東隅の柱穴のみボーリング探査では確定できなかつたためトレンチ（E12）を設定し、掘り下げ位置を確定した（SKP2140）。第138次調査ではボーリング探査により、東門の西（内）側約2mに木材が広く分布することが確認されていた。門に関係する部材片、もしくは門造営に先立つ地盤整備に関係するものである可能性が指摘されていたが、第147次調査の結果（E14）、外柵滅失後に堆積した洪水平積物層中の木材片であることが明らかとなつた。東門は沖積地内の微高地上に造営されていたため、洪水の影響を受けやすかつたとみられる。E13では地表下40cmで木材層が確認できたが、同一水田に設定したE15では暗渠掘削深度（約70cm）で布掘溝跡確認面の検出はできなかつた。旧地形が北に向かって下がっていたことが分かる。また、東門の南でもE18からE17にかけては耕作土直下が地山ではなく造成土が確認されたことから、東門造営以前の旧地形は門の基礎レベルよりも低かったと考えられる。このように外柵東門の南北は低地であり、門はわずかな範囲の微高地を選び周囲の低地を整地しながら造営したことが再確認された。

2 外柵木材埠

第143次調査により、外柵の一部は従来の推定ラインよりも5m程東（外）側に膨らむことが明らかとなり、第147次調査ではその状況を再確認するとともに、外柵線をより詳細に確認することができた。これにより一部が史跡指定地外へ膨らむことも明らかとなつたが、この部分については近い将来追加指定措置を取る必要がある。

第147次調査E9では布掘溝跡を切る不整形な溝状プランを確認している。角材列を抜き取る際の掘り込み痕跡と推定される。E5～10では布掘溝跡を検出するも、ボーリング探査では角材列に当たらなかつた。これらのトレントを設定した水田3面では開墾の際に角材列を抜き取っている可能性がある。なお、第143次調査において布掘溝跡と推定されていた溝跡4条（SD2004・2007・2010・2013）は第147次調査の結果、同一の布掘溝跡としたほうが妥当であるという結論に至つたため、第147次調査以降SD2004とした。

註1 井上喜久男氏の教示による。



第143次調査

- 1 調査区遠景（南西→）
外郭東門付近から1区北部・2区・
3区・4区方面を望む



- 2 調査区遠景（西→）
外郭東門付近から1区中央部・
5区方面を望む



- 3 調査区遠景（北西→）
外郭東門付近から1区南部・
6区・7区方面を望む

第143次調査



1 1区北部 調査完了状況（北→）



2 1区北部 SD 2003土層断面
(西→)



3 1区中央部 調査完了状況
(北東→)



1 1区中央部 S L 2014土層断面
(北西→)
火山灰検出状況(H-ライン)



2 1区中央部 S L 2014・2015
土層断面 (北西→)
SL2014南端部立ち上がり及び
SL2015北端部立ち上がり状況



3 1区中央部 S L 2015土層断面
(北西→)
南端部立ち上がり状況



第143次調査

1 1区中央部 S.L.2016土層断面
(北西→)
南端部立ち上がり状況



2 1区中央部 S.L.2017土層断面
(北西→)
北端部立ち上がり状況



3 1区中央部 S.L.2017土層断面
(北西→)
南端部立ち上がり状況

第143次調査



1 1区中央部 S-L 2017土層断面
(北→)
(O-Pライン)



2 1区南部 調査開始前状況
(南西→)



3 1区南部 S-L 2018土層断面
(南西→)

第143次調査



1 2区 調査完了状況（西→）



2 2区 SA 460土層断面（北→）



3 3区東西ライン 調査完了状況
(西→)



1 3区 SD2004完掘状況（南→）
底面より板状加工木出土



2 3区 SD2005土層断面（南→）



3 3区 SD2006完掘状況（東→）

第143次調査



1 4区 調査完了状況（西→）



2 4区 SD2007完掘状況（北→）



3 4区 SD2008完掘状況（南→）

第143次調査



1 4区 S D2009完掘状況（南一）



2 4区 S L2019土層断面
(南西→)



3 5区 調査完了状況（東一）

第143次調査



1 5区 SD2010完掘状況（南→）



2 5区 SD2011完掘状況（北→）



3 5区 SD2012完掘状況（北→）



1 6区 調査完了状況（東→）



2 6区 SD2013完掘状況（北→）



3 6区 SL2020土層断面
(南西→)

第143次調査



1 6区 S L 2021土層断面
(南西→)



2 6区 S L 2022土層断面
(南西→)



3 6区 S L 2023土層断面
(南西→)

第143次調査



1 6区 S L 2024土層断面（南一）



2 7区 調査完了状況（西一）



3 7区 S A 933確認状況
(北西→)

第145次調査



1 調査区全景①政庁側から
(南→)



2 調査区全景②政庁側から
(南→)



3 13区 SK2051, 2052,
SKP2053完掘状況 (北→)



1 13区 SKP2057完掘状況
(北→)



2 13区 SD2073~2077確認状況
(東→)



3 13区 SD2073~2077完掘状況
(西→)

第145次調査



1 13区 SD 2107完掘状況（東→）



2 13区 SD 2120土層断面（北→）



3 8区東西トレンチ 精査完了
(南→)

第145次調査



1 8区東西トレンチ 精査完了
(東→)



2 15区 S A2121完掘状況 (北→)



3 15区 S A2122完掘状況 (南→)

第147次調査



1 西側調査区全景（北西→）



2 西側調査区全景（西→）



3 東側調査区全景（南西→）

第147次調査



1 W5区 角材列完掘状況
(南西→)



2 W15区 布掘溝跡検出状況
(南西→)



3 W26区 南側拡張部検出溝跡
確認状況 (西→)

第147次調査



1 E 13区 棚木検出状況（北→）



2 E 14区 布振溝跡確認状況
(北→)



3 E 12区 東門柱穴確認状況
(南→)

調査トレンチ中央に見える黒い
プランが昭和5年度に調査した
トレンチ跡と考えられる。右斜
め下に柱穴が確認できる。

報告書抄録

ふりがな 書名	ほりがな かくと がい じ わうき ほりがな						
副書名	払田柵跡－第143・145・147次調査報告書－						
卷次	県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	IV						
シリーズ番号	秋田県文化財調査報告書						
編著者名	第495集						
編集機関	加藤 竜・佐々木尚人・高橋和成						
所在地	秋田県大仙市払田字牛嶋20 TEL 0187-69-3331						
発行機関	秋田県教育委員会						
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王三丁目1番1号						
発行年月日	西暦2014年9月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
払田柵跡	秋田県大仙市 払田 仙北郡美郷町 本堂城回	212 434	53-1 54-1	39° 28' 06°	140° 32' 57°		ほ場整備事業 に係る事前発 掘調査
第143次:美郷 町本堂城回字 森崎					20110912 & 20111205	1,217m ²	
第145次:美郷 町本堂城回字 百目木					20120603 & 20121106	3,368m ²	
第147次:美郷 町本堂城回字 森崎～百目木					20131007 & 20131122	80m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
払田柵跡 第143次	集落跡	平安時代	材木塀 跡5条、溝跡6条、河川跡 12か所	材木塀布掘溝跡2条、材木塀 跡5条、溝跡6条、河川跡 12か所	土師器、須恵器、木製品、 角材、外	外柵東門周辺における ほ場整備事業に係 る事前調査。	
払田柵跡 第145次			材木塀布掘溝跡2条、溝跡 42条、土坑11基、柱穴24 基、河川跡30か所	材木塀布掘溝跡2条、材木塀 跡5条、溝跡6条、河川跡 12か所	土師器、須恵器、木製品、 外	外柵北門周辺における ほ場整備事業に係 る事前調査。	
払田柵跡 第147次			材木塀布掘溝跡2条、溝跡 1条、柱穴1基	材木塀布掘溝跡2条、材木塀 跡5条、溝跡6条、河川跡 12か所	土師器、須恵器、木製品、 (柵木)、外	外柵北門・東周辺に おけるほ場整備事業 に係る事前調査。	
要約	本調査はほ場整備事業に係る事前調査で3か年の計画で実施された。第143次では外柵東門周辺における材木塀の位置が、予想された位置より5mほど東方で、一部が史跡指定地外となることがあきらかとなった。第145次は外柵北門周辺における土地変更の様相が、ある程度把握された。また調査区北西部において、外柵線より50mほど外側に10世紀初頭と考えられる遺構群が検出され外柵滅失後における柵間連遺構と考えられる。第147次は前年の調査で確認した外柵の続きの一部を検出し部分的ではあるが外柵の位置が確認できた。						

秋田県文化財調査報告書第495集

払 田 檻 跡

第143・145・147次調査

一県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書IV－

印刷・発行 平成26年9月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 (0187) 69-3331 FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号

電話 (018) 860-5193

